銀色ふわり

有沢まみず

イラスト／笛



電撃文庫

銀色ふわり

雪が降りそうな冬のある日。雑踏の中で僕はひとりの女の子とすれ違った。銀色の髪の、きれいな少女。なぜか、目が合った僕のことを驚いた顔で見つめていて……。でもそれはたった一度の偶然の出会い。なにも起こることはない、はずだった……。

だけど数日後、僕は見知らぬ男女に連れられてその少女と再会する。デジタルツールを使わなければ誰からも知覚されず、誰のことも知覚できない“黄昏の子供たち”と呼ばれる特異な子供たち。少女は新たな進化のカギを秘めたその“黄昏の子供たち”の一人だった。

互いに孤独を秘めた少年と少女が出会う、せつなく温かい物語。

銀色ふわり

有沢まみず

電撃文庫1617


銀色ふわり
有沢まみず
イラスト／笛




見えない形


どこかにあると思って



JEROEN COFFEE Bosch
JEROEN COFFEE Bosch


今、ここにある心を

CONTENTS

プロローグ　世界を変える出会い……11

第一章　冬色の瞳……15

第二章　雪舞……41

第三章　アンビバレンス・コア・プロテクト……79

第四章　銀色の輝く花……137

第五章　絆……219



Design / Hirokazu Watanabe[2725 Inc.]

銀色ふわり

もしあなたが〝世界〟からなにかを託されたのなら……あなたはそれにどう応えますか？

プロローグ　世界を変える出会い

雑踏の中を歩いている。
横断歩道。明滅する信号機。足を速める。
冷たい大気の中。
ずっと考え事をしていた。
ポケットに突っ込んだ手が少しかじかんでいた。鉛色の空から漏れ込んでくる日の光で辺りが複雑な色合いに染まっている。
そんな冬のある日。
僕は初めてその少女と出会った。

彼女は見たことが無いくらい見事な銀色の髪をしていた。
へえ。
と、思わず心の中で感心して呟いた。
本当に綺麗な、銀色だ。
彼女は眼鏡を掛けた理知的な風貌の女性の少し後ろを歩いていた。
それから僕に気がつき、目を見開き、驚く。
なんだろう?
彼女は僕の動きをずっと目で追い続け、最後には歩道を渡り切ったところの信号機の下で驚

いた顔のままじっと立ち尽くした。
灰色の景色の中で彼女の姿だけが光り輝いているように見えた。
僕も彼女の表情が気になって相手を注視してたから横断歩道を渡る間、互いにずっと視線を絡めあっていたことになる。
白い肌にアーモンド形の綺麗な瞳。なんとなく寒そうに見える薄手のジャンパーにスカートをはいていた。淡く、どことなく儚い雰囲気。華奢で、壊れそうで、ガラス細工みたいに繊細なギリギリの美しさ。
びっくりするくらい綺麗な少女だった。

僕が反対側の歩道まで渡り切った時も少女はまだこちらを見つめていた。
口を小さく開け、本当に呆気にとられた顔をしていた。
一体、何事だろう?
僕は無意識に自分の顔をさすった。
なにかくっついているのかもしれない……。
先を歩いていた女性が少女の様子に気がついて「どうしたの?」とでもいうように振り返っている。
僕はそれを見届けてから軽く手を振った。

「じゃあね」という気持ちを込めて。
軽く笑って。
僕らの間を車が行き交い始めた。
赤い乗用車。
でっかいトラック。
排気煙の向こうでまだ少女がこちらを見つめている気がしたけど、それ以上、特になにも起こることは無いと思って僕はその場を後にした。
顔をさすってみたが、とりあえずなにもついていなかった。
ショーウインドウに映る自分の姿にも特におかしいところは無い。ならば、僕がそんな女の子から注視される理由はなにも無い。
きっと誰か見知っている人にでも似ていたのだろうと僕は単純に考えた。
でも。
僕は間違っていた。
致命的に。
運命的に。
僕はこの少女と出会った時から大きくその人生を変えることになった……。

第二章　冬色の瞳

昼休み。

僕はぼんやりと窓の外を眺めていた。晴れ渡った冬の空はなんとなく心寂しく、人気の無い校庭はどこか寒々しく、全ての風景が凍てついているように見える。ただ、その塀の先に見える川の流れが唯一時を解凍してしっかりと流れている。

川原を散歩している老人と犬の姿が遠くに見えた。

遠景が妙にくっきりと見えて、全体的に鋭く引き締まって見える。そういう時、この街では雪が降ることが多い。それも一欠片一欠片がはっきりとした結晶めいた雪だ。今日はなんだかその気配が濃厚だな、とふと思った。

この街に雪が降りそうだ。

「あろはおえ～」

と、そこへ横合いから楽しげな声が掛かる。

「安住くん、なにを黄昏れちゃってるのかな?」

見ると隣の席の女の子がこちらに椅子を向けて尋ねてきていた。

戸荻ゆらく。

ちょっと変わった名前の女の子だ。

どこかとぼけたような可愛らしい顔立ちとふんわりと女の子らしい雰囲気で男子の間でも密かに人気が高い。でも、僕はこの子の外見よりもその和やかな性格と、一見無造作に人に接し

ているように見えてもの凄く細かく気を遣っているところにいつも感心していた。
僕は彼女の方を向き直って、
「え？　ああ」
少し笑って。
「ん。ちょっと。雪が降りそうだね、と思って」
「あ〜」
と、戸荻さんは目線を窓の外に向けて、
「ん。降りそうだね〜。ね？」
わくわくとした表情で、
「で、この間の件、了解してくれた？」
「え？　この間の件……ああ！」
僕は笑った。
「来週の火曜日だよね？　うん、その日は大丈夫だよ」
「そっか、良かった。いえい！」
戸荻さんは親指を立てた。僕は彼女からあるインディーズバンドのライブに誘われていたのだ。前に彼女が聴いていたのを携帯用オーディオプレーヤーで聴かせて貰った。ロックとクラシックを入り混ぜたような曲調が格好良かった。

そしてそのままの感想を素直に言うと彼女はいたく喜んで、
「じゃあ、じゃあ、今度、ライブがあるから一緒に行こう！」
と、誘ってくれたのだ。僕に異存は無い。本音を言うと僕としてはほんのちょっとだけチケット代が痛かったが、戸荻さんがなんだか凄く嬉しそうにしているのでそちらの方には黙って目をつむった。
と。
「おいおい。ゆらくちゃ～ん」
僕の前の席に座っていた男が振りかえってにまにま笑った。
「お安くないんじゃないの～？　な～に？　うちの春道をデートに誘う訳～？」
すると戸荻さんは赤くなって、
「で、デートじゃないよ！　ただ単に一緒にライブ行くだけ！」
するとその男。
山村健二は、
「世間ではそれをデートと言うんです～」
と、目を細め、次に口元に手を当て、囃し立てるように、
「や～い、で～とで～と♪」
戸荻さんの反応は早かった。山村健二の頭をぽかぽか叩いて、

「な、何を言うかな⁉　何を言うかな⁉」
僕はその二人のやり取りに、
「は、はは」
思わず笑ってしまう。二人はちらっと僕を見た。
それから山村健二がちっちっと指を振った。
「でもね、ゆらくちゃん。お気の毒様。うちの春道はね、ちょ〜のつくほど巨乳好きだからね。君はもしかしたらどうかな？　春道のタイプじゃないんじゃないかな〜？」
「は？」
戸荻さんはどぎまぎしたように、
「そ、そうなの？　安住くん、そうなの？」
なぜか自分の胸元を両の指先でちょんと押さえている。僕がなにか答える前に、
「そ〜だよ。この間、二人でグラビア見ていたらこいつその部分でやたら反応しちゃってさ〜、もう凄かった！」
と、山村健二がもっともらしくそう言った。僕はさっき戸荻さんがやったみたいに「えい」と奴の頭を叩いた。
「それはお前だろ！　山村」
すると。

「ぷ！」
と、まず戸荻さんが噴きだし、続いて僕らも、
「あははは」
「ま〜、確かに俺はそうさ！　否定はしないさ！」
山村健二が笑いだした。そんな昼休みだった。

その後、僕は山村と購買部に行った。お目当てのタマゴパンと牛乳を手に入れるためだ。廊下を歩きながら、
「しっかし、いいよな〜、春道にはゆらくちゃんがいて〜。絶対、あれ好き好きモードだぜ？」
と、からかい半分、本気半分で山村健二がそう言ってきた。僕は首を横に振った。
「そんなんじゃないよ」
戸荻さんのためにもきちんと否定しておく。
「そんなのじゃないって」
「……」
山村健二はちょっと黙って僕を見ていたが、
「はあ」
と、深い溜息をついた。

「俺にも来ないかな〜、春が」
　僕は含み笑って、
「今は残念ながら冬だからね〜」
「あのな」
　と、山村健二が言う。
「俺はそういうこと言ってるんじゃないの！　も〜、ずれてるな！　相変わらずお前はずれてるよ、春道！　あんた、男心が分かってないわよ！　分かってないからいい女の子がいたら紹介して頂戴よ！」
「紹介」
　僕は困って笑う。
「出来たらいいんだけどね、ほんと」
「そうだよな〜。お前に頼んだ俺が間違いだったよ、ほんと。あ〜、彼女欲しい！」
　それから落胆したように肩を落とした。
　僕は彼の肩をぽんぽんと叩いた。このはた迷惑なくらい明るい彼に本当に紹介してあげられるような女の子がいたら良いなとちょっとだけ思った。
　昼飯を食べた後、僕は図書室に向かった。借りていた本を返すためだ。僕は本を基本的に買

うことは無い。
返却手続きを終え、またなにか借りようかと書架の間を見て回る。それから雑誌コーナーでなんとなく目にとまった科学誌を手に取り、閲覧スペースに持っていった。表紙の宇宙の写真が気になったのだ。
その写真はマゼラン星雲なのだそうだ。
僕は天文にはあまり詳しくないけど、星の写真を見るのは結構好きだった。なんとなくページをめくり、面白そうな科学コラムがあったので読みふける。
星が凝縮して宝石になる話。
電波天文台に勤める盲目の天文学者の話。目の見えない彼女はその代わりに鋭敏な聴覚を持っており、宇宙から飛来する電波を聴覚で観測しているらしい。そこには〝宇宙の星々が奏でる音楽を聴く〟という詩的な表現が記載されていた。
宇宙の星々が奏でる音楽。
それは一体どんなモノなのだろうか?
他にもここ十年の懸案である、世界規模の出生率の低下に関する記事が特集されていた。この件に関してはニュースや新聞でも良く取り上げられているので、特に目新しい記述は無い。
僕はそこら辺をぱらぱらと流し読みしていく。
ふと視線を感じた。

「お？」
気がつくと目の前の席に戸荻さんがいる。
頬杖を突き、にやにや笑ってこちらを見つめていた。
「……いつから、いたの？」
僕はそう尋ねる。
「十分くらい前からだよ。安住くん、大した集中力だにゃ～」
僕は苦笑する。
「人が悪いね」
「なんで？　読書に勤しむ安住くんはなかなか格好良かったですよ？」
「まるで普段はかっこわるいみたいだね」
「なんの。そんなことないよ。ここだけの話だけどね」
と、彼女は身を乗りだして言う。
「安住くんのファンって女の子、結構いるんだよ。カミングアウトしてないだけで」
「そんな」
僕はちょっとびっくりする。
「え？　ほんと？」
「他の男子と違って力んだり、カッコつけたりせず、自然なところがいいんだって」

「自然なところね～」
僕はまた苦笑した。
「ただ周りに流されやすいだけじゃない？」
「ううん。そうではないと思う……なんていうのかな？　安住くんの、その」
少し上目遣いに戸荻さんは言った。
「なんでも受け入れて……えっと、難しい言葉使うと従容としてるのってなんか哲学が入ってるっぽい。ただ流されてるんじゃなくって、何か深い理由があってそうしてるっぽい」
僕はしばらく考えてから、
「なんだか買いかぶられてる気もするけど」
と、軽く笑ってお礼を言った。
「まあ、でも、ありがとうね。確かに運命には逆らわない、っていうか、逆らえないっていうのが僕のモットーだからね」
戸荻さんはくすっと笑った。それから、
「じゃ、あんまりお喋りしていると図書委員に怒られるから私はもう行くね。安住くん、ライブよろしくねえ～」
ひらひらと手を振って去っていった。僕は彼女を見送りながら親指を立てた。
「りょ～かいです」



放課後。僕は帰宅部の特権を生かして真っ直ぐ昇降口を降りて、下駄箱に向かう。そこへちょうど女子の一団が入れ違いに校舎の中に入ってきた。

「だから、先生。あたしたちの代、もうちょっと遠征しないとダメですって！」

良く見るとバレー部の女の子たちだ。

そしてバレー部の顧問であり、世界史の担当であり、僕の隣のB組のクラス担任でもある大川菊江先生がいた。

「でもね～、予算がね～」

いる。

一緒に。

苦笑していた。女の子たちがきゃっきゃとなにか意見を述べているのを鷹揚な、優しい目つきで見つめていた。

学校でも一、二を争うくらい人気のある先生だ。

物わかりが良いと評判の。

生徒の話をじっくりと聞くのだそうだ。誰に対しても常にオープンで、一人一人と向かいあうのが信条。

教育方針は『対話』

〝姉御〟とか〝学校のママン〟などと大川先生のことを呼んでいる子たちもいる。
年の割に若く見え、髪を後ろにまとめている。
嫌みではなく、自然なイメージ。美人なのだそうだ。
慕われている。
僕はぺこりと頭を下げた。大川先生は、
「……」
一瞬僕に気がつき、いつものように軽く微笑んで、頷いた。
それから、
「先生、さよなら」
僕がそう言った瞬間、もう目はつっと逸れている。
「さようなら」
僕はもう一度言ってその場を離れた。
先生はなにも答えてはくれなかった。
僕は歩きながら。
いつまで経っても慣れないことってあるもんだな、と思っていた……。
学校を出ると、空が高かった。

この街の不思議なくらい高い空はからんと晴れ上がった時、呆れるくらいの奥行きを見せる。白い息が立ち上っていくと、そのまま空のどこまでも広がっていきそうだ。

手を広げれば覆える空に無限の青。

僕の勘が正しければ、きっと今夜辺り雪が降るだろう。

この街の雪景色は不思議だ。どこにも光源が無い時でも雪自体がほんのわずか光っているように見える。

僕は雪景色が嫌いではない。不便で、めんどくさいがその凛とした冷たさ、厳しさは割と好きだった。全く他の色を含まない透徹とした白い雪を見ているとなんとなく心が落ち着く気がするのだ。ついでに言うと雪の中を散歩したりするのも結構、好きだった。

人間には大きく分けて二つの種類があると思う。夏を希求する人間と冬を居心地良く思う人間。僕は圧倒的に後者だった。夏の生気に満ちた煌めきも決して嫌いではないのだが、冬の厚く籠もったような、背後に強大な生命の息吹を秘めた、でも、沈黙し、休息しているような感じが好きなのだ。

陸橋を渡り、商店街を左手に見て、市の北西部に向かう。街の中心部からやや離れた古い城下町の名残を残す町並みだ。だんだんと人気がまばらになってきた。そこで僕は夕焼けを背景に、じっとこちらを見つめている女性に気がついた。路上に停めた軽自動車の傍らに立ってい

る。辺りには他に誰もいないのでよけいにその女性の姿は目立った。
おそらくは二十代後半。
風邪でも引いているのか、くしゅんと小さくくしゃみをして鼻を押さえると、赤い軽自動車のフロント部分に背中をゆっくりともたせかけた。
目を細めて僕をじっと見つめている。
確かに見覚えがあった。
背が高く、すらりとしていて、いかにも有能そうな女性だ。
一体、どこで会ったのだろう?
僕はゆっくりと彼女の横を通り過ぎながら考え、そして。
「あ」
と、思いだしていた。
この人はこの前、銀髪の少女と一緒にいた女性だ。
僕は思わず反射的に振り返っていた。
その女性はじいっと僕を観察するようなまなざしで見つめていた。
やがて一言、
「あなた、やっぱりとても澄んだ瞳をしているのね」
そう言った。

「その冬色の瞳で、あなたは一体〝何を〟見ているのかしら？」

直感的に理解出来た。この人はあの少女のことを言っている。その女性の瞳が眼鏡の奥でほんの少しだが迷うように微笑み、

「……ごめんね。いきなり変なこと言い出して」

僕はその時、気がついた。

ちぃん、となにかごく小さな駆動音が聞こえる。

女性が視線をずらすと、それに合わせてレンズがゆっくりと動いていくのが分かる。良く見るとレンズの横に微細な出っ張りがあった。なにか光学的な処理をレンズとその出っ張りで連動して行っているみたいだった。

明らかに普通の眼鏡ではない。

目に障害でもある人なのだろうか？

女性がまたくしゅんと鼻を鳴らしてから、

「……少し話をしていい？」

改まった口調でそう尋ねてきた。僕は頷いた。警戒する気持ちもあったが、それ以上にこの女性が一体なんの目的で僕に話しかけたのかという好奇心もあった。

女性の言葉を黙して待つ。

　すると突然、車の助手席側のドアが乱暴に開いた。そして、そこから一人の男性が降りてくる。

「茗荷」

　と、女性が呼び止める前に、彼はゆっくりと僕の方に歩み寄ってきた。ことさら威圧するように、地元の不良みたいに足を開き気味にして、肩を大きく揺すっていた。ハンサムな顔立ちの背の高い男性だった。

　やや長めの髪に銀縁の眼鏡。それとなぜか白衣を服の上から着て、そのポケットに無造作に手を突っ込んでいた。

　その男性は僕を黙って見下ろし、

「け！」

　と、一言吐き捨てた。

「へ？」

　と、僕。

「あ、あのいったい」

　男性は憎々しそうに付け加えた。

「絶対！　お前なんかなんかの間違いだ！　いい気になるなよ！」

　それだけ言ってつかつかと車に戻ってばんとドアを閉めた。僕は呆気にとられていて、ただ

それを黙って見送ることしか出来なかった。
女性はにっこりと微笑み、
「ごめんなさいね。悪い男ではないんだけど、ちょっと子供っぽいところがあって」
「は、はあ」
「改めて。少し……私たちにお時間割いてくれるかしら？」
そう尋ねられ、僕はとりあえずぎこちなくだが頷いた。

そのまま車に乗せられる。居心地の悪い沈黙。やがて、
「ごめんね」
運転席でハンドルを握っている女性が言った。
「でも、安心して。私たちは決して怪しい者じゃないから。危害加える訳じゃないから。その茗荷は変なヤツだけど私はまともだから」
僕は首を振った。
「あ、大丈夫ですよ。心配はしてません」
と、言いつつも僕は内心、流されるままにこの車に乗ったことを多少、後悔し始めていた。危害を加えられるとかそういうことはあまり思っていない。この風邪気味で、妙にさばさばした口調で話す女性は信頼出来そうだったし、悪い人にはあまり見えなかった。

ただ問題は助手席に座っている白衣の男の人だった。なぜだか分からないが彼は僕に対してなんらかの敵意があるようだった。

時折、ちらっと実に憎たらしそうな視線をこちらに向けてくる。

この男性の眼鏡も、女性の眼鏡と同様普通のモノではなかった。色やデザインはだいぶ違うけど、レンズが微細に動いて、小さな駆動音を立てていた。でも、心なしその駆動音が大きくて、微かだが雑音が入っている気がする。

僕がそんなことに気を取られてると、

「私の名前は志村。この男が茗荷」

女性がいきなりそう自己紹介して話し始めた。

「とりあえず、しばらくよろしくね」

「あ、はあ、こちらこそ」

僕は少し間の抜けた声を出した。それから、

「……しかし、よく僕のこと分かりましたね？　一度すれ違っただけなのに」

すると志村と名乗った女性は苦笑し、

「まあね。あなたが着ていた制服からあなたの通っている高校割り出して、あなたが出てくるまで待ちかまえて。ちょっと苦労したかな？」

「……あの、なんでそこまでして僕を？」

「ねえ」
　ふと志村さんの目がバックミラーの中で真剣みを帯びた。
「変なことを尋ねているように聞こえるかも知れないけど……出来ればちゃんと答えてね。一週間前にあなた、私と一緒に歩いていた女の子に気がついて、目を合わせた。そうよね？　それで間違いないかしら？」
　そう尋ねてきた。
　僕は困惑しつつも、割合、簡単に頷いた。
「はい……えっと、あの銀色の髪の綺麗な子ですよね？」
　すると。
「やっぱり……」
「！」
　志村さんが嘆息する。
　今まで腕を組んでそっぽを向いていた男性、茗荷さんがぴくっと動いていた。一方、志村さんは深く何度も何度も深呼吸をすると、もぞもぞとハンドルを握り直す。自分を落ち着けようとするかのように強く強く頷いていた。
「すごい……まさかとは思ったけど」
　半ば放心状態でそう呟いていた。

そして僕はそんな志村さんの様子にすっかり困惑していた。
「え？　それが、なにか？　なにかあるのですか？」
茗荷さんが、
「驚いた。訳がわからねえ！　ほんと訳分からねえ！　まじかよ！」
ごつんと窓ガラスに頭を押しつけて、その姿勢で何事かじっと考え込んでいる。それから彼は急にまたむっくりと身体を起こして真剣な目で、
「なあ、お前、もしかして頭に何か」
振り返ってきた。そのとたん、志村さんが鋭く叱声を発した。
「茗荷！」
茗荷さんがはっとしたような顔で横を向く。今度は僕がたまりかねて声を張り上げた。
「あ、あの！　さっきから一体なんの！　何かって、一体なんの話をしているんですか!?」
志村さんが素直に謝ってきた。
「ごめん。ほんとごめん。あなたからすれば訳の分からないことばかりよね？　……でも、ごめん。今は詳しく説明できないの。あなたにどうしても先入観を持って欲しくないから」
「先入観……どういう？」
「あなたにはね、もう一度、あの子に会って欲しいの」
「あの子って……あの銀髪の子に、ですか？」

「そう。そして出来れば」

彼女はバックミラー越しにちらっと僕を見た。

「可能なら、あの子と話をして欲しいの。お願い」

その後、中学の時の謝恩会とかで何度か来たことがあるホテルに連れて行かれた。この街ではそれなりに格式のあるホテルだ。駐車場に車を停めた後、一階から三階まで吹き抜けの広いエントランスロビーに出る。外国人の宿泊客が二人程チェックインをしているフロントを横目に見て、エレベーターに乗り込む。

十二階まで上がって真っ直ぐに突き当たった一二〇八号室が目的地だった。志村さんがカードキーをぴっと通していきなりドアノブに手をかけ、

「じゃ、ここから先はあなた一人で入って。よろしく」

出し抜けにそう言った。ろくに説明を受けていない。僕は眉をひそめる。

「え？　一人って？　この先にあの子がいるんですか？」

一方、茗荷さんも猛烈に抗議した。

「って、おい、志村！　そりゃあ幾らなんでも早すぎだろう!?　まずこいつが変な病気持ってないか検査してだな！　思想も直接チェックして！　出来れば三日くらい監禁して！」

「あ〜、うるさい！　ごちゃごちゃ言ったって仕方ないでしょ？　まず会わせないと。そもそ

も何かの間違いって可能性があるんだし。会わせる。その後、反応を見る。それでいいじゃない！　違う？」

と、志村さん。どうやら彼女の方が茗荷さんより立場が上みたいだ。その後、茗荷さんがぼそぼそと、

「いいじゃないって……おい。なら、せめて俺の機材で記録を。こいつのデータを！」

と食い下がるのをぴしゃりと押さえ込んだ。

「だから、そういうのも後っての」

それから僕を振り返った。

「お願い」

と、手を合わせる。

「中にね、ビデオカメラが何台か設置してあって私たちは隣の部屋でモニターしているから。何かあったらすぐ声を出して呼んでね？」

くしゅんと一度鼻を鳴らし、

「大丈夫。イエスタデーもあなたが来ることは知っているから……分かってると思うけど、女の子だから優しく、穏やかに接してあげてね？」

「優しく？　穏やか？　当たり前だ！　いいか！　この中にいるのはな、誇張じゃなく人類にとっての至宝なんだ！」

ずずいと茗荷さんが僕と志村さんの間に割って入ってきて、僕の肩に手を置いた。
「おい！　お前、ほんと～に何かおかしな趣味はないだろうな？」
僕は仰け反りながら、思いっきり激しく首を振る。
「い～や、分からんぞ？　お前、大きな子と小さな子どっちが好きだ？　人からある種の歪んだコンプレックスを指摘されたことはないか？」
志村さんが茗荷さんの頭を叩いて、僕の前に立った。
「バカ言ってないの！　ほら、とりあえず中に入って」
僕を促した。
「ま、まて志村！　俺はまだこいつに」
なんだか喚いている茗荷さんを肩で押しのけ、顎を振る。
「行って！」
僕は困った。だが、ここまで来てはもう仕方ない。ちょっと考えてから軽くノックをする。
そしてゆっくりと扉を開けた。
身体を素早く滑り込ます。
「入りますよ」
ホテルの一室。
浴室の前の廊下の先にやや広めの寝室が繋がっている。

そして。
その先に。
いた。
あの少女が座っていた。
ちょこんと、手を膝(ひざ)の上に置いて。
僕の心臓(しんぞう)がとくんと大きく音を立てて高鳴った。

第二章　雪舞

その光景を僕はなんと形容して良いのか分からない。凄(すご)くシンプルにまとめるならとあるホテルの一室、椅子(いす)の上に綺麗(きれい)な女の子が一人(ひとり)座っていました。

それだけだ。

あと付け加えるならなぜか部屋(へや)の要所要所にビデオカメラが設置されていて、光量を上げるためなのかスタンドランプが窓ぎわに立って明かりを室内に投げかけている。少女の影(かげ)がしっかりとベッドの上に長く伸びていた。

そんなところだ。

だけど、違う。

そうじゃない。

はっとした。少女は。

いた。

〝存在〟していた。

なんだかたとえようが無いくらい物悲しくなる程(ほど)、心乱される程彼女はそこにじっと存在して、ただ〝在(あ)〟った。

自分でもなんでそんな気持ちになるのか分からない。分からないけど僕はなんとなく哀(かな)しくなってきた。眼を細め、

「君は」

僕がそう呼びかけると少女が微かに小首を傾げた。着ている上着の袖をちょっと引っ張って細く白い指が隠れるようにしていた。
「えっと、君とは会うのは多分、これで二度目だね。でも、挨拶するのはこれが初めてだ……初めまして。覚えているかな？」
少女はこくんと頷いた。
「あの」
と、僕は少し不安になって尋ねた。
「だいじょうぶ？」
少女はかなり長いこと時間をかけてからようやく一言喋った。
「……はい」
彼女の声はひどく澄んでいた。
「覚えてます。初めまして」
それからまたじいっと僕を見つめている。椅子に下半身を残したまま、上半身をやや反らし気味にするという不思議なポーズを取っていた。僕から距離を取ろうとしているようでもあり、僕をじっと見定めようとしているようでもあった。
友好的なのか、非友好的なのかいまいちわかりにくい少女の反応だった。
ただ、それとは別に僕は改めて少女の美しさに感銘を受けていた。

顔立ちの造作だけではない。淡く、脆いという印象を強く受ける。寒々しく澄んだイメージが少女にはあった。特に今はどことなく不安そうな表情を浮かべているのでより頼りなく、儚く見える。

繊細な艶を帯びた銀色の長い髪。

そこにすっぽりと華奢でいたいけな身体が埋まっていた。トレーナーにタータンチェックのミニスカート。白く細い足がその裾から伸びていて、椅子の上から床に向かってぷらんと垂れ下がっていた。

丸い小さな膝小僧。黒い靴下を穿いている。

僕はちょっと咳払いをしてから自己紹介を始めた。

「えっとね、僕の名前は安住春道。君の名前は？」

と、言ってから〝志村さんや茗荷さんはイエスタデー、ってこの子のこと呼んでたけど一体どうなんだろう？〟と思っていた。

本名なのだろうか？

直訳すれば英語で〝昨日〟という意味だ。あんまり女の子の名前として適当なモノだとは思えない。

少女は囁くような声で喋った。

「わたしはイエスタデー」

「イエスタデー……」
僕は少し困惑する。
「えっと、それってあだ名のこと?」
「あだ名? いいえ」
と、少女はそっと首を振った。伏し目がちに、僕をじっと見つめながら、
「わたしの名前です……」
そしてそれ以上は決して口を開こうとせず、
「……」
ただ黙っている。僕は軽く溜息をついた。
「分かった。じゃあ、イエスタデー」
ちらっと腕時計に目を落として、
「申し訳ないけど、そっちの椅子に座らせて貰って良いかな? 立っているとなんとなく落ち着かないからさ」
具体的に指示された訳じゃないけど、だいたい三十分くらいを目安に話を切り上げようと思った。さらにビデオカメラの方にもちらっと分かるような視線をやっておく。恐らく隣の部屋で志村さんたちがこちらをじっと観察しているのだろう。
なにか特別に合図が無い限りは好き勝手に動いて良いのだ判断して、僕は少女が「はい」と

頷くのを待ってから窓ぎわの椅子の方に向かって移動した。途中、少女の目の前を横切る時、心臓がドキドキと高鳴った。

心なし少女も手と足を引っ込めて身体を緊張させているようだった。

僕は彼女に心理的負担を掛けないように努めてゆっくりと動きながら窓ぎわの椅子に腰を落とした。これで少女と視線の位置がだいぶ近づいた。近くで見ると少女の儚げな雰囲気がより強調されて見える。

ほとんど生きている人間とは思えない。端麗な容姿と頼りなげな身体の線の細さ。

「で」

と、僕は再び喋ろうとして、

「?」

少女が目を丸くして、僕をじっと見つめていることに気がついて、

「ど、どうしたの?」

そう尋ねた。少女はただ黙って僕の手を見つめている。

「……」

相変わらず黙ったままだ。僕は気になって、

「どしたの? なんか変かな?」

と、何気なく少女に向かって手を差しだした。そのとたん、もの凄いことが起こった。少女

が椅子から跳ね飛んだのだ。
後ろに向かって。
びっくりするくらいの勢いで。
そして。
「！」
その拍子に。
「あう！」
背中から床に倒れ込む。
「うう」
少女と目が合う。
まだ踵の部分が椅子に残っているためかなりあられもない格好だ。
「あ、や」
だが少女はそのことにはまだ気がついておらず、
「ご、ごめんなさい……」
手を胸元に引き寄せ、震えている。倒れ込んだ姿勢のまま、じっと涙に潤んだ瞳で僕を見上げていた。
「ご、ごめんなさい、わ、わたし、あの、ご、ごめんなさい」

僕は自然と赤くなった。横を向きながら、
「いや、え〜と」
なんて言ったらいいものだろう?
どうしたらいいのだろう?
その前に……とにかくそうだ!
助け起こさなきゃ。
「だ、だいじょうぶ?」
そこで突如、設置されたスピーカーから、
「はい、しゅうりょう!」
大音量が響き渡った。
茗荷さんの声だった。

「あのな! お前、人類の至宝ゆ〜ただろ!」
隣の部屋に移動してから茗荷さんに食ってかかられた。僕の受けた印象は大きく二つ。本当に妖精めいた美しい外見と普通の少女の感性。
いきなり後ろにすっ飛んだ時の落差が凄かった。
「このアホ! アホ!」

と、頭をぺちぺち定規で叩かれたので僕も反論する。
「い、いや！　あれは不可抗力！　というか、僕のせいでは！」
「い〜や！　お前のせいだ！　お、おまえ、のおまえあ、あの角度で……そのあの角度で見えたのか！　見たのか!?　イエスタデーの、こ、この〜」
思うのだけどこの人が誰より一番、危ないんじゃないのか？
そこへようやく良識的な救いの手が入る。
「まあまあ、とにかく安住君。お疲れ様」
と、志村さんが苦笑しながらコーヒーを淹れてくれた。この部屋も同じホテルの一室なので基本的に少女がいた部屋と同じ作りだが、良く分からない機材やらモニターやらノートパソコンが所狭しと机の上に並べられていた。
茗荷さんは深い深い溜息をついた。
それからどっかりと椅子に座り込むと、ノートパソコンを膝の上に置いて弄り始めた。他のモニターにはあの少女の姿が捉えられていた。
彼女はじっとベッドの上に座っていた。
どことなく打ちひしがれているようだった。
「あ〜あ」
と、茗荷さんが、

「お姫様、可哀相！」
ことさら当てつけるように僕をちらっと見てから叫ぶ。
志村さんと茗荷さんは僕をスピーカーで呼びだすと少女には〝ちょっと待っていてね、イエスタデー？〟としばらく待機を命じた。少女はこくんと小さく頷いていた。なんであの子はこちらに来て、一緒に色々話したりしないのだろう？
僕はそこら辺を疑問に思って尋ねた。
「あの子は」
迷いながら。
訊いて良いのか幾ばくか迷いながら。
「あの子は一体、〝何者〟なんですか？」
様々な返答が予想出来た。
だが、志村さんが唇を舐めてしばらく経って告げた言葉は、僕が考えた一番ありそうもない答えのさらに斜め上をいっていた。
彼女は切りだした。
「回答不能」
と。
「は、はい？」

な、なんだ、それは？
志村さんは肩をすくめ、
「例えばね、宇宙がどう始まったかとか、神様はいるのかとか、死後の世界はあるのかとか、なんで空の色は青いのか、とか」
「あ、あの」
「世の中にはそんな疑問に答えてあげられる人はいるのかもしれないけど」
と、一拍間（いっぱく）をおいて溜息（ためいき）をつき、
「残念ながら私には無理。あの子たちに関しては分からないことが多すぎるの。だから〝何者〟かという問いには残念ながら答えてあげられない。ただ私たちはあの子たちを〝黄昏の子供たち（Dusk Children）〟と呼んでいる」
「……〝黄昏の子供たち（Dusk Children）〟？」
「そ。〝黄昏の子供たち（Dusk Children）〟。わたしも茗荷もイエスタデーをはじめとする〝黄昏の子供たち（Dusk Children）〟の研究とサポートを行っているの」
「ちなみに俺（おれ）の専門は本来、脳」
茗荷さんが手でこんこんと自分の側頭部を指さした。志村さんが笑って、
「ああ見えて茗荷は将来を嘱望（しょくぼう）されている大脳生理学者なのよ。で、私は発達心理学が専門のカウンセラー。一応、医者でもあるわ。私たちは担当官（Parents）と呼ばれるチームなの」

「あともう一人いるけどな」
と、面白くなさそうに茗荷さん。志村さんは苦笑して、
「そうね。あともう一人。裏方の人が一人。とりあえずそんなとこ」
僕は混乱していた。
「あ、え～と」
なんて言って良いか分からない。
「えっと」
迷いながら一つ一つ情報をしっかり心に留めていく。そうでもしないと絶対に意味が分からなくなりそうな予感がした。茗荷さんが無言でぱちぱちとキーボードを打ち始めた。僕はなにより気になっていたこと。
それを思い切ってぶつけることにした。
「あの」
一番、訳が分からなかったこと。
それは……。
「え～と、車の中で、僕があの子と目を合わせたことを凄く驚いてましたよね？　アレは一体なんでなんですか？」
「……」

志村さんがじいっと僕を見つめた。
かなり長いこと。
そして。
溜息。
「……まずそこから話しましょうか」
茗荷さんがくくっと肩を震わせ、笑った。
「不思議そうな顔をしているな。だがな、俺らからすればなによりお前の方こそ訳が分からないんだぞ？」
僕は困惑する。その間、志村さんがゆっくりと話し始めた。
「ここ十年ばかり。世界的な規模での出生率の低下が始まっている……これは知っているわよね？」
僕は頷いた。
これでもニュースくらいはちゃんと見ている。それまでの出生率の低下は主に先進国に限った現象だったが、それが全世界的な規模で緩やかに進行している、くらいの知識は当然、僕の頭にもあった。一番、低下の激しいところで一人の女性が生涯に産む赤ん坊の平均が0・3人。日本で約0・5人。
人口の増加が問題となっていたアフリカ諸国でも、1・0人。

環境ホルモンが原因だとか、未知のウイルスとか、原因は色々言われているけど学者は未だにその理由を特定出来ていないらしい。
WHOは〝人類生存における非常事態宣言〟を出した。
くらいのことは知っている。
そのことを話すと志村さんは大きく一度頷いた。
「そうね……そしてそれと同時で不思議なことが起こり始めていたの。始まりは、発見は本当に偶然だった」
志村さんが手近にあったカメラを指さした。
「医療関係用の資料としてとある女性の出産の一部始終がビデオに収められたの。ところが」
と、そこで志村さんは唇を舌で舐め、
「その場にいた誰も、出産に立ち会った看護婦も、産婦人科医も、そしてとうの母親となった女性も全て、生まれ落ちた赤ん坊を全く見ることが、、、、、、出来なかったの。そのカメラを回していた医療関係者以外は、ね」
話し続けた。
「病室は騒然としたわ。最初は想像妊娠の類が疑われた。だけど、カメラにははっきりと赤ん坊の姿が映っている。その顔を赤らめて泣く泣き声も血色の良い肌もなにもかも鮮明に。だけど肉眼では全く見えない。聞こえない。触れられない。それが〝黄昏の子供たち〟の最初の

一人……エターナルよ」
僕は呆気にとられていた。
「見えない？　透明なんですか？」
そこで志村さんがふっと笑った。
「ちょっと話をイエスタデーに戻しましょうか？　あなたも疑問に思ったと思うけど」
彼女は自分の眼鏡を女性らしい仕草で取った。
それを僕に突きだしてみせる。
「これはね、視覚補正器具。大仰な言い方をしてるけど、要するにオートフォーカス機能のついたレンズよ。ビデオカメラと同じような機械的な処理をこれで行っているの。別名、〝眼鏡〟。シンプルでしょ？　イエスタデーの姿を見るためだけに必要としている特別な〝眼鏡〟よ。そして」
耳の穴からなにか小さな円形のモノを取りだした。
「これは聴覚補正器具。通称、〝補聴器〟。こっちは機能的には普通の補聴器とほとんど変わらないわ。イエスタデーの声を拾うためにつけてるの」
僕は茗荷さんの方を見る。
「茗荷さんも？　茗荷さんも同じモノをつけてるんですか？」
茗荷さんはこちらを振り返らず、

「見りゃ、分かるだろう？　志村と同じヤツだよ……あ、違うわ。俺のは一つ前の形式の生活防水してないタイプだったから、洗面所で落としたら最近具合が悪くて」

ぶつぶつと訊いてもいないことをそう答えた。

僕は頭が痛くなってきた。

一番の疑問。

それは。

「なぜです？」

その問いに志村さんがどこか面白そうに、

「そうしないと私たちにはイエスタデーの姿が見えないから。肉眼では見えないの。そしてあの子の声も聞こえないの。一回、機械を通して聞かないと……信じられないでしょ？」

頷く僕。志村さんは笑ったままぐしゅっと鼻を啜って、

「でも、ダメなのよ。聞こえないし、全く見えないの。ううん、正確にはね、見えてはいるし、聞こえてはいるけど、無意識的に無視している状態らしいの」

「！」

僕は相当に驚いた顔をしていたと思う。志村さんはそんな僕をやや人の悪い笑みで黙って見つめていた。

「認識だ」

と、突然、茗荷さんが口を挟んだ。
「脳の問題なんだよ」
「……」
言っている意味が良く分からない。志村さんが続きを話し始めた。
「最初の〝黄昏の子供〟エターナルの存在は大きな波紋を投げかけたわ。あまりにも常軌を逸した赤ん坊。まず極秘に研究チームが設立された。ニューヨークの大学で始まったその研究はやがて同様の赤ん坊が世界の他の国々でも報告されるようになって国境を越えた〝財団〟という枠に広がっていく」
「……他の、赤ん坊たちですか？」
「〝第一群〟と呼ばれている合計十四名の赤ん坊たちが最初の一年で確認されたの。不思議なことにイギリス、カナダ、ノルウエー、フィンランドなど出生率が顕著に下がっている国に特に集中してね。イエスタデーはその中で三番目に発見された子供」
「え～と」
僕はふと気になって尋ねた。
「じゃあ、やっぱりあの子は外国の子なんですか？」
志村さんは首を振った。
「正確にはイギリス人とのハーフよ」

少し早口に、
「母親は日本人で……この街出身なの」
「え？」
と、僕はびっくりした。
同時に、「あ、だから、か」と思った。
お母さんが出身だから、彼女はこの街にいるのか……。
そこら辺はなんとなく腑に落ちた。
「残念ながらお母さんはイエスタデーが生まれてすぐにお亡くなりになったけど」
志村さんは淡々と続ける。
「でも、ここは彼女にとっても深く思い入れのある場所なのよ。だから、来たわけ」
僕はちらっとモニターの中の少女を見つめた。彼女は先程と同じようにベッドの縁に浅く腰を掛けてじっと床を見つめていた。
分割された画像の中に、その横顔と正面からの表情が映っている。驚く程端正な顔立ちだが、顔の造作や、手足の細さはやはりまだほんの子供のモノだった。志村さんが僕の視線を辿って言い訳がましく言った。
「……年頃の女の子の部屋をこうやってビデオカメラでずっと覗いている。確かにあまり良い趣味ではないわよね。でも」

溜息をつく。
「許して欲しいものだわ。わたしたちも決して好きでやってるんじゃない」
僕は目眩がした。
「あの子は、えっと……なんて言ったらいいのだろう」
頭の中がぐるぐると回る。
「確かに実在していますよね？　あそこにいますよね？」
「ええ」
と、そこは力強く志村さんが頷いた。
「あの子は確かにあそこに座っているわ。幽霊ではない。会話し、コミュニケーションを取ることが出来るただの女の子よ。あなたもそれは確認してきたでしょ？」
話があまりに突飛過ぎてだんだん震えてきた。
それとあることに気がついて。
「もう一度確認しますね。あなたは肉眼ではあの子が見えない。茗荷さんも……他の人も全てそうなんですか？」
「そう」
話が核心部分に触れ始めて志村さんの目が急に真剣みを帯びた。茗荷さんの手が止まる。背中越しにこちらに注意を向けているのが分かった。

志村さんは噛んで含めるように、

「〝黄昏の子供たち〟の最初の一人、エターナルが発見されて以来、私たちは成長していく彼らと機械を通してのみ、コミュニケーションを成立させてきたの。医者も、研究者も、その実の父も母も。誰も彼らを直接的には見ることも聞くことも触ることも出来なかったの」

じゃあ。

それじゃあ。

この僕は……。

「現在のところ、〝黄昏の子供たち〟を、直接的に認識出来る人間はただの一人もいない」

一体なんなんだ？

志村さんはゆっくりと息を吐きだすようにして言った。

「たった一人……あなたを除いてね」

愕然とした。

「あ、う」

思考が上手くまとまらなかった。額を押さえる。

「なんでですか？　僕には完全に見えてましたよ？　分からない……本当に」

志村さんはさらに衝撃的なことをさらりと言った。

「もう一つ付け加えるとね、それは向こうからもそうなの」

「え？」

「向こうからもそうなの。向こうも機械処理を経(へ)ないと私たちが認識できないのよ」

最初はその言葉の重みが良く理解出来なかった。

「認識(にんしき)、できない？」

「そう。それどころかイエスタデーを初めとする〝黄昏の子供たち(Dusk Children)〟はそもそも生物を直接的には認識できないの。人間だけではなくてね」

「！」

「完全に例外なく。生きているモノが認識出来ないの。花も木も、犬も猫も全(すべ)て生命体が。デジタルな画面を通さなければ見ることが出来ない。だから、普段(ふだん)はわたしたちと同じようにこうやって〝眼鏡(めがね)〟や〝補聴器(ほちょうき)〟を使っている。でも、見たり、聞いたりはソレで良いけど、匂(にお)いを嗅(か)いだり、触れあったり、抱きあったりすることは絶対にできない。それはたとえどんな器具を使っても無理なの」

声が。

出せなくなった。

「不思議(ふしぎ)なことに互い同士も。〝黄昏の子供たち(Dusk Children)〟同士でも互いは認識出来ない。デジタル補正した画面でしか彼らは互いに見えない。聞こえないの。だからね」

と、志村さんは一拍間をためてから言った。
「だから、あの子にとって多分あなたが生まれて初めて生で見るニンゲンなの。さっきあなたの手が近づいてきて、すごいびっくりしていたのは、だからよ?」
椅子から崩れ落ちそうになった。そんな。
そんなバカな……。
そんなバカげた話とても信じられない!
「信じられないかもしれないけど……ねえ?」
と、志村さんが溜息をつく。
僕は呆然としたまま、なにか彼女に問い返そうとしてふと……。
「……」
モニターの中で少女が動いていることに気がついた。
彼女は真っ直ぐに窓の方に歩いていき、じっと外の景色を眺め始めた。僕は釣られて窓の外を見やった。
雪だ。
雪が降っていた。
暗い空を背景にしんしんと、しんしんと雪が降り続けている。志村さんも茗荷さんも揃ってそちらに目をやった。

「雪、ね……」
「……」
茗荷さんが首を振ってすぐにまたパソコンの操作に戻った。
志村さんが僕を見て尋ねてくる。
「という訳であの子のこと……少しは理解してくれた？」
「……」
僕は黙っていた。黙って首を横に振った。
「ま、それも無理はないんだけど」
と、志村さんが溜息混じりに肩を落とした。僕は声を張り上げ、
「やっぱり！」
と、言ってから適当な言葉が見つからず、我ながら尻すぼみに、
「……信じられない。〝見えている〟のに〝見えない〟なんて、意味が、よく」
するとその時。
「お前さ、〝見える〟ってどういうことか分かるか？」
今の今までずっとパソコンを弄っていた茗荷さんがぱたんとノートパソコンを畳んでこちらに振り返った。
僕はこの人が会話に加わってきたことに軽く驚きつつも、

「どういう意味ですか?」
と尋ねた。茗荷さんはいきいきとした顔で、
「物事を〝見る〟って一体身体のどこで処理している機能だと思う?」
「どこ?」
当惑した。
「え? 目じゃないんですか?」
「半分正解で半分不正解だな」
茗荷さんが椅子をぐっと近づけてきた。志村さんが「やれやれ、ようやく交代できるわね」
と呟いて、またコーヒーを淹れに席を立った。
茗荷さんは今までとは打って変わってどこか嬉しそうな表情で、
「いいか? たとえば俺が〝お前〟をこうして〝見ている〟な? 俺の目は眼底に映った〝お前〟という外界の映像情報を電気信号に変換している。ここまでは目の、というより網膜の細胞の仕事だ。カメラのフィルムやデジタルカメラのCCD素子に像が結ばれることと等しい、あくまで光学的な過程だ」
「は、はあ」
「ところがな、人間の〝見る〟という機能はここで終わりじゃない。むしろここから先が〝見る〟ということの本質なんだ。目で捉えられた情報の電気信号はやがて視神経を通り、V1野

という大脳波質の一部分に送られる」

「なるほど」

「だから、このV1野がなんらかの損傷を負った場合、大脳皮質に視覚情報を送ることが出来なくなり、目は正常なのに、物を見ることが全く出来なくなる」

　なんとなくこの人の言いたいことが見えてきた。

「つまり人間は目と脳の両方でモノを見ている、ということですか？」

「そうだ」

　と、茗荷さんは頷き、僕の肩を拳でちょっとこづいた。少し痛い。

「まんざらバカではないみたいだな。じゃあ、一つ面白い話をしてやろう。このV1野の少し前方、後頭葉から側頭葉にかけてのある一部を弄ると、今度は見えなくなる、ということはなくなる。その代わりどうなると思う？　見ている物体の視覚的な同定が出来なくなるんだ。つまり机を見ても、コップを、テレビを見てもそれがなんであるか分からなくなるんだ。これを視覚失認という」

「！」

「興味深いことにこの視覚失認状態の人間はそれら机やコップやテレビに関する記憶がなくなっている訳ではない。たとえばコップを触ったり、テレビが音を発した瞬間、それがなんであるかを認識し直す」

「……そんなことが」
「ならば、例えばだが、イエスタデーという少女を見ても認識していない、という現象も充分あり得るだろう？」
「……」
僕は考え込んでしまう。茗荷さんはちょっと目を細め、
「普通の人間はな、あいつが決して見えていない訳じゃないんだ。道を歩いていてあいつとぶつかりそうになればちゃんと避けるし、あいつがいる空間に無理に押し入ってこようとは決してしない。ただ、全部、それは無意識による回避行動なんだ。自分でも意識では理解せず、そう行動する」
僕は唸った。茗荷さんは話し続ける。
「そもそもさ、完全に視覚の問題なら、あいつの服の説明がつかないだろう？　あいつの服は決して宙に浮いているようには見えない。あいつごと見えなくなる。以前、実験したことがあるんだが、あいつがモノを持つだろう？　するとそのとたん普通の人間にはそのモノ自体が意識の埒外に行くんだ。で、あいつがそのモノを離すと、まるで何事もなかったかのようにそれを認識し直す。その抜け落ちた間のことは各人の脳がそれぞれ、もっとも合理的な解釈を自動的に下す。だから、イエスタデーがモノを隠してしまえば、見ていたそれぞれが全く違うストーリーを勝手に脳内に作り上げる」

「……」

僕は半ば呆然としながら、

「なるほど。なんだかまるでみんなで示し合わせてあの子が見えない演技をしている、みたいな感じですね……」

茗荷さんが面白そうに笑った。

「あはは、なかなかいいたとえじゃないか。うんうん、大体そんな感じだ。あとはな」

ちょっと考えてから、

「これ以外にも無意識的に無視するという現象は起こりえる。例えば右側の頭頂葉にある刺激を与えると、今度は半側空間無視という症状が現れる。これは凄いぞ。この場合、はっきりと見えているのに、認識はしているのに、今度はその部分にアプローチする行動を取ることがどうしても出来なくなるんだ。丸い円の全ての線を塗り消してください、という指示に対して、丸い円だということははっきりと意識しているのに、その片側のいずれかはどうしても塗り消すことが出来ない。つまり見えているのに、無意識的に見えていないように振る舞ってしまうのだ。この現象も充分イエスタデーを説明しえると思わないか？」

僕はじっと考え込んだ。それから、

「あの」

と、頭の中に浮かんだ疑問点を率直に挙げていった。

「幾つか分からない点が。まずなぜその現象が彼女の、〃黄昏の子供たち〃の場合だけに特有に起こるのか。それは一種の脳の異常状態ですよね？　それになぜ機械的な処理を行った場合にのみ、元通り認識が出来るようになるのかというのも説明できていないと思います。それとも……それはもう分かってるんですか？」

茗荷さんが肩をすくめた。

「分かっていない」

僕をちょっと意外そうに見て、

「……案外、思ったよりお前、賢いな。そうだよ、確かに現状、仮説なら幾つか立てられているが、決定的な解明にはまだ至ってはいない。なぜ〃黄昏の子供たち〃は認識できないのか。逆説的に言うとなぜ彼らの視覚情報だけが選択的に俺たちの脳の中で排除されるのか。そしてなぜ機械的な処理を行った画像でのみ認識できるのか。さらになぜ彼らもまた同じように俺たちを認識出来ないのか。どうも直接、彼らを見た時と間接的に見た時の脳の電位差に鍵があるみたいだけどな。あとはアメリカのチームが『意識の数理モデル』の観点から結構、面白い研究をしている。だけど、俺はもっと通年代的な考え方を併用した方がこの場合」

と、彼は言葉を切って押し黙った。

僕は彼の話の先が気になったので沈黙を守った。茗荷さんはそれから用心深そうな顔になりにやっと笑って、

―や～めた。お前にこれ以上今の段階で話しても意味はないな。ただ彼らは普通の人間には〝見えない〟とだけ考えろ。そしてな、だからこそ、俺はお前に興味がある訳だ。なんでお前だけが例外で見える？ 分からない。いったいなぜだ？」
彼は机に肘をかけ、身を乗りだす。
「なぜお前なんだ？ 遺伝的、もしくは後天的な原因による脳の特異構造か？」
「それは」
僕は言葉に詰まった。
「そんなこと僕に尋ねられても……」
「あのね」
と、再び茗荷さんの隣に座った志村さんが発言した。
「ここまで言えばだいたい分かるでしょ？ 私たちはあなたに協力して貰いたいの。唯一、あの子を肉眼で見ることが出来て、あの子から見られることが出来るあなたにどうしても。そうすればあの子に限らず〝黄昏の子供たち〟全体への研究がぐっと進むわ」
茗荷さんも憮然とした表情だが基本的にそのことは同意しているらしい。ふいっと横を向いて、
「だからって、イエスタデーになにか不埒な真似をしたら俺が一番先にぶっ殺して」
とかぶつぶつ呟いている。

それから彼は急に慌てたように、
「お、おい、志村！」
と、机の上のモニターを指さした。ん？
なんだ？
「あ」
と、僕もすぐに気がついた。見ればいつの間にか隣の部屋を映しだすモニターの中に少女の姿が見えなくなっていた。
まるで風にでもさらわれたようにすっかり消え去っている。
茗荷さんが眉をひそめ、素早くキーボードを操作して幾つか画像を切り替えた。だが、そのどこにも少女の姿はない。
志村さんも無言で立ち上がってモニターを覗き込む。
「……」
「ど、どうしたんでしょう？」
と、少し心配になって僕。志村さんは、
「いや、多分、お風呂かトイレだと思うけど……」
そうか……。
当たり前だが、さすがにバスルームにはカメラは設置してないよな。

だけど、すぐに志村さんは首を横に振った。
「ん。でも、これはちょっと気になるわね……なんか変みたい。行ってみましょう」
彼女は素早く部屋を出て行く。かなり緊張しているようだった。僕も、それから茗荷さんも後を追いかけた。
「入るわよ、イエスタデー！」
志村さんはカードキーを使って中に入っていった。僕も茗荷さんも黙って外で待つ。小さくてもそこはレディの部屋なのだ。
招き入れられなければ入る訳にはいかない。
だが……。
「いない」
志村さんがすぐに少女の部屋から出てきた。
「あの子、いない」
と、茗荷さんの顔を見て溜息をついた。
「捜しましょう。たぶん、ホテルの館内にはいると思うけど」
茗荷さんが深々と溜息をついて、
「分かった！　とにかく俺はエントランス付近を捜す！　志村、あいつに連絡を！」
身を翻して走りだした。志村さんは僕に言う。

「あなたも手伝って貰える？」
もちろん異存は無かった。

あいつって誰だ？
と、思ったが志村さんは心得顔で携帯を取りだし、廊下を歩きながら電話をかけ始めた。僕にはジェスチャーでそっちの方を捜して、と指さしてくる。僕は頷き、十二階の廊下を歩きだした。自動販売機があるところまで来て、ふとなんとなくこの階には彼女はいないような気がした。だから、エレベーターに乗って一階に下りる。
なぜ？
と、問われたら理由は答えられない。
ただ、なんとなく。
僕はこのホテルの中庭に向かった。緋色の絨毯が敷かれた廊下を通り、ガラス戸まで辿り着く。そこを一気に押し出た。
強烈な寒気が僕の身体を包み込んだ。
息がたちまち白くなる。
僕はぐるっと周囲を見回し、とりあえず池がある方向へ足を向けた。一度、謝恩会で来た時にこの中庭に出たことがある。樫や楠などが植えられた石畳をぐるりと散策すると、ひんやり

と澄んだ水を湛える池や石の橋や古びた東屋が現れてくる。

そして。

やっぱりそこに……。

いた。

池にかかった石造りの橋のちょうど中央に、近くに立っている水銀灯の柔らかな光を浴びて、少女が立っていた。

降りしきる雪の中、両手を軽く広げて、天を振り仰いでいた。

少女は雪の中、その銀色の髪の毛が光に映えて、まるで冬の夜に咲いた一輪の銀の花のように綺麗だった。

少女が振り返る。僕を見つめた。相変わらず警戒しているようでもあり、なにかを見定めているようでもある判断に困る表情。

少女はつっと一歩後ろに下がった。さらにまたもう一歩後ろに……恐らく無意識だろう、後ろに下がる。僕は何気ない口調で、

「茗荷さんと志村さんが捜してるよ」

軽くそう言った。すると少女はぴたりと後ろに下がるのを止めた。僕を見つめ、

「……」

無言で頬を染めた。小さく俯き気味にこくりと頷く。

「すいません」
そしてようやく分かった。彼女はきっと雪をもっと肌で感じたかったんだ。
僕もその気持ちが理解出来たから。
「雪。珍しい？」
少女は軽く驚いたような表情になった。それからはにかむように、
「はい……」
彼女は小さく笑ってそう答え、天を振り仰ぐ。
「冷たくて」
手を大きく広げる。
白い息が彼女の口からこぼれた。
美しい、幸せそうな表情。
一体、少女はその目でどんな世界を見つめているのだろうか？
生物が見えない世界。
それは一体どんなものなのだろう？
「綺麗」
僕はしばらく黙って少女を見守っていた。
それから程良い頃合いを見計らって、



「じゃ、戻ろうか?」
と、手を差し伸ばした。
自分でもある程度は理解していた。もし、志村さんや茗荷さんの説明が嘘でないのなら、少女にとってこれが初めて人と触れあう経験になる。少女は本当に迷っていた。かなり長い間、僕の手をじっと見つめていた。だが、僕が一言。
「大丈夫。この手は決して君を傷つけたりはしないから」
と、言うとふっと身体の力を抜いた。やがて、
「……」
ぐっと。
おずおずとその細い指先を僕の指先に絡める。
まるで僕の存在を確かめようとするかのように。
そしてその先に確固たる感触を感じ取って。
驚いたように目を見開き。
「暖かい……」
頬を赤らめ、
「暖かくて、暖かい。とても柔らかい」
僕は笑った。

「君もね」

少女の負担にならないようほんの少しだけ少女の指先に自分の指を絡(から)め返す。

「君も暖かくて柔らかい」

第二章　アンビバレンス・コア・プロテクト

僕には明確な家族と呼べる存在がいない。
僕の父親は僕が見ている前で猟銃を口にくわえると無造作に引き金を引いた。
原因は母が家から出て行ったことだった。
赤く飛び散った血は天井を深紅に染め抜き、脳漿の匂いが一瞬でむっと部屋に立ちこめた。
僕はただ立ち尽くしたまま、ずっと父親が最後に僕に向けた空っぽの目のことを思いだしていた……。
父親と母親は大学時代からの付き合いだった。外では仕事が出来る有能な父親は家ではただの我が儘な子供だった。
やがて母親がそれに我慢が出来なくなって家から出て行った。
僕もはっきりと覚えているが、父親は良くかんしゃくを起こしていた。ほんの些細なことが大半だった。
まだ幼かった僕の世話に追われて母が父親の食事を後回しにした。それだけで父親は甲高い声で喚き散らしながらがんがんとタンスを何度も蹴った。その凹んだ跡は母親が家から出ていった後も、父親が自殺した後も、ずっとずっとタンスに残り続けた。
僕は良く熱を出す子供だった。
さらに偏食も多く、意固地なところもあり、手の掛かる子供だったと思う。父親に可愛がられた記憶は全くない。

父親は良く僕をどす黒い恨むような目で見つめていた。

それは間違いなく自分が本来向けられるべき愛情を横取りするライバルに向ける我が儘な子供の目だった。

母親は偉かったと思う。

自分も仕事を持っているのにそんな父親と僕の面倒を忍耐強く、根気強く、並列して見続けた。全く家事を手伝わないどころか、僕を構えば喚いて、怒鳴って、時に暴力を振るう父親を許し続けた。

ある一線を越えたのは父親が母親の大切にしていたティーカップをこれ見よがしに壁に叩きつけた瞬間だった。

父親はそれを絶対にやるべきではなかった。

今でもはっきりと覚えている。

父親は得意げだった。

どうだ！

またお前の大事にしているモノを壊してやったぞ！

そういう甘やかされた子供の顔つきだった。

対して母親は一瞬で醒めた表情になった。ティーカップが壁で爆ぜた瞬間、母親の中でなにかがきっと同時に壊れたのだ。それから母親は父親と僕を黙って一瞥し、つけていたエプロン

を丁寧に剝ぎ取ると、そのまま無言で台所から立ち去った。
父親はただ呆気にとられているばかりだった。
それ以降、母親は離婚が成立するまで、僕と父親をまるで空気のように取り扱い始めた。一切の会話を拒絶し、目を合わせることなく、家からそっと出て行った。
あの頃、ちょうど僕は六歳。
事態を理解するにはまだ幼過ぎた。
ただ、自分が母親に見捨てられたのだということははっきりと分かった。父親はいとも簡単に壊れた。ご飯を食べなくなり、酒浸りになり、会社にも行かなくなった。
彼の人生はそして呆気なく意味を失った。
ただ泣いて暮らし、最後には自殺という手段を選んだ。
父親の最期のことは良く覚えている。
僕は今でも父の死を鮮明に覚えている。
感情的にどうこうはもうあまり思わない。さして哀しくもない。父が憎い訳でもない。ただ一つだけ父の死が僕に残したモノがあるとすれば、それは……。
僕が少女を引き連れて戻った時、志村さんと茗荷さんが同時に声を上げた。
「イエスタデー。も～、あなたね！」

「見つけたのか？　えらい！」
二人とも捜索を一段落させて部屋で落ちあっていたらしい。
明らかにほっとした表情をしていた。
「……」
僕は無言で少女へ道を譲ったが、彼女がこちらを不思議そうに見つめているのに気がつき、
「ああ」
はっきりと理解した。
肉眼ではこの二人の姿が本当に見えていないんだ。そういえば……。
と、少し思う。この子はその〝眼鏡〟と呼ばれている視覚をデジタルで補正する器具は持っていないのだろうか？
とりあえず手を前に差しだし、
「えっとね、茗荷さんと志村さんが目の前に立ってる」
そう説明した。すると少女は目を見開き、続いてぺこりと頭を下げた。
「ご心配をおかけしました……」
志村さんと茗荷さんは凄く複雑そうな顔つきをしていた。
それから僕と志村さん、茗荷さんは話しあいを始めた。

「まず、え〜と」
志村さんが頬に手を当て、困惑したように言った。
「なんと言ったらいいのかしら？」
「くそ！　この軟弱なヤツめ！」
一方、茗荷さんは自分の眼鏡をしきりに弄り回しながらなにやら罵っていた。なんでも少女を捜し回っている時にとうとう本格的に調子が悪くなってしまったらしい。僕はちらっと少し離れた位置に座っている少女を見つめた。
「……」
志村さんが僕の視線を辿り、
「そうね。ここまで来て、もう他に言うこともないわよね」
溜息と共に僕の両手を握ってきた。
「単刀直入にお願いするだけ。お願い。私たちに協力して。ね？」
僕は答えなかった。
「お願い」
志村さんは僕の眼をずいっと覗き込んできた。
僕は正直なところ迷っていた。どう考えても自分の理解の範囲を超える出来事に巻き込まれているような気はする。だけど、

「う～ん」

もう一度、少女の方を見つめる。彼女はこちらの方を黙って見つめている。

不思議と知りたくなってきた。

なぜ僕なのだろう？

なぜ僕だけ彼女の姿が見えるのだろう？

彼女から見られるのだろう？

「分かりました。じゃあ、僕で出来る範囲で」

そう答えた自分に少しだけ驚く。

「それでいいなら協力させていただきます」

でも。

その答えは僕の自然な気持ちから出てきたモノだった。

「よかった」

志村さんがほっと安堵したように笑い、茗荷さんが腹立たしそうに自分の眼鏡をぱんと机に置いた。

その後、色々話しあった結果、僕はしばらくホテルに滞在することになった。とりあえず一週間程度一緒にいてくれ、と頼まれ頷く。学校にはホテルから通えばいいし、一週間くらい今

住んでいる場所から離れたところでそれをどうこう言う人間は幸か不幸か僕の周りには全くいない。そしてその一週間の間に茗荷さんが持っている機材で幾つかの検査を受け、少女とコミュニケーションをはかる。
そんな感じで結論が出たところで茗荷さんが家まで送ってくれることになった。明日また迎えに来てくれるのだそうだ。
僕は茗荷さんがトイレに行っている間、一緒に廊下に出てきた少女に向かって、
「なんかね、しばらく一緒に生活することになるみたいだよ。よろしくね？」
と、笑いかけたら少女はぽかんとしたように僕を見つめた後、
「……」
困ったように、
「それは」
ちらっと周囲を見回す。志村さんがすぐ近くに立ってじっとこちらを見つめているのはきっと見えないのだろう。
小声で、
「志村さんとかも了承済みですか？」
僕は多少、困惑して、
「う、うん、もちろんそうだよ」

そう答えると彼女は、
「分かりました」
そそくさと自分の部屋の扉を開けてそこに戻っていってしまった。僕は半分、呆然としている。それ以上、ろくな挨拶も無かった。なんだか少女と上手くやっていけるか急に自信が無くなってきた。
すると。
「あの子」
志村さんが少女を見送ってしばらくしてからぽつりと呟く。顎に手を当て、
「ま、いっか」
そんなことを言いながらこちらも機材の置いてある部屋にさっさと戻っていこうとする。僕は慌てて、
「あ、あの」
と、呼び止めると突然にっこりと笑って、
「じゃあ、安住君。しばらくよろしくね？」
僕の手をぎゅっと握って、握手してきた。僕はずっと戸惑ったままだった。少女といい、志村さんといい、まだまだ良く分からない点が多過ぎる。
その意味でまだ茗荷さんの方が分かりが良かった。

「待たせたな」
そう言って志村さんと入れ違いに機材の置いてある部屋から出てきた茗荷さんの顔を見て僕はちょっとだけほっとした。
地階まで降りて駐車場を少し歩く。ここに来るまで乗ってきた赤い軽自動車にまた乗り込む。運転席には茗荷さん。
助手席には僕。
すると。
〝あれ?〟
と、僕は思った。僕と茗荷さんの後から少女がついてきていたのだ。するりと後部座席のドアを開け、車の中に一緒に乗り込んだ。
なんか黄色いナップザックを大事そうにお腹に抱えている。僕はなんだろうと思って振り返りかけたが、茗荷さんが、
「……で、お前、どこに住んでるんだ?」
と、声を掛けてきたので、
「あ、とりあえず今日お会いした橋のところまで行ってください。それで」
と、答えた。

ちらっとルームミラーを見ると、少女はお行儀良く座って、横を向き、窓の外をじっと見つめている。ぷらんと座席から細い足が垂れ、ほっそりとした身体が毛皮のシートカバーにすっぽり埋まっていた。

見送りに来てくれるのかな？

と、僕は勝手に解釈して、視線を前に戻した。

すっかりと日が落ちた街の中を車は緩やかに走った。途中、対向車のハイビームが降りしきる雪の中からふわっと浮き上がってくるたびに、運転席でハンドルを握る茗荷さんの顔が青白く照らしだされた。

この人は眼鏡を掛けていない方がハンサムだと思う。

それから彼はいきなり、

「しっかし、お前も変わったヤツだな」

と、そう言った。

「はい？　なんでですか？」

「いや、俺たちから言い出しといてなんだけどな、なんでお前そう簡単に俺たちについてきたり、面倒ごとを素直に引き受けたりするんだ？」

「……」

僕は黙り込んだ。それからちょっと困って、
「まあ、自分に無理がない程度なら」
う〜ん、と唸ってから、
「まあ、自分に無理がない程度なら基本的に流れには逆らわない主義なんですよ」
「いいのか？」
茗荷さんが脅かすように言う。
「志村はああ見えてしつこいぞ？　あと言っておくけど俺もお前が関わるって宣言した以上、容赦なくお前のこと調べるからな？　明日から検査、検査で覚悟をしておけよ？」
僕はちらっと後部座席の少女をミラー越しに見た。彼女はやっぱり茗荷さんの話が聞こえていないようで窓の外を眺めている。
僕は言った。
「いや、別に。やっぱり基本的に面倒ごとだとは思ってません。僕もなぜ僕だけが彼女を見えるのか理由が知りたいし……その点で協力は惜しみませんよ」
「ふ〜ん」
茗荷さんはにやっと笑った。
「ま、良い心がけだ」
それからちょっと黙った後、

「なあ、ところで話は少し変わるが、お前にはイエスタデーが一体どう見えてるんだ？」

これまた随分と答えにくい質問だ。僕は困る。でも、出来るだけ率直に言う。ちらっとルームミラー越しに少女を見やりながら、

「いや、普通の……えっと、女の子ですよ」

少女はまだ黙って窓の外を見つめ続けていた。

「普通ね～」

茗荷さんはハンドルを切りながら、

「お前、今度あいつと手の握りあいをしてみ。腕相撲でもいいや」

「？」

「必ず負けるから」

「……まさか」

「あいつの握力一体幾つあると思う？　百だ」

「は、はい？」

唖然とする僕に茗荷さんがくくっと笑って、

「百メートルあいつは十一秒フラットくらいで走るぞ」

「……それってえ～と」

「知能の方も少し喋ってみれば分かったと思うが、同世代の子供の比じゃねえ。あいつ、見た

モノは全て（すべ）覚えていて、聞いたことは絶対に忘れないらしい」

「わ、分けて貰（もら）いたいモノですね、それ」

僕は冗談（じょうだん）半分でそう言った。すると茗荷（みょうが）さんが鼻を鳴らし、

「ま、余禄（よろく）だよ、余禄。〝黄昏の子供たち（Dusk Children）〟はみんなそんなもんだ。どいつもこいつも信じられないくらいのハイスペックをその小さな身体（からだ）に宿している。それにあいつはな、結構ややっこしいヤツが多い〝黄昏の子供たち（Dusk Children）〟の中で一番、協調性（きょうちょうせい）が高いヤツだからな」

茗荷さんは満足げに笑った。

「ま、志村（しむら）と違って、俺（おれ）は担当官（Parents）になってまだ半年ちょっとだけど、あいつが最初の担当でほんとラッキーだったと思う」

「……」

茗荷さんは黙（だま）っている僕をちらっと横目で見て、

「現状では〝黄昏の子供たち（Dusk Children）〟が俺たちと遺伝的（いでんてき）に異なる、という証拠（しょうこ）はまだ明確（めいかく）に出てはいない。だけどな、俺は」

と、そこでぐっと息をため、一言で言い放った。

まるで役者が決定的な台詞（パンチライン）を言うように。

「これははっきり言っておくな。俺はイエスタデーを初めとする〝黄昏の子供たち（Dusk Children）〟はい、いわゆる人間ではないと思っている！」

茗荷さんは手を伸ばし、まだなにも言っていない僕の頭をこづく。
「アホ。だから、と言って別に妖怪とかそういう訳じゃないぞ。俺たちがネアンデルタール人だとしたらあいつらはホモ・サピエンス。つまり、人間ではなくて、〝人間の次の人間〟なんだと俺は思っている……さっき言いかけたな？　なんでイエスタデーたちが俺たちには見えないのか、ということに関して俺には考えがあると」
「ええ、はい」
僕は頷いた。茗荷さんは言う。
「よし。話してやる。俺はたとえばこう考える。イエスタデーたち〝黄昏の子供たち〟は地球が始まって四十六億年、初めて現れた生命体なのだ、と。だから俺たちは彼らが認識出来ないのだ、と。情報を視覚固定しえない、体内在的にありえないものだから存在するように感じられないと」
「……」
僕は眉をひそめる。話の骨子が良く分からない。
茗荷さんは嚙んで含めるように、
「いいか？　俺たちは犬は分かるな？　猫も見れば分かるな？　雪も、空も、岩も、木も、アメーバだって、細菌だって、見れば認識できる。分かる。仮に名称がついていなければつけて、それを分類し、頭の中にカテゴリー分けすることが出来る。そこまでは理解できるな？」

「は、はい」

「それはなんでか？　つまり俺たちが進化してきた過程の時間軸に従ってそれらが並列して存在してきたからだ、とこう考えてみろ」

「時間軸に、存在？」

「そうだ。過去、あるいは現在、俺たち人類……というより、人類が単細胞生物だった頃から接しえてきた存在は俺たちは認識できるんだ。それが化石になってしまった古生代の生物だろうと、顕微鏡の中のウイルスだろうと、遥か銀河の先の宇宙人だろうと、俺たちの時間軸に内包される存在は俺たちの許容を越えず、概念化出来、名称をつけられる」

「！」

「それはどういうことか？　つまり、〝黄昏の子供たち〟を見ても、俺たちはあいつらが自分たちの進化の時間軸以後の存在であるために、頭に刻んでおくことが出来ない。たとえどんなに外観は同じで、同じ種族のように見えても、俺たちの脳が処理しきれない情報を〝黄昏の子供たち〟は内包しているから……それが俺の仮説だ」

僕は唸ってしまった。

「で、でも」

幾つか反論したい点もある。茗荷さんがちょっと笑った。

「まあ、な。その論で行くとじゃあ、シーラカンスとかからは俺たちが見えないのか？　って

ことになっちまうからな。でも、俺はきっとこの考え方の延長線上になんかの鍵があると思う。たとえばシーラカンスと俺たちでは繋がるけど、俺たちと〝黄昏の子供たち〟の間には同じ時間軸の延長にはあるがなんらかの〝断絶〟があるという考え方をとれば……ん？　おっと。ほら、ついたんじゃないか？」

　そう言って前を指さした。

　車は最初に茗荷さんたちと出会った場所にさしかかっていた……。

　その後、幾つか細い道を曲がって、僕が住んでいるアパートの前で車は停まった。

　助手席から降りる僕に向かって、

「じゃあ……頼むな」

　と、茗荷さんが一言そう言ってこつんと僕の肩を拳でついた。

「は、はい」

　茗荷さんはそれ以上なにも言わず、アクセルを踏んで車を動かす。

　僕は走りだす車を見送りながらぼんやりと。

「あ、あれ？」

　雪の中。

　少女がぽつんと道の反対側に立ってこちらを見ていることに気がついて。

「え!?」
思わず声が裏返ってしまった。
「車から降りちゃったの？　なんで？」
なんでだ？
僕のほんの目の前に、茗荷さんが人類の至宝、と呼んでいた銀髪の美少女が立っている。
な、なんでだ!?
僕は焦った。
するとナップザックを背負った少女は僕以上に焦りながら、
「だ、だって、春道さん、一緒に生活するって！」
手を握り込み、抗議するような口調でそう言った。
「あ」
と、僕は絶句した。そうか、アレをそういう意味に取ったのか……。僕は寒いのに冷や汗めいたモノが額に浮かんでくるのを感じていた。
雪が二人の間をしんしんと埋めていった。

なんだか色々と誤解があったようだ。
大変なことになった。

僕は慌てて茗荷さんを追いかけようとしたが、車はとっくに角を曲がって去っていた。どうしよう？

僕は少女を振り返ると、

「あ、う……あ」

大変な失態をしてしまったかのように身体を硬直させている。言葉もろくに出てこないみたいだ。

僕はふっと肩の力を抜いた。

「あ、ぜんぜん、大丈夫」

手を振って、

「とりあえず、僕の部屋に行こうか。ここ寒いし」

促した。

「多分、しばらくしたら茗荷さんたち君がいないことに気がついてすぐ戻ってくるでしょ？そんな慌てることでもない」

少女はぴたっと固まってじっと僕を見つめている。完全に涙目だ。

「……」

僕は苦笑した。

「だいじょうぶ。僕がちゃんと必ずなんとかするから」

少女はふっと目を伏せた。横を向き、小さな声で、
「ごめんなさい……」
もの凄く悄気きっていた。でも、彼女は別になにも悪くない。僕は笑って言った。
「ううん、ぜんぜん。謝らないで。汚いところですけど、さ、ど〜ぞ」

この街からバスで三十分程の安須野という地方の旧家。
僕は父が死んでから遠縁の叔父と叔母に預けられ、中学卒業までそこで育てて貰った。幸いなことに叔父と叔母はかなりの資産家で僕一人の食い扶持を捻出することにさしたる障害が無かったようだ。
ただ、叔父と叔母には成人した長男がいて、その長男がちょうど僕が中学を卒業する辺りで家族を引き連れて郷里に戻ってくることになったため、急遽、僕の居場所が無くなってしまった。
僕より二十も年上のその長男には年頃の女の子もいるし、幾ら家が広いと言っても、このままでは互いの居住空間が浸食しあうのは目に見えている。
僕はそう考えてある日、自主的に叔父と叔母に申し出た。
〝すいません、高校は市内なので我が儘言うようですが、これを機会に一人暮らしさせて頂けないでしょうか?〟

そう頼んだ時の叔父と叔母のほっとしたような表情を見て、僕は自分の選択が正しかったことを確認した。

それから出来るだけ非礼にならないよう、

〃いや、本当に申し訳ないんですけど、そういうのに憧れていまして〃

そう付け加えた。

叔父と叔母はすぐに月々の生活費の援助を申し出てくれた。僕は深く感謝してそれを頂くことにした。

叔父叔母が言うとおり、

〃高校くらいは出ておかないと〃

というのはある意味で正しいと判断したのだ。

その方が今後の人生において若干有利になる、くらいの意味でだけど。

ただ、叔父と叔母が最初に手配してくれた築浅のマンションは断った。叔父と叔母の好意はありがたかったが、自分には分不相応だと思ったし、高校を出たらその分は出来るだけすぐに叔父と叔母に返さなきゃならないのだ。だから、僕は自分で一番安く入居出来そうなアパートを探しだし、そこに入居を決めた。

そうして僕はそこで一人暮らしをするようになり、今、そのアパートの階段をこの綺麗な銀髪の少女と上っている。

ひどく不思議な気がした。

僕の部屋は六畳一間。

トイレともの凄く小さいがちゃんとバスとキッチンもついている。家賃、三万五千円にしてはなかなか上出来だろう。

僕は少女を招き入れ、

「さ、えっと。え〜と」

困った。はっきり言って僕はこの部屋に女の子を上げたことなどただの一度も無い。男友達だってろくに上げたことが無いのだ。

その上、この不思議な少女。

正直なところどう接したら良いのかまるで分からない。少女が、たとえ〝しばらく一緒に生活することになるみたいだよ〟という言葉を誤解していたにせよ、僕にたった一人でついてきたのはかなり意外だった。

まだ警戒されているような感じはひしひしと伝わってくるのに。言われたことはそのまま素直に従うタイプの子なのだろうか？

だが、僕が困惑していたら少女の気持ちはきっとますます逃げていくだろう。

「ど、どうぞ？」

と、とりあえず僕は奥へ進むようジェスチャーで示してみる。少女は頬を赤らめ、
「……」
靴を脱ぐと、小さな素足になり、
「おじゃまします……」
とことこと板の間を歩いた。それからはっとしたように、
「！」
もう一度慌てて玄関に戻ってきて、恥ずかしそうにしゃがみ込み、
「……」
靴の爪先を正面に揃えた。ちらっと「これでいいの？」と確認を取るように僕を見上げる。
僕は少しおかしくなった。
そういう教育を志村さんとかから受けているのだろうか？
壊れやすい貴金属の芸術品を預けられたような落ち着かない感じが、そういう少女の普通っぽい行動でだいぶ和らいだ。
「ん。じゃあ、そこにある座布団に座ってね」
僕はちゃぶ台の前に置いてある座布団を指さした。少女はこくりと頷き、
「……」
恐る恐る部屋の中に入った。今、わっと背後から脅かせば彼女は確実にそのまま卒倒するよ

うな気がする。それくらい少女は緊張しきっていた。
僕は苦笑する。
「なんにもないでしょ？　僕の部屋」
僕の部屋には本当になにも無いのだ。
勉強用の机と椅子。
壁の端に積んである衣類ケース。
あとはそれとちゃぶ台。
それに温熱ヒーターくらいかな？
布団は押し入れから出すし、本も買わないから本棚も無い。テレビやオーディオ関係は持ってない。パソコンなどは仮にあっても多分使わない。唯一、UFOキャッチャーで取ったぬいぐるみや小物がインテリア（？）として窓辺に並んでいるくらいだ。
「こういう風に他の人の部屋に入るのとかってもしかしてこれが初めて？」
と、僕が尋ねると少女はこくりと頷き、
「初めて、です……」
今にも消え入りそうな声。
少女はまるでそれが爆弾の起爆スイッチでもあるかのように恐る恐る座布団の上に腰を落とし、部屋の中をひっそりと見回していた。おっかなびっくりではあるが、初めて入った男の部

屋が興味深そうでもある。
さながら〝借りてきた猫〟みたいな印象だ。
僕はそんな彼女に向かってキッチンの方から声を掛ける。
「ねえ、お茶淹れるけど、紅茶でいい？」
すると少女はふと我に返ったように、
「え？　あ、はい……」
「あのさ、君は一体普段はどんなところに住んでいるの？」
僕は彼女をリラックスさせようと思って何気ない口調でそう尋ねた。やかんを火に掛ける。
ふおっと炎が灯り、かんかんかんかんとガスレンジが音を立て始めた。少女はちょっと考えてから
小さな声で、
「白っぽい部屋です」
と、そう答えた。
「ん？」
僕はインスタントの紅茶から包装紙を取りながら、
「白っぽい部屋？」
どういう意味だ？
「ベッドと洋服ダンス。机。パソコン。モニター。壁紙が白なので白っぽい部屋かと。大きな

研究施設に付随する生活棟の一室です」
僕は納得する。
「茗荷さんと志村さんは？　あの人たちも普段はそこにいるの？」
と、僕。少女は、
「お二人とも普段は別のところにお住まいです。通ってらっしゃいます」
そう答えた。
「そう、か……」
なるほど。
じゃあ、夜とかはきっと一人っきりなんだ……。
冷蔵庫を開ける。
良かった。
牛乳だけは買ってあった。
「お砂糖とミルクは？」
少女は、
「……」
黙り込んだ。僕はしばらく返事を待つ。だけど、答えは返ってこない。怪訝に思って台所から部屋に顔を出すと、

「えっと、その両方を……」
ナップザックを傍に置いていた少女が顔を上げてそうオーダーしてきた。
「了解」
僕は笑って用意を調え、少女の前にクマの柄のついたマグカップを二つ持っていった。これもＵＦＯキャッチャーで取った戦利品だった。
少女は僕からカップを受け取って両の手のひらで包み込むようにして中身を飲んだ。ふ〜と息を吹きかけ、
「ん」
目をつむる。
少女の動きがその瞬間、止まる。また目を見開き感心したように、
「おいしい……」
僕を見上げて、
「おいしいです」
感情を込めてそう強調した。僕は笑って、
「そう言って貰えるとなにより」
「……」

少女はしばらく黙って僕を見上げていた。それから少し迷ったように、
「春道さんはここに……お一人暮らしされているのですか？」
僕は頷いた。
「うん」
内心少しびっくりしている。
これが少女から僕への初めての質問だった。向こうからコミュニケーションを取ってきたのは多分これが初めてだ。
「ご家族の方は？」
その問いに僕は、
「あ、え～とね。僕、家族らしい家族がいないんだよ。ずっと一人なの」
少女はその言葉の意味をじっくりと考えているようだった。
やがてややばつが悪そうに、
「そうですか……じゃあ、わたしと一緒です」
ちらっと僕を見上げ、はにかむように笑った。不思議な気分だった。僕と彼女はきっとなにもかも全てが違う。
それなのに先程からごく普通に会話を成立させている。
他の生物が見えない。

一体、それはどういう状態なのだろうか？
「ねえ」
と、僕はちらっと机の上に置いてある目覚まし時計の時間を確認しながら声を掛けた。僕の頭の中でしばらく時間を潰せばやがて少女がいないことに気がついた志村さんと茗荷さんが慌てて迎えに来るだろうという計算があった。
だから、その間、ほんの少しだけ少女とお喋りしていればいい……。
「はい」
「僕以外は見えないんだよね？　何も？　人とか犬とか、その生き物が？」
少女は頷いた。彼女自身迷うように、
「多分」
「多分？」
「世界中の人や生き物を見たわけではないので。確証は。でも、多分」
「なるほど。ん～」
僕は思い悩む。分からない。
どう頑張ってみても少女が見ている景色は全く想像がつかなかった。
でも、待てよ……。
「あのさ」

と、僕は尋ねた。
「君は志村さんや茗荷さんがつけていたような〝眼鏡〟は持ってないの？　そうすれば君も他の人を見ることが出来るんでしょ？　どうしてそれをつけたりしないの？」
手で輪っかを作り、目の縁に当てて見せた。少女は、
「！」
一瞬、息を呑んだ。それから、
「……」
当惑したように、
「……志村さんや茗荷さんから何も聞いてませんか？　なにも」
上目遣い。僕は訳が分からず、
「聞く？　なにを？」
「……」
少女はしばらく黙って口元に右の拳を当てていた。それから目を逸らしながら、
「じ、じつは」
掠れるようなさらに囁くような声で、
「〝補聴器〟と一体型のモノがあったのですが、壊してしまいました」
そう告白する。

「！」
僕はちょっと押し黙ってから、
「え、え？ こわした〜？ あ、そうか。茗荷さんのもそういえば壊れてたね。あれ、わりとデリケートなんだ？」
「……わ、わたしの場合、デリケートという以前に踏みつぶしてしまったので」
「あ、な、なるほど」
この子は妖精めいた外見の割に凄くドジな一面も持ちあわせているらしい。最初ホテルで出会った時、豪快に後ろへすっ飛んでいった様子が思いだされて僕は赤面した。少女は目の回りを朱に染め、恥ずかしそうに、
「……あ、あの、呆れてませんか？ わたしに」
「あ、呆れてないよ、別に。えっと……スペアはないの？ その〝眼鏡〟に」
「今のところは、ありません」
少女はどんどんと赤くなる。僕は取り繕うように、
「あ〜、で、でもさ、結局、他のビデオカメラとかで普通に志村さんたちを写せばそれでいい訳なんでしょ？」
「そ、そうですね。〝眼鏡〟も原理的にはやはりただのカメラな訳ですから」
「ん？ 待てよ。携帯のシャメでお互いを撮ったり、あれ？ メールとかは？ あ、その前に

電話をすれば普通に話せる訳？」
「はい、携帯とかで話せば、普通に」
「なるほど。〝眼鏡〟がないなら……それが一番、効率良さそうな連絡方法だね？」
「はい……そうですね。最初、春道さんとお会いした時もわたし、志村さんと携帯で連絡を取り合いながら歩いていたんですよ」
　少女はちょっと不思議な感じで微笑んだ。
　僕は考える。
　淡い、壊れそうな華奢な外観に少しドジな性格。
　生きているモノを見ることが出来ない少女。生きているモノから見られない少女。説明だけ聞いていると到底、理解不可能な環境にいる少女だが、こうしてごく普通にコミュニケーションは取ることが出来る。
　だから、僕も少女に対しては出来るだけ普通に接するようにした。
　多分、それが一番良いような気がしたのだ。
　それから後も僕らはもうしばらく雑談を交わした。少女はぽつりぽつりと五月雨のような返事だが、なんとか会話の相手になってくれた。だが、夜が深々と更けいっても茗荷さんたちが戻ってくる気配は一向に無かった……。

さすがにだんだんと心配になってきた。僕はちらっと時計に目を走らせた。まだ茗荷さんや志村さんは少女がいないことに気がついていないのだろうか？

もうすっかり深夜と言っても良い時間だ。僕は自分の携帯を取りだした。連絡先は志村さんに教えてある。

でも、着信は無い。

こちらからももちろん何度か掛けてみたが、全く電話が繋がらなかった。

僕は自分の随分と型式の古い携帯を見下ろす。

なにかあったのだろうか？

少女をちらっと見ると、

「……」

頼りなさそうな表情を浮かべてこちらを見返してきた。少女は携帯をホテルに忘れてきてしまったのだそうだ。

どうしよう？

お互いなんとなく気まずくなり会話もとぎれがちになる。

「あはは、え～」

僕は会話の接ぎ穂を失って、

「寒くない？　大丈夫？」

そう尋ねた。少女は小さくこくりと頷く。
「……はい」
先程温熱ヒーターをつけたので部屋はそれなりに暖まり始めていた。でも、少女はまだ微かに身震いをしている。
それも無理はない。
外では夕刻辺りから片時も休むことなく雪が降り続けているのだ。夜半を過ぎ、きっと外気は氷点下に落ち込んでいるだろう。ひんやりとした冷気が築二十年を誇る我がアパートの至る所から室内に滲み込んできている。
「ん。でも、一応、これ羽織って」
僕は自分の衣装箱から厚手のシャツを取りだし、少女に手渡した。そうした方が良いと思ったのだ。少女はきょとんとした表情でそれを受け取り、
「？」
なんだかまるで意味が分かっていない感じだ。僕の方が困った。
「え～、これ。羽織るの？　ん？　いや？」
少女は驚いた顔になった。それからふるふると首を横に振った。
「！」
慌ててシャツを羽織って。

そして。

「！」

また驚いた表情になった。そのままゆっくりとした動作で袖口や肩の辺りに頬を押しつけくんくんと匂いを嗅いでいる。

僕は不安になった。

「え？　なに？　臭い？」

洗濯はちゃんとしているつもりだが。

臭いが残っているのだろうか？

「……」

少女はまた否定の仕草をした。それから、

「暖かい」

と、僕を見上げる。

「ありがとうございます……」

少しだけ潤んだ瞳から、感情がこぼれていた。どこか嬉しそうだった。一体、今の言動はなんだったのだろう？

僕は出来るだけ自分の気持ちを落ち着けようと、

「し、しかし、茗荷さんたちも意外に不注意だね。君がいないことにすぐに気がつきそうなモ

ノなのにね」

少女も目を逸らし気味に、

「……」

答えは無い。僕は咳払いをして、

「えっと、もしあの人たちが今日中に戻ってこない場合、明日、夜が明けたら真っ直ぐにバスで茗荷さんたちのいるホテルに行こう？　それで大丈夫？……というかもう時間的にそれしかないけど」

そう言うと少女は複雑そうな表情になり、

「はい……」

小さく笑って一度、頷いた。

「すいません」

と、幾度か少女は口にした。そう言ってまた目を逸らす。僕は、

「……」

困惑した。少女がなにに対して謝っているのか、上手く判断出来なかった。間違えて僕のところに来てしまったことか。

それとも僕の家に一晩泊まることを指しているのか。

「すいません」

だから、僕は、

「気にしないで」

と、笑うことしか出来なかった。少女は微かに微笑んで僕を見上げた。なんだかとてももの悲しそうな笑みだった。

なんとなく少女は疲れているように見えた。

それから後もとりとめのない会話をした。

だが、次第に少女がうつらうつらとするようになった。やはりずっと気を張っていたのだろう。受け答えも朦朧とし、身体が弛緩し、首がかくんと時折、揺れている。そしてとうとう壁にもたれかかるとそのまますうっと静かな寝息を立て始めた。

僕はちょっと苦笑した。

やっぱりまだまだ子供なんだ、と思った。どんなに特殊な環境にいても、どんなに特別な能力を持っていてもそれは変わらない。

疲れたら、起きていることに耐えられない子供。

僕はよいしょっと声を掛けて立ち上がり、押し入れから布団を取りだすと畳の上に敷く。次に〝ちょっと触っちゃうけどごめんね？〟と内心で謝りながら、彼女の身体に触れようとした。

そのとたん。
「！」
少女がはっと目を覚まして、僕を認め、
「！」
愕然とした表情で横合いに飛び退いた。僕は慌てた。
「いや！　風邪引くから！　ほら、布団！　布団で寝て寝て！」
少女はそちらを見つめ、
「……」
ぶるぶると首を横に振った。絶対に嫌、というように目をつむり、上着をぎゅっと内側に引っ張っている。僕は溜息。
「……ん～、布団で寝た方が良いと思うんだけど」
少女は急にはっとしたように、
「あの、わ、わたし」
申し訳なさそうな上目遣いになった。
「その、あの」
僕は顔の前で手を振った。笑ってみせる。考えてみたらここは少女にとってまだ良く得体の知れない男の部屋なのだ。そこで堂々と寝ろ、という方が難しいだろう。だから、僕は出来る

だけ優しげな笑顔を作り、
「ん。なんか寝たかったら適当にその布団を使って」
そう言って自分はそこから少し離れた壁にもたれかかり、あぐらを組むと、目をつむり、ぼんやりと考え事を始めた。
今日一日のめまぐるしい出来事。
そして少女のことを。
彼女はじっとこちらを観察しているようだった。
僕は少女の警戒を解くため、あえて寝たふりをするつもりだった。そうすれば彼女も少しは安心して布団を使えるかもしれない。
そう思ったのだが……。
何時しか僕もまた深い眠りに陥ってしまっていたようだ。朝まで延々、僕以外誰もいない教室でずっと見えない誰かを捜し続ける夢を見た。
それは哀しかったけど。
同時にどこか懐かしい夢だった。
少女が布団を使ったかどうかは知らない。
朝、目を覚ますと部屋が柔らかい光で満ちていた。カーテンを引いて外を見なくても分かっ

た。きっと雪が積もっている。
この光は地表を覆う雪が太陽光を反射させている時の光だ。眩いのだけど、決してどぎつくは無い。
気がつけば僕の肩には毛布が掛けてあった。どうやら少女が気を遣って掛けてくれたモノらしい。僕はそれを床に置きながら、首を巡らす。
「お？」
昨夜、少女に勧めた布団は丁寧に折り畳まれていた。
使用したのだろうか？
台所からはごそごそなにかやっているような気配がする。僕は強ばった身体を「ん〜」と伸ばしながら、立ち上がった。屈伸。腰の辺りが少し痛い。座ったまま寝たので筋がばりばりだった。でも、とりあえずなんとかなりそうだ。
そのまま歩いていって磨りガラスをがらりと開けて、
「おはよう。なにやってるの？」
何気なくそう声を掛けた。そのとたん、
「あ、す、すいません！」
少女がびっくりしたような顔で振り返った。
「そ、そのお水を頂こうと」

コップを持って水道の蛇口に手を伸ばしているところだったらしい。僕は笑って、
「水、と言わず、遠慮せず、冷蔵庫のミルクでもなんでも飲んで良いよ。なんだったらすぐにお湯沸かしてお茶淹れるから」
そう言うと少女は恐縮したように赤くなった。
「は、はい……ありがとうございます」

とりあえず少女には待って貰って僕は朝飯を作った。キャベツの千切りと目玉焼き、それにトーストというごく簡単なモノだ。それに少し暖めた牛乳もつける。少女と二人、ちゃぶ台に向かいあわせで一緒に食べた。
僕にとって僕一人じゃない食卓は随分と久しぶりのことだった。少女はしきりに恐縮しながら箸を取った。
そして、食事中、
「春道さん、昨日はすいませんでした……」
と、謝ってくる。僕は一瞬、彼女の言っていることが理解出来ず、
「え？」
と、首を傾げる。
「あの、お布団」

「あ。いやいや、別に。ちゃんと使って寝たの？」
少女はこくんと小さく頷いた。恥ずかしそうに、
「少し。ありがとうございました」
「ん」
僕は微笑んだ。
「少しでも寝れたのならそれでいいよ」
少女は俯いている。朝の光が窓から射し込んできて、きらりきらりと彼女の特徴的な銀髪が輝いて見えた。
僕はその眩い輝きに感心して思わず食事の手を止め、
「あ〜、そういえばさ」
と、少女に向かって声を掛けた。
「イエスタデー」
「はい？」
と、少女が小首を傾げて返事をした。僕は迷いつつ、
「って、日本人の僕にはちょっと呼びにくいからさ、僕は別の……なんていうのかな？　君をあだ名みたいな別の名前で呼んでいい？」
少女は訝しそうに、

「あだな、ですか?」
「そう。なんかね、日本人ぽい名前」
と、降りしきる雪の中の少女を思いだす。
「たとえばなんだけど、銀花ってどうかな?　銀の花で銀花……おかしい?」
少女は軽く目を見開いていた。
それから。
「くす」
と、小さく笑った。
「なんだか……」
「え?」
「くすぐったい気がします」
「いや?」
少女はゆっくりと首を横に振った。
「綺麗です」
「はい?」
「綺麗過ぎてなんだかわたしじゃないみたいですけど、春道さんが呼びやすいのならそれで」
いや、君は充分綺麗だと思うけどね。

とは、僕は口にしなかった。少女が肯定的にその名前を受け入れてくれていることがなんとなく分かったからだ。

「良かった。じゃあ、これから僕は君をそう呼ぶね？」

そう確認すると少女は恥ずかしそうに首をすくめ、

「はい」

と、目を伏せつつ、頷いた。それから少女は何度も小さく、

「銀花……」

と、しきりに自分自身に向かって呟いていた。

その後、予定通り、志村さん、茗荷さんの泊まっているホテルに行くことにした。今日は土曜日なので学校はない。

部屋のガス、電気をきちんと確認し、

「じゃ、行こうか？」

と、少女……いや、銀花を促した。

「はい」

と、ナップザックを背負った銀花がぺこりと頭を下げた。

「お世話になりました。本当にありがとうございました」

昨日から一緒にいて分かってきたことだが、そういうところは実に律儀な子だった。だから、僕は笑って頭を下げ返した。
「これはご丁寧に。お粗末様でした」

この時点で僕は志村さんと茗荷さんになにかアクシデントがあったのではないかと漠然と予想をしていた。
普通の状態では、重要な保護対象である銀花がいないことにここまで気がつかない、ということは無いだろう。
なにがあったのかは分からないけど。
でも、僕はその考えはとりあえず銀花には黙っておいた。
彼女は家の外に出ると、
「わ、すごい……」
と、呆気にとられたように辺りを見回していた。確かに街は一晩で一面の銀世界になっていた。道の上に、塀の上に、屋根の上に、ゴミバケツの上に、電信柱の上に雪が降り積もっている。彼女の吐く息が煌めいて、天に上っていった。
雪が全ての景色を支配していた。
「だいじょうぶ？　寒くない？　寒かったらもう一枚着るモノ出してくるけど？」

と、僕が銀花にそう尋ねると彼女は首を横に振った。
「大丈夫です」
白い息。でも、大丈夫そうだ。
「ん」
僕は鍵をかけ、
「では、参りましょう。階段、滑らないように気をつけてね？」
「……はい」
銀花はこくりと小さく頷いた。
しかし、銀花の方がよっぽど軽やかな身のこなしで僕の方が危うく凍りついた外階段を滑り落ちるところだった。往来に出たところで雪景色に見とれている銀花をちょっと見守る。アパートの前にぽっかりとそこだけ雪が積もっていない場所があった。どうやらそこに車を停めていた人がいたらしい。
車出すの大変だったろうな、この雪だと、と僕は少し同情した。
バス停までの間、僕は銀花の少し後ろを歩きながら、ずっと感心して彼女の歩く姿を観察していた。銀花はまるで存在自体が重力という軛から解き放たれているかのように軽やかに雪の上を歩いていた。

対して僕は一歩、一歩、歩くごとにずぼずぼと足が雪の中に埋まっていく。銀花の足跡は本当にごくささやかなモノで、僕がつけていく足跡とは全く性質が違う。これは体重の重い軽いの問題では無いだろう。
本当に妖精みたいだな、と思った。
きっと冬の妖精。

バスは予定時刻の十分遅れくらいでのろのろとやってきた。
後部の乗降口から整理券を取り、バスに乗り込む。乗客はまばらで僕と銀花は一番、後ろの席に並んで陣取ることが出来た。
動き始めたバスの中で、機械的な女性のアナウンスが流れた。僕らが目指すホテルは八つ先の停留所だった。
僕は窓の外の景色をじっと眺めている銀花にそっと声を掛けた。
「ねえ、銀花。ちょっと訊いて良いかな?」
「……」
銀花が振り返った。目を細め、
「なんでしょう?　でも」
と、初めて見る少し悪戯っぽい微笑みを浮かべる。

「なんとなくはなんのご質問か分かります。いいですよ、なんでも訊いてくださって」
僕はその答えに苦笑しつつ、
「じゃあ、遠慮なく訊くね？　あのさ、君には今、どういう風に景色が見えているの？」
そう尋ねた。
銀花はそれに対して、
「なにも」
微笑んだ。
「バスの運転手さんは？」
「見えません」
「あそこの三列前にいるおばさんとか、その横の女の子は？」
「いいえ」
「バスの外。街を歩いている人は？」
「全く」
僕は言葉を失う。そっか。
やっぱり見えないのか……。
「でも」
と、彼女は、

「春道さんだけははっきりと見えてますよ。わたしにも」
目を伏せ、そう言った。僕はどきっとした。
その言い方がびっくりするくらい穏やかで、感情のこもったモノだった。嚙み締めるようになにかを確認するように銀花は強くそう言っていた。
あまりこれといって格別な反応を示さないのでついつい見過ごしがちになっているが、銀花は銀花で〝黄昏の子供たち〟の一人である自分と機械を通さずにコミュニケーションをはかる〝僕〟という奇異な存在に対してなんらかの想いは抱いているのかもしれない。
僕は銀花の物言いに多少、驚きつつ、
「で、でもさ、そのえ～と、〝眼鏡〟だっけ？　それをつけてれば普通になんでも見えるんでしょ？」
銀花は一瞬答えに詰まった。それからぎこちなく、
「ええ、まあ」
「ん～。ほんと不便だね。昨日も聞いたけど、スペアはないんだよね？」
「……」
銀花は伏し目がちに、
「こっちに来てから壊してしまいましたから……本部にはあるんでしょうけど。それが届くまでもうちょっと時間がかかるんじゃないですか？」

「そっかあ」
銀花は目を落としたまま、わずかに微笑んだ。
「ドジですね、わたし」
「意外なことにそうみたいなんだよね」
と、僕は頷きかけ、
「……」
前の席の中年女性がじっとこちらを不審そうに見つめていることに気がついて、
「?」
小首を傾げる。それからようやっと思い至った。
ああ、と声を上げかけた。そうか。銀花は人を見ることも出来ないし、人から見られることも出来ない。だから。
女性からは僕の隣に今、誰も座っていないように見えている。どうやらぶつぶつと独り言を話している怪しげな奴と思われたようだ。僕はなんだか気恥ずかしくなりその人の視線を避けるようにして窓の方に身体を捻った。顔が少し赤くなった。そして銀花はそんな僕をちらっと横目で見てそっとまた微笑み、目を伏せた。
目的のバス停でバスを降り、しばらく雪道をまた歩く。ホテルが見えてきた時、一度、銀花

が立ち止まった。
「ん？　どうしたの？」
僕が振り返ると、
「……」
驚いた。銀花はなんだか複雑そうな顔つきでホテルを見上げていた。
そして僕に視線を移し、
「いいえ」
少しだけ哀しそうな笑顔で首を振る。
「なんでもないです」
そう言って今度は僕の前に立って歩きだす。僕はぽかんとした。
なんだったのだろう、一体？
なだらかなスロープのエントランスをくぐり抜け、ホテルに入って志村さんたちが部屋を取っていた十二階を目指した。
僕はホテルなど片手で数えるくらいしか利用したことないが、宿泊客みたいな顔をしていれば、フロントで呼び止められることもないみたいだ。
エレベーターに乗り込んだ時、中年の夫婦とおぼしき男女が一組乗り込んできたが、僕をちらっと見ただけで、銀花の方は一顧だにしなかった。十二階で降り、昨日、志村さんたちと話

をした一二〇七号室へ向かって真っ直ぐに廊下を歩いていく。
銀花はちらっと僕を見上げると、
「わたし、ちょっと……」
「ん、なに？」
「すいません。お洋服を」
恥ずかしそうに赤くなり、
「まず着替えてきます」
そう言って隣の自分の部屋にカードキーを使って入っていった。考えてみたら銀花は昨日からずっとそのままの格好だった。ナップザックは背負ったままできっとあの中に衣類も入っていたのだろうが、結局、中身を取りだすことはしなかった。
やっぱり気まずかったんだろうな、と僕がそんなことを考えていると、
「ありゃ、安住くん？」
突然、一二〇七号室の扉が開いて、びっくりした顔の志村さんが出てきた。
「あんた、ここで……なにやってるの？」
訝しそうな表情。不思議そうな口調。
それはこっちの台詞だ！
「志村さんこそ！　どうしたんですか!?　昨日は全く連絡がとれなくなって。心配したんです

よ！　あの子、うち来ちゃってたし！　気がついてますよね？　もちろん」
と、僕が一息で責めるようにしてそう言うと、
「え？　ああ……それはね、もちろん、ね」
と、志村さんはなんだか疲れたように髪を掻き上げた。
「ごめんね、ちょっと病院へ行ってたの。連絡取れなくてごめん。でも、昨日はあの後ほんと忙しくて……過労による急性胃腸炎。一週間ほど入院が必要だって」
僕は目を剝いた。そういえば昨晩からずっと志村さんは具合が悪そうだった。なるほど、そういうことだったのか！
でも、大丈夫なのだろうか？
「え？　い、いいんですか？　こんなところにいて。早く病院に戻らないと」
と、僕が心配してそう言うと、志村さんは困惑したように、
「へ？　なんで私に出来ることとってもうないし。後はお医者さんに任せるしか」
「あるでしょ出来ること！　安静にしてなきゃダメですよ！」
そのとたん志村さんがいきなり笑いだした。
「あはは、なんだ！　なんか会話が嚙み合わないと思ったらそういうことか。違う違う！」
「え？」
「入院が必要なのは茗荷の方。私じゃないって」

「は？」
僕はびっくりして思わず固まってしまった。志村さんはけらけらと笑いながら、
「私はただの風邪」
「か、かぜ？」
「そ～。それより」
と、志村さんは目を細めた。
「どうだった？　イエスタデーと一晩一緒に過ごして？」
僕は半ば怒りながら、
「どうもこうもないですよ！　あの子、可哀相にずっと緊張してましたよ！」
志村さんは困ったように、
「ごめんねえ～。本当はすぐに迎えに行くつもりだったんだけど、あなたたちが出て行った後本部から連絡があって、で、帰ってきた茗荷と今後の方針を色々話しあってたら突然、お腹抱えて呻き出しちゃって」
志村さんは深く溜息をつく。
「あいつ、あれで結構、ストレス溜め込みやすいタイプなのよね～。仕事を詰め込みすぎるとすぐに身体を壊しちゃうの。前も同じように胃腸壊して入院したことがあってね。で、てんやわんや。とりあえず茗荷を夜間でもやってる病院に連れてって、それからあなたのところへ迎

えに行くか、電話しようかと思ったんだけど、さらに別件で本部から連絡が入っちゃって、もうそれで忙しくて忙しくて」
がっくりと肩を落とす。
「気がついたらこんな時間」
良く見れば。
志村さんも昨日に増して相当、顔色が悪かった。
「……大丈夫ですか？」
僕は眉をひそめて気遣った。志村さんは気持ち悪そうに顔を歪めた。
「だいじょうぶ……と、言いたいんだけど、正直、あんまり良くないわね」
僕は困って、
「えっと、お薬か何かを持ってきましょうか？」
「あのね、それよりお願いがあるんだけど聞いてくれる？」
と、志村さん。
「はい？　なんでしょう？」
と、僕。志村さんは僕を真顔でじっと見つめやがて一言。
「ちょっとの間、イエスタデーをあなたのところで預かってくれない？　実はちょうど今、これからその件であなたに電話しようと思ってたところなの」

「は?」
僕は固まった。志村さんはなんでもないことのように、
「とりあえず私が風邪を治す間。ここに置いておいたらあの子にも風邪移っちゃうから……だから、とりあえず一日か二日お願い」
「い、いや。移っちゃうかもって……あの、僕一応、昨日会ったばかりで」
志村さんはじいっと僕を見た。にっと笑って、
「問題ないない!」
ふと一瞬だけ真剣な目になり、
「その間の生活費はちゃんと払うから……お願いね?」
そう言うとくるっと背を向けて、歩きだした。
「あ、ちょっと! どこへ行くんですか?」
「寝る……自分の部屋で」
そう答え、志村さんはふらふらと身体をふらつかせながら、廊下の角を曲がって見えなくなる。僕は最後まで呆気にとられていた。
彼女にとって銀花は大事な、茗荷さんの言葉を借りれば〝人類の至宝〟ではないのか?
二人とも銀花を専属でケアするために担当官として存在しているのではないのか?
それなのに会って間もない、まだ素性も良く分からない僕にその少女を預けるなんて……正

気の沙汰とも思えない。

僕は頭が痛くなってきた。溜息が自然とこぼれる。

さらに驚いたのは十分程して自分の部屋から出てきた銀花に、

「と、志村さんがそんなこと言ってたんだけど、いったい何考えてるんだろうね？ 君だって僕の部屋でこれ以上、寝泊まりするなんて嫌でしょ？」

と、同意を求めるよう問いかけたらしばらくの間、じっと深く考え事をして、

「いいえ」

と、はにかむように赤くなり、

「だいじょうぶです」

掠れるような小さな声ではっきりとそう言った。

「は？」

と、僕。銀花はちらっと上目遣いで僕を見て、

「志村さんがそう仰るなら……わたし、別に、構いません」

また目を伏せる。僕は言葉も無かった。

「……迷惑」

銀花はまたもう一度、僕をちらっと見上げて、

「ですか？」

僕は半ば困惑しながら、

「いや、迷惑とかじゃ全然ないけど」

昨日の様子からしてどう見ても僕に心を許している風では無い。なのに、今、彼女は僕の部屋に、数日、滞在することを許諾している。

一体なにを考えているのだろう？

さらにもっと良く分からないのは、銀花がほんのわずかながらほっとした様子を見せていることだった。彼女はぺこりと頭を下げると、

「ありがとうございました、春道さん。しばらく宜しくお願いします」

そう言った。

一体、どうなってるんだろう？

志村さんといい、この子といい……。

その日、銀花はナップザックではなく、大きな旅行用のバッグを持って僕の部屋にやってきた。自分でも良く分からないまま、僕はどうやら抜き差しならぬ事態に巻き込まれてしまったようだった。

第四章　銀色の輝く花

その夜、僕は志村さんと電話で話をしていた。それは向こうから掛かってきたもので、僕の家にやってきた銀花の様子を尋ねてくるものだった。
だから、僕は、
「え？　ああ、はい。とりあえず今のところは問題はないです」
と、そう答えた。志村さんの声は本当にだるそうだった。
「うん、ごめんねえ～、安住くん。色々厄介ごと頼んじゃってさ」
そういう風にしおらしく謝られると僕としても強い態度に出ることが出来ない。
「……いえ、それはもういいんです。それより、早く風邪を治して出来るだけ早くあの子を迎えに来てあげてくださいね？」
としか言えない。
「うん」
電話越しの志村さんはやはり殊勝だった。
「そうする。重ね重ねありがとう」
彼女はしばらく黙り込んでいた後、
「で、あの子、なんか言っていた？」
と、少し声の調子を落として尋ねてきた。
「はい？」

「ん。私たちのこととか、自分のこととかでなんか言っていた？」
妙に真剣な口調だ。
「いえ、特に」
と、僕は首を傾げる。どういう意味だろう？
「そう」
と、志村さんは小さく溜息をついてから急に明るい声になり、
「じゃ、いいの。とにかくあの子のことお願いね？」
「ええ、はい」
「私はとりあえず水分とって寝るわ。頑張って栄養とって早く治す！　お休み！」
「ええ、お休みなさい……」
そこで僕はまた首を捻った。どうも良く分からなかった。志村さんがなにを考えているのか。
銀花が一体、なにを考えているのか。
僕は軽く溜息をついた。
それからちらっと視線を上げ、部屋と廊下を仕切る中仕切りを見つめた。また落ち着かない気分がこみ上げてきた。
銀花がちょうど今、風呂に入っているのだ。部屋の片隅には彼女が持ってきたバッグがある。恐らく衣服その他が入っているらしきモノ。さっき、銀花はごそごそとそこからパジャマと小

さな袋を取りだすと、特にその小さな袋を僕に見えないように隠し持って風呂場に向かった。
彼女がお風呂に行くまでも多少、色々あった。
〝……えっと、こうして晩ご飯も食べ終わった訳だし、お風呂沸かすけど入る?〟
と、僕が尋ねると、
〝……〟
もの凄く赤くなって恥ずかしがった。黙り込み、ちらっと僕を見て、こくりと頷く。それまでもぎこちない雰囲気だったが、それがさらに増した。ホテルからこの部屋に戻ってきて、僕と銀花は多分、二言、三言くらいしか話していないはずだ。
昨日から引き続いて家に不思議な少女がいるので日常的な感覚がおかしくなりそうだった。
とりあえずフキンで意味もなく埃取りなんかを始める。
気を紛らわすためだ。
床の上に一本の長い毛が落ちていた。
「……う~ん」
僕は改めて感心する。
本当に銀色。
銀花の髪の毛だ。白みがかった金髪などのいわゆるプラチナブロンドとはちょっと違う気がする。紛いの無い銀。

澄んだ銀だ。

僕はそれを蛍光灯にすかし、それからゴミ箱にそっと落として捨てた。ちょうどその時、かたんと音がして中仕切りが開かれた。

台所の方の冷たい空気が入り込んでくる。今日は雪が降ってはいないが、冷え込みは昨日よりも厳しいかもしれない。

「……お風呂」

ぺこりと銀花が頭を下げた。

「ありがとうございました」

パジャマ姿。首元まで赤くなっていた。

「あ、うん」

僕もなんとなく赤面する。お風呂上がりの銀花はそれだけなんだかいつもとはちょっと違って見えた。妖精がそこらにいる普通の女の子に見える。

赤いチェック柄のパジャマ姿だった。

ほんの少し濡れた髪に上気した頬。しっとりと肌が艶めいていた。白い手の甲と素足だけが出ている。相変わらず現実離れした美少女だが、そうやって頼りなげに立っているとどこか親しみやすい感がある。僕は言った。

「湯冷めしないようにね」

銀花は小さく頷くととととっと温熱ヒーターの前に走っていってちょこんとその前に女の子座りになった。さらに僕に隠すようにお風呂まで持っていった小さな袋をバッグにこそこそと入れ直している。

恐らく。

中に替えの下着でも入っているのだろう。僕は気まずい気持ちになり、出来るだけそこから目を逸らして、

「じゃ、じゃあ、今度は僕がお風呂に入ってくるね？」

そう言うと銀花は曖昧な表情で一度頷いた。こちらも少し赤面していた。

僕が風呂から上がってくると銀花は僕が昨日貸したシャツをしっかりと着込んでいた。四つんばいになり、窓ぎわの縫いぐるみを興味深そうにじっと見つめている。大まじめな顔でちょんちょんと一体（クマの縫いぐるみ）の頭を突いていた。

それが年頃の少女めいていて随分と可愛らしかった。

僕は、

「気になる？　良かったらどれか好きなのあげようか？」

と、尋ねるとばっと跳ね起き、また正座の姿勢になって、ぶるぶる首を横に振った。

「い、いいえ、大丈夫です……」

遠慮することは無いのだが……。別に僕は縫いぐるみ自体が好きな訳ではないのだ。銀花は恐縮したように身体を小さくしている。

僕はどっかりと座布団の上に腰を落とし、

「さて、どうしようか？　もう寝る？」

銀花は手を膝に突っ張り、赤くなった。視線を落とす。

「う〜ん、なんだろう？　もうちょっとお喋りでもする？」

固くなってまだ赤くなっている銀花。

「ホットミルクでも飲むとか？」

それでもじっと黙っている銀花。そして彼女は顔を上げ、

「さっき」

「ん？」

「……電話していたようですけど。志村さん、ですか？」

「ああ」

と、僕は声を上げた。

「そう。志村さん……君のことを心配してね。向こうから電話をかけてきたよ」

そう言うと銀花はまた俯いた。小さな声で、

「志村さん、お風邪良くなるといいですね」

さらに囁くような声で、
「茗荷さんの具合も」
僕は努めて平静に言った。
「いや、まあ、聞いた限りだと茗荷さんも別に重病って感じでもないし、志村さんもすぐに治るでしょ、アレは」
銀花はちょっと頷いた。相変わらず俯いたままだ。僕は頭の中を過ぎる様々な疑問を抑え、それとはやや違う質問をした。
「あのさ、志村さんと茗荷さんってどんな人なの？」
すると銀花が不思議そうに顔を上げた。
「……どんな、とは？」
「あ〜、いや、普段、君とどう接しているのかなと」
銀花はしばらく考えてから、
「志村さんは……格好いい恋人がいるそうです」
「ほう」
と、僕。
「貿易会社勤務だそうです」
どうも自分の知っている彼女らの断片的な情報を僕に話してくれているらしい。銀花は少し

微笑んで、

「年下だそうです」

「へ～、年下のイケメン。やるね、志村さんも……茗荷さんは？」

銀花は首を横に振った。

「茗荷さんは残念ながら今のところいないそうです」

それはなんとなく想像がついた。

「志村さんと茗荷さんは大学の同窓生だそうで、茗荷さんは元々、普通の研究者だったのですが、志村さんが特に推薦して〝財団〟に来て貰ったのだそうです。二人ともプライベートでもメールをやり取りするくらい仲が良いそうです」

銀花は志村さんたちのことを語りながら不思議な目をしていた。

「……」

なぜだろう？

口元には笑みを浮かべて話しているのに。

僕にはどこか銀花が寂しそうに見えた。そしてそれはなぜだか僕の心にも言いしれぬ悲しさを呼び起こした。

「明日さ」

僕は出し抜けにそう言った。

「お暇？」
銀花がきょとんとしていた。僕は少し含み笑って、
「良かったら一緒に街に出ない？　遊びに行かない？」
銀花が目を丸くした。それからかあっと赤くなって、
「べ、別に、はい。特に用事はないですけど。当たり前ですけど」
「じゃあ、決まりだ。この街を僕が案内してあげるよ」
ちょっとずつ仲良くなっていってみようと思った。この子のことをもっと良く知ってみたいと初めて強く思った。
銀花は俯いてずっと固くなっていた。

それからちょっとミルクを暖めて、二人で飲んだ。銀花はまたぽつりぽつりとしか返事を返さなくなってきたが、僕ももうあまり積極的には話しかけなかった。飲み終わったコップを流しに持っていき軽く洗う。歯を磨き、寝る準備をする。僕は布団を少し距離を離して並べ、銀花が片方の布団に潜り込んだところを確認して電気を消す。
「そういえば誰かと並んで寝るの、随分と久しぶりだ」
と、僕が自分の布団に入りながら言うと銀花は、
「わたしは全く初めてです……」

と、ぎこちなく言葉を返してきた。暗闇の中、声が少し上擦っていた。僕もずっと居心地の悪い、どこか気恥ずかしい想いをしているが、それ以上に銀花は緊張しているらしい。考えてみれば当たり前か。

互いのことをまだほとんど知らない異性同士なのだ。

僕はなんでこの子といるのかな?

この子はなんで僕のところにいるのかな?

そんなことをとろとろと考えているうちに次第に眠りが訪れてきた。その日また夢を見た。

誰も彼もが僕の前から消えていってしまう夢だった。

クラスメートたちが、父が、そして母が。

いなくなり、消えていき、僕は誰もいない世界にたった一人取り残されていた。哀しくて、ただ哀しくて泣いていた。

そんな夢だったと思う……。

朝早くに目が覚めた。布団の中でしばらく半覚醒状態が続いた。手をゆっくりと握り締め、また開く。身体の中心を貫く神経が少し震えているのが分かる。久しぶりだった。心が灰色に覆われている。目をはっきりと覚ませば、そのうち徐々に澄んでいくのは分かる。

でも、なぜかそうしたくない。

このまま、永劫、自分が目を覚まさなければそれでいい気がする。目を覚ましたくない。戻りたくない。
あそこには戻りたくない……。
戻りたくない。
戻る理由が無いから。
無いから。
無いから。
そこで意識が急浮上する。僕は身体をゆっくりと持ち上げた……。

「はあ」
と、溜息をついた。染みいるように辺りは冷たかった。僕が使っているのは予備の布団で若干、布地が薄い。なのでまだ布団の中にいるというのに寒気を感じた。息が室内なのに白かった。だけど、その部屋の冷たさが僕を徐々に覚醒に導いていった。
「はあ」
また長く息をついた。首を振る。頭を手で押さえた。まだ心がじいんと痺れていた。微睡みに戻りたい。
目を覚ましていたくない。そんな気持ちを抑える。

時間が過ぎていけばそれは無くなるから。苦しいのは治まるから。
それは知ってるから。
僕は焦らなかった。ここ最近は落ち着いてきたのに。
やはり夢見があまり良くなかったせいなのだろうか？
アレ、ではなかったのに。
アノ夢ではなかったというのに、それに近い感情を呼び覚ましてしまった。
「……消えたい気持ち、か」
僕は小さく呟いた。手の震えや心拍数の変化はやはりアレの時程ではない。なので大丈夫だと自分で判断した。
ふと銀花が気になって顔を上げる。隣を見やると布団は丁寧に畳まれていた。
「ん？」
と、思い首を巡らす。台所の方で微かな物音がした。僕は小さく笑った。また水でも飲もうとしているのだろうか？
僕は彼女を脅かさないように布団の中に入ったまま、
「ねえ、銀花。起きてるの？」
と、声を掛けた。ぴたりと物音が止んだ。すうっと台所と部屋の中仕切りが開いて銀花がそこから顔を出す。

「お、おはようございます」
驚いたことに彼女はもうとっくに着替え終わっていた。
「あら、早いね……」
時計を見ると八時半。
「ん。じゃ、朝ご飯作るね？」
「は、はい、何か手伝えることがありましたら遠慮なく言ってください」
銀花がこちらに入ってきながらちょこんと僕の前に座った。真剣な表情だった。僕はおかしくなって、
「あ、じゃあ、ちょっと顔洗って着替えてくるんでお湯だけ沸かしておいてくれる？」
銀花はこくんと一度頷くとぱたぱたと立ち上がって小走りに台所の方へ向かった。本当に律儀な子だな、と思った。

洗面所で洗面、歯磨き、着替えを終え、僕は台所へ向かった。ヤカンを火に掛けていた銀花が「これでいいのか？」というような表情で僕を見上げてきた。僕が、
「うん、さんきゅ」
と、言うとほっとした顔をしていた。僕は彼女が見ている前で手早く卵焼きと野菜炒め、それにトーストを作る。

銀花はまだじっとこちらを見つめているので、
「はい、お皿。ちゃぶ台に並べておいて」
そう言うといそいそとこちらの指示に従った。彼女としてもやることがあった方が気が楽なのかもしれない。そう思って僕は、
「じゃあ、今度は冷蔵庫からケチャップとバター取り出しておいて」
と、言いつける。
「ん？　どうしたの？」
不思議なことに少し銀花は笑っていた。僕は気になって、
と、尋ねると。
「……」
ちょっとはにかんでから、
「楽しいです」
「え？」
「こういうこと、あまりしたことがないから」
「ああ」
恐らく彼女がいる施設では、銀花をこのように働かせたりはしないのだろう。考えてみたら世界でもほんの数えるくらいしかいない希少な子供たちなのだ。

「う～ん」

半分冗談めかして、

「茗荷さん辺りに怒られるかもね？　うちのお姫様をこき使ってなんてことするんだって」

すると少女は驚いた目になってふるふると首を振った。可哀相に。困っている。僕はあえて気楽な口調で、

「ま、でも、うちに来ている間はうちの居候だからね～。僕の言うとおり、がんがん働いて貰うよ～」

少女の固さがすっとほどけた。にこっとこちらがびっくりするくらい晴れやかな笑顔で、

「はい！」

ぱっと花が綻んだように辺りが明るくなった気がした。僕は菜箸を動かす手を止め、思わず見惚れた。驚いた。

見たことも無いくらいそれは可愛らしい笑顔だった。

食事を終え、また食器を流しに持っていって洗う。その間、銀花にはちゃぶ台をフキンで拭いて貰っていた。

僕がちらっとそちらを見るとものの凄く一生懸命な顔で、塵一つ残さないように力を込めてちゃぶ台を拭っていた。内心そこまでしなくてもいいよ、と思ったが、止めなかった。彼女が

真剣ながらもどこか楽しそうだったからだ。
僕は思わず笑っていた。
笑いながら手を動かした。鼻歌が少しこぼれる。
楽しかった。
朝、人がいるのはいいものだな、となんとなく思った。こんな風に人と一緒にいるのは随分と久しぶりだった。気がつけばいつの間にか、僕は明け方感じた憂鬱な感情をすっかりと後ろに置き去っていた。

一段落して九時半。
「じゃあ、そろそろ街に出てみようか？」
と、銀花に尋ねると銀花ははにかんだように小さく頷いた。
「はい」

外へ出ると昨日と同じくらいの快晴。眩い光が雪の上で乱反射し、煌めく結晶のように空に浮かんでいる。
雪は昨夜が寒かったため、溶けるよりも固くしまっていた。僕は凍りついた外階段を滑り落ちないように慎重に降りながら、

「気をつけてね？」
と、後ろからくる少女に注意したが、
「はい」
と、頷く銀花は全く危なげなかった。相変わらず身体の重さが無いかのように軽やかにとんとんと階段を降りてくる。不格好に手すりにしがみついている僕とはえらい違いだ。とりあえず歩道に降りたところで銀花を振りかえる。
「さって、と。どこか行きたいところはある？」
そう尋ねると銀花は口元に手を当て、しばしなにか考え込んだ。しかし、
「いいえ」
と、やがて首を振る。
「特には」
「そっか。じゃあ、僕が行きたいところでいい？」
銀花の顔を覗き込むようにしてそう尋ねた。銀花は一歩、後ろに後退しながら、
「はい、もちろんです」
上目遣いに僕を見る。白い息がこぼれていた。僕から距離を取るように下がったが、口元には多少の笑みが浮かんでいた。
僕にはプランがあった。

陸橋を出て、大通りの方に向かう。アーケードの下、商店が並んでいる。この街は決して大きな街ではない。
繁華街と言えばここと駅前くらい。
まだ朝なので清々しいくらい人通りがない。凛と冷たい空気の下でゆっくりと街が目を覚まし始めている。
バッティングセンター、カレー屋の次がお目当ての場所だった。
銀花はびっくりして目を丸くしていた。
僕は少し悪戯っぽく、
「こういうとこ入ったことがある？」
と、尋ねると全力でぶんぶんと首を横に振った。僕は笑いながら、
「じゃ、入ろうか？」
銀花はかなり躊躇していたが、僕が自動ドアをくぐったのを見て、慌ててちょこちょことついてきた。
そこはゲームセンターだった。きゅんぴゅん、という甲高い電子音がそこかしこに聞こえる。
室内はほんのりと暖かい。そんなに大きなところではない。筐体も数える程しかない。奥行き

だって狭い。
だけど、銀花にとってはそれはまさに生まれて始めてみる景色なのだろう。呆気にとられたように周囲を見回していた。
僕はそんな銀花の様子を少し面白く観察しながら、
「銀花」
と声を掛けた。
「何かやってみたいものはある？」
銀花は大きく見開いた目を僕に向け、
「……」
困惑しきっていた。僕は笑った。ちょっと意地悪だったかもしれない。
「じゃあ、まずクレーンゲームやろうか？」
銀花はぎこちなくだが、小さく頷いた。

僕は基本的にゲームはしないが、これだけはなぜかわりと好きだったし、得意だった。ちょっと小銭に余裕があるとふらっと入って大概、一発で目当てのモノをとっていく。前に一度一緒に来た山村健二や戸荻さんが随分と感心していた。
僕らはクレーンゲームが置かれているコーナーに移動した。

「あのね、銀花。あの中で何か欲しい物がある？」
僕は縫（ぬ）いぐるみが詰まった四つの筐体（きょうたい）を指さした。銀花は不思議（ふしぎ）そうに僕を見上げた。僕は言う。
「これでね、クレーンで掴（つか）んで縫いぐるみを取るゲームなの。どれか気に入ったモノある？」
銀花は目を丸くした。
それから困ったように僕とクレーンゲームの中身を見つめ、
「じゃ、じゃあ、アレ」
と、猫の縫いぐるみを指さした。版権モノらしい。『バッテニャン』と筐体の横の説明書きには書いてある。口がバッテンの形をした猫だった。
ちょうどいい。
僕は一度舌で上唇を舐（な）め、
「うっし。じゃあ、やってみるね」
財布から小銭を取りだした。
結果から言って正解だった。僕は二回目で見事その手のひらサイズの猫の縫いぐるみを手に入れることが出来た。
銀花は最初戸惑（とまど）っていたが、一回目、僕がクレーンを動かしていく過程で、徐々に額（ひたい）をガラ

スに近づけ、縫いぐるみを摑んだクレーンが空中でほどけ、落下した時点で初めて、僕は笑って、
「あ！」
と、声を上げた。残念そうに僕を見上げる。どうやらこのゲームの仕組みを理解したらしい。
「あと、一回チャンスあるからね」
手首を軽く捻ってリラックスした。銀花はこくんと頷き、またガラスの中に視線を戻した。
二回目。今度は銀花も興味津々で僕が動かしていくクレーンを見つめていた。クレーンが縫いぐるみを摑んだ時はぐっと自分の手のひらも握っている。
ちらっと横目で見ると真剣極まりない顔つきをしていた。
おかしくなった。
でも、二回目は成功。ことんと取り出し口に縫いぐるみが落下したのを見て、銀花は小さく安堵の溜息をついていた。
僕はそれをしゃがんで取りだし、
「はい」
と、銀花に差しだした。銀花は、
「！」
まるで言葉を忘れてしまったかのように、固まっている。

僕は苦笑して、
「そのために取ったんだよ。はい、プレゼント。こんなもので申し訳ないけど」
昨晩、銀花が縫いぐるみを興味深そうに見ていたことを覚えていたから。
ちょっと変則的ではあるが、銀花をまず最初にここに連れてきたのだ。
とにかく僕は銀花と仲良くなりたかった。
それにはプレゼントと単純に考えたのだけど。
どうやら、それはある程度成功したようだ。彼女は恐る恐る僕から縫いぐるみを受け取ると、
「！」
ぎゅっとそれを抱き締めた。俯く。僕はびっくりして、
「ど、どうしたの？」
と、尋ねると俯いたまま、
「嬉しい」
「え？」
「……」
泣いているのか、と思ったけどさすがにそこまでではなかった。だけど、銀花はびっくりするくらい長い間、じっとその姿勢を取っていた。
そして顔を上げ、少し潤んだ瞳で、

「ありがとうございます」
鼻声でお礼を言った。
「大事にします。絶対」
喜んでくれるかな、とは思ったが、正直、そこまで感謝されるとは考えていなかったので僕も意外だった。だけど。
「よかった」
心に暖かいモノがこみ上げてきた。良い子だな、この子は。
その後、何度か銀花に「今度は君がやらない？」とクレーンゲームを誘ってみたが、銀花はふるふると首を振った。
やりたくない。
のではないらしく、小さな声で、
「これで一杯だから」
と、そう答えた。どうやら僕が上げたその一個の縫いぐるみをとことん大事にしてくれる気らしい。だから、自分はやる気が無い。そのようなことを少し赤い頬で、目を逸らしがちにぼそぼそと小声で言われた。
そう言われるとこちらもほんと照れくさい。


BATSU
NYaN
The One and Only Animal
ニャー

「そ、そっか。じゃあ、他のゲームやってみる？」

するとその問いには、

「はい……」

はにかむように答えてくれた。

格闘ゲームや、シューティングゲームはパスして、最近、よく見る『脳の検定』ゲームを二人でやってみた。

タッチパネルで入力し、記憶力や判断力を調べるゲームだ。椅子に並んで二人協力プレーを選択。現れた数字を記憶したり、漢字を書いたり、線を繋げたり、音声から出る指示を瞬時に判断したり、計算式を解いたりする。

楽しかった。そしてなにより驚いた。

銀花は本当に桁外れの成績を取っていた。僕がもたもたと考えている間、彼女の手は常にめまぐるしく動いていた。本当に一秒の躊躇もなく彼女は次々と正解を選んでいく。立体の把握も、常識検定も、複雑な歯車も瞬時に見抜く。

全く死角がない。

この手のゲームのお約束通り、この『脳の検定』も自分の全国でのランキングが分かるのだが、銀花は記憶と論理的思考力部門で全国一桁の成績を取っていた。

ぽかんと呆気にとられ、

「す、すごいね。本当にすごい！」

と、繰り返す僕を見て、結構夢中になってゲームをしていた銀花は急にはっと我に返った。

「こ、これはその」

慌てて膝に手を突っ張り、俯く。首筋まで真っ赤になって、

「似たようなことを施設でよくやらされていたので」

恥ずかしそうな声。

「な、なれていただけです」

そういう問題ではないと思う。

が、銀花がやはりとんでもない力を持っているのだと改めて感じ入った。

続いて彼女をダンスゲームに連れていく。リズムに合わせて、光るパネルの上を踏んでいく類のモノだ。実際、これは僕は大の不得意だった。

僕にはリズム感というものが全くない。

前に一度やった時は壊滅的なスコアだった。

ただ、銀花がこのゲームをプレイするのを見てみたかった。なのでとりあえず僕が最初に、お手本。やっぱりひどいモノだ。

最下位クラスの得点。
のったのった必死で光るパネルを踏んでいく僕を見て、銀花はずっと曖昧な表情をしていた。同情するような、励ますようなそんな微妙な表情。
「ふは」
と、僕は汗を拭い、
「じゃあ、今度は君の番」
そう言うと銀花は無言で頷き、僕にバッニャンを預けた。そしてパネルの上に乗る。僕は小銭を投入。
「いくよ?」
と、合図を送り、銀花が頷いたのを見て、スタート。
軽快な音楽に乗り、銀花は舞い始める。
とたとんとん。
とたとんとん。
恐らく器用にこなすのだろうとは思ったが、実際はそれ以上だった。彼女は実に慣れた様子でステップを踏んでいた。足を伸ばし、手を振り、ゲームの上級者がやるようにくるっとターンしたりしている。
びっくりした僕が、

「前にやったことがあるの？」
と、尋ねると満面の笑みで、
「いいえ！」
そしてまた踊る。僕と違う。僕みたいにただ漫然と光るパネルを踏んでいるのではない。本当にリズムに合わせて軽快に踊っている。
そして。
楽しそうに笑っていた。笑っていた。
良かった。
と、思った。初めて彼女が子供らしく笑っている気がした。僕は左手を右手で抱え込み、同じように微笑んだ。
ちょっと心配していたけど。
ここに連れてきて正解だったかもしれない。
銀花はノーミスでステージを次々とクリアしていく。だんだんテンポが激しく、難易度が高くなっていく。だけど、銀花は全く危なげない足取りで着実にゲームを進めて……いくはずが段々と様子がおかしくなった。
なんだか真っ赤になり。
俯きがちになり。

「あ」
と、僕は気がついた。彼女は今日、ミニのスカートをはいてきている。そのため、その裾がひらひらとしているのだが、どうやらそれが気になってきたようだ。
しきりに裾を押さえ。
「う」
それでもステップを踏むから徐々にぎこちなくなり、最後には少ししゃがみ気味になり。
「うう」
結局、足を止め、ゲームオーバーになってしまった。まだスカートの裾を押さえている。パネルから降りてくる時に真っ赤になりながら、
「えっちです……」
目を逸らしがちに、ぼそっと言ったのがおかしかった。
最後にアクションゲームを一つ、二人でやってみる。怪獣が泡を食べていくゲームだ。僕も初めてだったが、今回は僕の方が上手かった。聞いてみたら銀花はゲームというものをほとんどやったことがないらしい。
「春道さん、上手ですね！」
銀花はとうとうゲームオーバーになってしまって感心したように僕を見上げる。

「あはは、そう？」
僕は銀花が応援してくれる中、もうちょっとだけゲームを続けた。彼女はファンシーな怪獣が動くのを見つめている。小さな声で、
「がんばれ、がんばれ」
と、呟いていた。手をきゅっと握っている。僕は今までにないくらい彼女が近くにいることに少しの驚きと大きな満足感を感じていた。

ゲームセンターを出て、
「とても楽しかったです！」
と、ぎゅっとバッニャンを抱っこした彼女に、
「じゃあ、今度は駅の方に行ってみようか？」
銀花はこくりと大きく頷いた。寒さからなのか、楽しさからなのか軽く彼女の頬が上気していた。

駅ビル内のやや大きめな本屋を軽くぶらつき、銀花が読書好きだということを知った。小説から技術書まで幅広く読むのだそうだ。
「漫画もそれなりに読みます……主に少女漫画ですけど」

と、少し恥ずかしそうに彼女は言った。僕も本が好きだよ、と言ったら彼女は嬉しそうに笑ってくれた。

雑貨店に入り、可愛らしいデザインの生活用品とかを見て回る。銀花は目を輝かせて、一つ一つを一生懸命に覗き込んでいた。

この子は割と可愛いモノが好きみたいだ。

ふと気になって、

「服とかはどうやって買ってるの？」

と、訊いたら志村さんとかに買ってきて貰うのだと言っていた。「本当はあまり面倒をおかけしたくないんですけど」と言った少女がほんの少しだけ哀しそうだった。僕は歩きながら改めて思っていた。

やっぱりこの子は誰にも見えないのだと。

行き交う人たちは器用に銀花を避けて歩いていた。でも、視線は全く銀花に向けていない。

一方、銀花は銀花で他の人を全く見ようとはしない。

お昼を回って人もだいぶ出歩いているのに、銀花の周りのそこだけまるでぽっかりと空虚な穴が空いているみたいだった。

銀花の目にはきっと僕しか映っていない。

道歩く人には銀花の姿は見えない。

そこに接点は無い。
どうしようもない乖離。
同じ世界にいるのに重ならない銀花と周りの人々。僕はなんだかそれを見ているのが辛くなってきて、
「ん。じゃ、そろそろお昼ご飯にするか？」
と、そう明るく銀花に声を掛けた。銀花は嬉しそうに、
「はい！」
と、返事を返してくれる。たとえ気持ちと裏腹でも明るく振る舞える。
それは僕の特技の一つだった。

ご飯は申し訳ないけどこちらの懐事情で決めさせて貰った。ファストフードだ。銀花と一緒に列に並び、彼女に言う。
「どれがいい？」
銀花はメニューを入念に覗き込み、
「え、えっとじゃあ、これで」
と、普通のハンバーガーを恐る恐る指さした。僕は笑って、
「ポテトと飲み物もどう？」

「え、えっと」

「大丈夫。それくらいなら一応、お金あるから」

「す、すいません」

もの凄く恐縮している銀花。

「ご馳走になります」

僕は自分の分と銀花の分をオーダーする。接客してくれた女の子が僕のことを怪訝そうな顔で見つめていたのが、それが恥ずかしくもあり、やるせなくもあった。きっとなにも無い空間に話しかけ、一人で二人前のメニューを頼んでいる変な人間に見えたのだろう。恥ずかしいという気持ち以上に。

なんだか溜息をつきたくなった。

でも、銀花にはそんなところは見せたくはない。

本当に大した食事でもないのに銀花は凄く喜んでくれた。

彼女はまずこういうお店に入ったこと自体無かったらしい。おっかなびっくりハンバーガーの包装紙をむしり取り、ぱくっと口に頬張る。ソースが口から垂れそうになって慌てていた。

僕は笑いながらティッシュを差しだしてやる。

銀花は赤くなってそれを片手で受け取り、口元を押さえていた。

「ふ、ふいません」

でも、それ以降はハンバーガーもポテトもぱくぱくと気持ち良いくらいの勢いで食べた。にこにこしながら美味しいです、美味しいです、としきりに繰り返していた。多分、こういったファストフードは施設では食べさせて貰えないんだろうな、となんとなく思った。訊いてみると案の定、完璧に栄養計算された料理が三食出てくるらしい。

なるほど。

本当にこの子はお姫様なのかもしれない。

まあ、茗荷さん曰く人類の至宝なのだから。

僕と銀花はその後、飲み物を飲みながら色々な話をした。往来に面した窓から陽光が射し込んでくる店内で僕らは笑いあいながら互いのことを話した。最初は彼女が主に僕の話を聞いてくれた。学校のこと。

友達のこと。

熱心に相づちを打ち、僕が冗談を言えば、おかしそうに笑ってくれた。彼女は上手な聞き役だった。

そして同時に僕も銀花のことをもう少し詳しく知ることが出来た。コメディ映画が好きなこと。雷が嫌いなこと。お寺や教会などの建築物が好きで良く見ていること。セロリが苦手で、

キャロットケーキが好きなこと。
そんなことを身振り手振りを交え、彼女は一生懸命、話してくれた。
僕はそれが嬉しかった。
銀花が心の距離を確実に縮めてきてくれているのがはっきりと分かったから。
こんなにも屈託なく笑っている銀花は初めて見る気がしたから。
しかし。
「う」
と、突然、銀花が口元を押さえた。恐る恐る、
「す、すいません」
恥ずかしそうな上目遣いになり、
「さっきから……なんだかわたしばかりべらべら喋ってますね？」
「ううん」
僕はずずっとジュースを啜ってにっと笑った。
「すっげえ、楽しいよ」
「ほ、本当ですか？」
「うん」
僕は頷いた。

「すごく」
銀花は赤くなり、俯き、
「わたし、もです。わたしも楽しいです。すごく」
「……それは良かった」
時折、周囲の人たちが怪訝そうに僕を見てくるのが分かる。当たり前だ。僕ははたから見れば何もない空間に向かってずっと独り言を呟いている変なヤツなのだから。
でも。
僕はただ楽しかった。この子の笑顔を見ているのが楽しかったのだ。

「ん」
しばらく経って、僕は銀花に言った。
「でさ、この後、どうする？　もう結構良い時間なんだけど？」
「あ」
と、銀花も壁時計を見上げてびっくりしていた。相当、長い時間二人でお喋りをしていたことになる。
銀花は恥ずかしそうに、
「……楽しかったです。楽しかった。すごく」

僕は笑って、
「どこか他に行きたいところはある?」
銀花はふるふると首を振った。
「充分。もう充分です」
バツニャンを抱え込む。俯いた。口元に笑みを浮かべ、バツニャンの手を動かしている。その仕草が可愛らしい。
「分かった。じゃあ、今日は夕食の買い物一緒にして帰ろうか?」
銀花は満面の笑みを浮かべ、頷いた。
「はい!」

銀花はスーパーでの買い物も初めてらしかった。
折角、駅前まで来たので帰り道は大きめのスーパーに連れて行ったら、色々な食材を興味深そうに見て回っていた。
「なにかリクエストは?」
と、尋ねると恥ずかしそうに、
「食べさせて貰うのならなんでもいいです」
と、そう答えてきた。僕は、

「じゃあ、肉じゃがと野菜炒めにしてみましょうか?」

銀花は微笑み、こくんと頷いた。

スーパーを出て並んで歩いている。そろそろ日が暮れかけて、辺りは夕焼け色に染まっていた。僕も銀花もなんとなく黙りがちになったが、時折、銀花はこちらを目を細めるようにして見上げ、またなにを言うでもなく恥ずかしそうにそっと目を伏せた。

ずっと彼女はバツニャンを抱っこして歩いていた。

と、目の前を親子連れが歩いてきた。五歳くらいの男の子がお父さんとお母さんに挟まれて楽しそうに笑っている。はしゃぐようにステップを踏んで、なにやら両親に叫んでいた。両親の方も慈愛の籠もった目で自分たちの子供を見つめている。

ちょっと心がしくんとするくらい仲の良い親子連れだ。当然、銀花には見えていないらしい。向こうも銀花は見えていない。

すれ違う。

その過程で、

〝そういえば〟

と、思う。普段はあんまり意識しないが、やはり街には子供の姿が少なかった。銀花と同い年くらいの思春期にさしかかるか、さしかからないかくらいの子は割といるのだが、小さな子

は結構、珍しい。

だから、お父さんもお母さんも凄くその子を大事そうにしていた。夕日で影が長く伸びている親子連れ。

僕は彼らを見送って微笑み、また銀花に視線を戻した。彼女は親子連れとすれ違ったことなど全く気がついていなかった。

少し前に目線を落とし、じっと俯いている。

僕は改めて考えた。

この子供が少なくなっている世界的な出生率の低下と銀花たち〝黄昏の子供たち〟を結ぶ因果関係はあるのだろうか？

茗荷さんは〝黄昏の子供たち〟を人類の次の担い手だと言っていた。僕らとは違う、僕らと似ているようでいて全く違う人類。

矢継ぎ早に銀花の並外れた能力が頭を過ぎっていく。

確かに違う。

違う、とは思う。銀花は……僕らと同じ存在では決してない。決して異質ではないが、根本的に同質とはなりえないほんのわずかな齟齬。差異。違い。頭の中に大きなビジョンが浮かんでいく。

地球に。

根を張っていた巨大な木が立ち枯れ、代わりにその横に新芽が芽吹き始めている。枯れかかった巨木が僕らで、新芽が銀花たちだ。このまま出生率の低下が続けば、僕らはやがて確実に緩やかな絶滅を迎えるだろう。

そして人類の一万年近い繁栄が終わりを迎える。その代わりが彼らなのだろうか？

僕らが滅んでいく過程で現れ、次代を受け継ぐ次の人類。

かつての旧人が新人に未来のバトンを受け渡したように。生物としての宿命として僕らは黄昏れ、彼らが代わりに根を張っていく。

果たしてそうなのだろうか？

でも。

と、僕は思った。銀花を見ているとなにかが違う気がした。

上手くは言えないのだが……。

なんだか痛々しいのだ。

彼女らはまだなにかが不完全な気がした。生き物として。次の人類として。

まるで早すぎて。

だから、危うくて。僕らが幕を引くスピードについて行けず、泣きだしそうな顔のまま舞台に飛びでてきた生き物としての新生児。

そんな気がする。

でなければ。

僕は銀花の横顔を見てこんなには不安に感じない。

互いに見ることが出来ない。志村さんがそう言っていたじゃないか。彼女らは自分と同種の人間すら互いに見ることも出来ないのだ。

それは生物としてあまりにも大きな欠落。

なにか致命的な設計図の過誤。僕は半ば無意識に、

「ねえ、銀花」

と、彼女に向かって声を掛けたところで。

「お～い。安住くん。なにしてるかにゃ？」

後ろから明るい素っ頓狂な声が聞こえてきた。

振り返ってびっくりした。それは赤い自転車に乗った戸荻さんだった。白いダッフルコートを着ている。

彼女はハンドル部分に腕を乗せ、にやにや笑いながら、

「なんか後ろから見てたらぶつぶつと独り言言ってたけど大丈夫？　隣に妖精さんでもいるのかな？」

白い息がこぼれた。僕はどきっとした。

「あ、いや」
ちらっと銀花に目を走らせた。銀花はすぐに誰かが僕に話しかけてきたことに気がついたのだろう。にこっと微笑むとお行儀良く脇にのいた。
どうやら気を遣ってくれているらしい。
僕は少し焦りながら、
「いないよ。妖精なんて」
と、戸荻さんに向かって答えた。さっきの店でならともかく、明日も会うクラスメートになにもいない空間に話しかけてる変な人間とはあまり思われたくはない。
僕は話を逸らした。
「そっちこそ、こんなところでどうしたの？　家、こっちの方じゃないでしょ？」
戸荻さんもそのことにはこだわらなかった。
「ん？　私？」
と、にっと笑う。
「私は従妹の家に遊びに行ってたとこ。最近、休みの日はヤツの家が多いのさ。お互いゲーム好きだからね」
それから少し立ち話をした。最後に戸荻さんは、
「じゃあ、春道くん。今度のライブ忘れないでくれたまえよ！」

そう言って手を振るとさあっと自転車を走らせ去っていった。角を曲がる時、愛嬌なのかサドルに座ったまま足を左右に広げるパフォーマンスを見せてくれた。
戸荻さんらしかった。
僕は少し苦笑した。
「ごめんね。お待たせ」
銀花を振り返る。すると銀花は、
「……今の方、戸荻さんですか？　さっきお話ししていたクラスメートの」
と、少し上目遣いで尋ねてきた。僕はびっくりした。
「な、なんで分かったの？」
会話の中で彼女の名前を呼んだ覚えはない。
「ま、まさかあの子のことも見えたの？」
「まさか」
と、銀花は悪戯っぽく微笑んで首を横に振った。
「でも、多分そうだと思いました。春道さん、ずっと照れたような、嬉しそうな顔をしていたからきっと」
「て、てれたような？　え？　そんな顔していた？」
「はい、だからガールフレンドの方かな、と」

くすくす笑って銀花。参った。どうやらからかわれているらしい。しかも凄い直感……いや、推理力なのかな、この場合？

だから、僕は困ったように頭を掻き、銀花は楽しそうに笑っていた。

家に戻り、銀花に少し手伝って貰いながらご飯を作り、ちゃぶ台に食器を並べ、夕食を始める頃にはもうすっかり夜になっていた。僕は普段、こんなちゃんとした料理は作らない。一人暮らしで、結構かつかつで生活しているくせにどうも根がずぼらなのか、自分で炊いた白米とお味噌汁以外は、出来合いのお総菜で間に合わせてしまう癖がある。

久しぶりの料理で結構時間を取ってしまった。

「いただきます」

「いただきます」

と、二人で声を出し、夕食を摂る。銀花は昼のようにはしゃぐことは無かったが、美味しそうにもぐもぐとご飯を食べていった。

「わたしが手伝ったところは不格好ですけど」

と、彼女は照れくさそうに言う。

「自分がお手伝いすると味は格別です」

「料理」

と、僕は笑う。
「初めてだった？」
銀花は恥ずかしそうに小さく頷いた。
「……すいません」
「いや、やる機会がないならそれはしょうがないよ」
「母がいたらきっと教えてくれたのでしょうけど」
銀花はぽつりとそう言った。僕は、
「……」
色々と彼女の家族について訊こうとして。たとえばお母さんは亡くなられたそうだけど、お父さんはどうしてるの、とか。
でも、言葉に出来ない。
銀花は微笑んだ。
「料理がうまかったそうですよ、亡くなった母は」
銀花は屈託なくそう言った。だから、僕も頷くに留まった。
「そうなんだ……」
銀花は嬉しそうに、得意そうに箸を口元に運んでいた。
僕はそれを黙って見つめながら、ああ、この子はきっと今でも亡くなったお母さんのことが

凄く好きなんだな、と思った。

ご飯を食べ終わり、食器を協力して洗う。僕がゆすいだのを銀花が拭く係だ。銀花の手つきはやはりおぼつかなく、時折、つるりと食器を取り落としそうになる。僕もはらはらしたが、銀花も相当、緊張したようだ。

それでも程なく全部洗い終える。

二人でちょっと紅茶を飲む。軽く休憩。その間、僕も銀花も口を開くことはなかった。銀花はずっとバツニャンを指で軽く突いて遊んでいた。

その後はお風呂の準備。

銀花に先に入って貰う。銀花は相変わらず恥ずかしそうに替えの下着の入った袋とパジャマを隠し持って浴室へ向かった。

僕は苦笑して軽く溜息。

そして志村さんに電話を掛けた……。

「ん。そろそろ来るかな～と思っていたのよ」

それが志村さんの第一声だった。僕はちょっと言葉に困って、

「なんか……お元気そうですね？」

「お陰様で」
と、電話の向こうで志村さんが言う。
「まだ少し体調は悪いけど……あと、ちょっと寝てれば大丈夫かな？　そちらの様子はどう？」
僕は今日あったことを色々話した。志村さんはずっと黙って聞き入っている。僕が彼女を銀花、と呼ぶことにしたと伝えると、ほんのちょっとだけ笑って、良い名前ね、と答えた。後はゲームセンターに連れて行ったことを伝える。
本屋やファストフードなど。
銀花がそこでどんな反応をしたのかを。志村さんは最後まで一言も挟むことなく聞き入ってくれた。やがて、
「ありがとう」
と、一言言った。
「イエスタデーを……いえ、ぎん、銀花って呼んでるんだっけあなたは？　あの子を本当に大事にしてくれて」
僕は、
「いえ」
と、照れくさくなり、答える。志村さんの声はなんだかびっくりするくらいしんみりとしていた。

「わたしたちじゃ出来なかった」
「え？」
「わたしが知る限り」
声が凄く掠れていた。
「わたしと茗荷が受け持つようになって半年経つけど、イエスタデーがそこまで笑ったことはただの一度もない。見たことないわ」
「……」
僕は最初出会った時の印象を思いだす。常に寂しそうな。
そんな横顔。
「あの子はね、前はイギリスにいたのよ。わたしたちとは別の担当官が二人ついていたの。でも、彼らの申し送りからもそんなこと聞いたことなかった」
「イギリスに？」
「ええ、まあ、〝財団〟の都合でこちらに移動になったんだけどね、正直、イエスタデーの方が心を開かなかったから……いわば配置換えに。だから」
と、彼女は一拍間を開けて言う。溜息のように、
「それは本当にすごいことなのよ。あなたは。多分、初めて……〝黄昏の子供たち〟の一人と本当の意味で初めてコミュニケーションを取っているのだと思う。願わくば」

と、そこで彼女は言葉を切った。
なにか言おうとして。
なんだろう?
志村さんはなにかを躊躇っている。だが、彼女が再び口を開くその前に。
「す、すいません、春道さん……」
洗面所の方から銀花のなんだか頼りない声が聞こえてくる。僕は、
「なに? どうしたの?」
と、志村さんに断って尋ねると、
「す、すいません。シャワーが跳ねてしまって……み、水浸しに。主にわたしが、その、なってしまいました。す、すいません」
僕は思わず笑ってしまった。志村さんに事情を話すと、
「分かった。行ってあげて」
苦笑気味に、
「あの子のことをよろしくね?」
僕は即答はせず、自分の心の中で確認を取ってから答える。
「もちろんです」
それが僕の今の率直な感情だった。

要するに銀花はお風呂から上がった後、軽くタイルを掃除をしようとしてシャワーの取り扱いを誤ってしまったらしい。パジャマがすっかりとびしょ濡れになってしまっていた。思いっきり恐縮する銀花。

僕は笑って代わりにトレーナーを貸してあげた。銀花は恥ずかしそうにそれに着替える。僕は改めて少女が少しドジであること。

それとわざわざ自分が使った後の風呂を掃除しようとする律儀な子なんだと感じていた。

少女はやがて脱衣所から気恥ずかしそうに出てきた。

僕のトレーナーなのでもの凄くぶかぶかだ。裾を幾重にも折り返している。

「す、すいません」

という彼女に、

「なかなか似合っているよ」

と、笑いかけたらさらに真っ赤になって俯いた。

その後、ミルクを温めてホットミルクにして銀花に飲んで貰う。銀花に風邪を引かれたら大変だから。寝る前に暖まって貰わないと。彼女は昨日と同じように僕のシャツをトレーナーの上から羽織っていた。

もう銀花はすっかりと眠たそうだった。布団を敷き、歯を磨き、色々と準備をする。彼女が布団の中に入ったのを見計らって電気を消す。

僕も布団の中に潜り込む。

「おやすみ」

と、声を掛けると、

「おやすみなさい……」

小さな声が返ってきた。

「わたし」

ほとんど掠れそうな小さな小さな声。

「今日、本当に楽しかったです。ありがとうございました」

「……」

僕はなんと答えて良いか迷った。嫌な気分で目を覚ました後に、君と遊んでその気持ちがすっかり晴れたとか、話そうと思ったが。

そうしたらもっと細かく自分の生い立ちとかも説明しなければならなくなるかもしれない。

それが恥ずかしいとか言うのではなく、ただただ銀花の心の負担になるのだけが嫌だったので僕は考え過ぎかもしれないけど笑って、

「ううん」

と、告げた。

「こちらこそありがとう」

長い沈黙が訪れた。たっぷり一分は銀花の返事が聞こえてこなかった。やがて彼女は一言。

「わたし、春道さんに」

ぽつんと。真っ暗な部屋でその一言が水滴のように染み渡った。僕はその「わたし、春道さんに」の続きを待ったが、しばらくして静かな、静かな寝息が聞こえてくるだけだった。僕は大きく、大きく溜息をついた。

出来れば。

彼女をずっと笑顔にしていてあげたかった。

その日の夜、また夢を見た……。

今度は紛れもない。

アレを。

アノ夢を。

父親が死ぬ夢を。目の前で死ぬ。死んでいく悪夢。なにもかも脈絡なく場面が変わっていく。

父親が猟銃を口に咥えている。

悲鳴を上げる僕。
しかし、父親はそんな僕を一顧だにすることなく、
「どんだよ。どん。たったそれだけさ。なあ、たったそれだけだろ？……どん」
そう自分に言い聞かせ、引き金を引く。
ドン。
本当にそんな音がして父親の頭が弾ける。どん。脳みそが天井に飛び散る。どん。辺りに血なまぐさい臭いが。どん。僕の心が漂白した日。どん。その一瞬が狂ったように連続して繰り返される。どん。
どん。
どん。
どん。
どん。
父親の頭が弾ける。
ただ繰り返され続ける。永遠の衝撃。
ニンゲンの目が乱舞する。家を出て行った母親が浮かべていた透明な目。父親が浮かべた空虚な瞳。ああ、それなら。

と、僕は泣き叫んだ。夢の中で。
もう千回も、万回も願ったこと。夢の中で願ったこと。
それは。
ただ。
「消えたい！」
と。
一言。それだけ。

起きた時、僕は歯を食いしばっていた。手がガタガタと震えていた。寝汗をびっしょりと掻いていた。辺りはまだ暗かった。
僕は震える手を握り締め、額に押し当てた。ぐっと身体を丸める。こうすると少しは治まる。
それは知っていた。
長い時間をかけて、ゆっくりと布団の中で深呼吸。心を落ち着け、積極的に覚醒するように自分をコントロールする。
再度、睡眠に入ろうとするのは危険だった。
また同じ悪夢を見るから。
久しぶりでも身体は対処方法を覚えていた。程なく僕は落ち着く。ふうっと大きな溜息をつ

いた。身体の震えもだいぶ収まり、心拍数が下がる。どっどっと高鳴っていた心音がようやく平常時に近いくらいに戻った。

僕は布団から上半身を起こし、暗闇の中、目をこらして、銀花の方を見た。

彼女はぐっすりと寝入っているようだった。

僕はほっとした。

彼女を起こさずに済んだ。アノ悪夢を見ている時の僕は傍から見るとまるで熱病にでも侵されているかのように見えるらしい。

激しく魘され、震え、びっくりするくらいの寝汗を掻くようだ。

僕はふと昔のことを思いだした。安須野の家に引き取られた小学生の頃はほぼ毎日見ていたと言っても過言ではないだろう。形を変え、異なるシチュエーションでどん、の夢を。正直なところ、夜は僕にとって地獄に等しい時間だった。

毎晩、毎晩、神様に〝どうか今日だけは怖い夢を見ませんように〟と真剣に祈ったが、無駄だった。悪夢は毎晩、毎晩、容赦なく確実に僕の枕元に訪れ、僕は魘され、震え、歯を食いしばって恐怖に耐え続けるしかなかった。

〝消えたい〟

とだけ、ただあの頃は思っていた。

だが、中学生に上がるくらいからこの夢を見る回数が徐々に減っていった。中一日が中二日、

三日になり、そのうち一週間も見ない日が続き、最後にはごくごく体調の悪い日にしか見なくなった。

面白いことに夢の頻度が下がるにつれ、僕は社交性を大いに増していった。六歳の頃から失っていた明るさというものを取り戻し、学校でも友達が増えていった。同時に安須野の家でも居場所が出来はじめた。

叔父叔母は善良な人たちだったが、暗く、無口で、感情というモノをほとんど示さない僕という子供をもてあまし気味だった。それは中学生になって、夢を見なくなってから初めて気がついたことだった。その頃までは僕は外界というモノにほとんど興味を示さなかったから。今、思えば小学生の頃の記憶というものはほとんどない。

苛められていたとか、そういう問題ではなく、僕は〝他人〟から断裂に近い距離感を感じていた。誰も僕のことを分からなかったし、僕もまた他の人のことを決して分かろうとはしなかった。悪夢が。

父の死という悪夢が僕からそれを遠ざけていた。

高校に入ってから……ある事情で僕はまた少しこの夢を見るようになったが、夏にはもうすっかり落ち着いて、中学生の頃以上に僕は明るく積極的に振る舞えるようになっていた。夢だってここ半年近く見ていない。

でも、なんでまた見たのだろう？

僕は眠っている銀花を見やった。
その時。
「……春道さん？」
と、小さな声がして驚いたことに、
「ど、どうしたんですか？」
銀花がこちらに向き直って目を見開いていた。彼女は怯えたような顔で半身を起こしてくる。
僕は慌てた。
「あ、ご、ごめん。ちょっと目が覚めちゃって！」
「え？　で、でも」
彼女は心配そうに、
「なんだか顔色がすごく悪いですよ？　それに」
と、めざとく僕のまだ小刻みに震えている手を見つけた。
「その、手が」
「あ、いや、これ」
僕は出来るだけ道化っぽく、
「違う違う。ちょっと肘で挟んじゃってほら、血行が行き届かなくなったみたいで痺れちゃったの。すぐ治る、すぐ治る」

銀花は困ったように、
「お病気、とかじゃないんですか？」
「ぜ〜んぜん」
僕は手を広げた。
「お熱とか？」
「あったらこんなに元気に喋らないよ。ほら？　大丈夫でしょ？」
銀花はしばらく黙って僕の顔を見つめていた。なにか言いたそうにしていたが、
「……本当になにかあったら言ってくださいね？」
そう念を押す。僕は笑った。
「もちろん」
そしてまだ疑い深そうに見ている銀花の前であえて、
「ふあ〜、眠い」
欠伸をしてみせ、
「さ、寝よう寝よう！　起こしちゃってごめん。でも、まだ朝までもうちょっと時間あるからね。今日、僕、学校だし」
布団の中に潜り込んだ。銀花はそれでもまだじっと僕を見つめているようだった。が、僕がもう起き上がる気配がないのを見て、諦めたようだ。また布団を被る物音がする。僕はそれに

まずほっとした。
最初はまた銀花を心配させないよう朝まで起きていようとしたが、気がつけば僕はまた深い眠りに陥っていた。
そして幸いなことに僕はそれ以上の悪夢を見ることなく……。

朝、目が覚めると柔らかい光が部屋に満ちていた。
「春道さん」
と、窓ぎわで銀花が言っていた。
「おはようございます、雪がまた降ってますよ」
カーテンをちらっと開けてこちらを見て微笑んでいる。彼女は相変わらず僕より早起きで、もうすっかりと身支度を調え、着替え終わっていた。今日はワンピースにジーンズという組み合わせだ。僕は重苦しかった夜の気分が彼女の笑顔を見ることですうっと抜け落ちていくのを感じ取っていた。
彼女も僕が元気そうにしているのを見て、
「良かった……」
と、小さく呟いて目を伏せ、微笑んでいた。僕に聞こえないようにしたつもりだったらしい

が、しっかりと聞こえてはいた。きっと朝から気にしていたのだろう。そして僕にはその銀花の気遣いがとても嬉しかった。

薄暗い曇天模様だが、目覚めは決して悪くなかった。

僕も顔を洗って歯を磨き、制服に着替え、トーストと目玉焼きの朝食を作る。今日は月曜日なので学校だ。だいぶ手順が慣れてきて、僕がもうなにも言わなくても銀花はすっとちゃぶ台を拭いたりしてくれていた。

彼女はずっと楽しそうに微笑んで、軽く鼻歌さえ歌っていた。

だから、僕も自然と明るい気持ちになれた。

二人で話をしながらご飯を食べる。

「春道さん、今日は学校ですか？」

「うん、そう。悪いけど……留守番を頼めるかな？」

「はい！」

と、銀花は頷いた。

「任せてください」

「お願いね」

僕は出来るだけ早く帰ってこようと思った。

学校では山村健二に指摘された。
「春道」
彼は体育の着替え中に僕の顔をじっと見て、
「お前、なんか今日は心なし楽しそうな顔しているな？　なんかイイコトでもあったんか？」
僕は笑って、
「そう？」
「女だな？」
僕は苦笑した。確かに女だけど。
「……」
「お、おい！　こら、そこ、否定しろよ！　お前、まさか俺に黙って一足先にオトナの階段を駆け上ったりしてないだろうな!?」
銀花は年齢とかそれ以前にそういう対象では全くない。でも、まさか山村健二にそんなことを説明する訳にもいかないので、
「ま、ご想像にお任せします」
と、だけ言って場を離れた。少し彼をからかいたい気分だった。

家に帰ると人がいる。会話を交わす相手がいる。
それは思った以上に僕に活力を与えてくれているようだった。いつもは気の重い大川先生の世界史の授業も心持ち楽にやり過ごすことが出来た。
先生の、
「いい？　歴史なんてね、まずは暗記でいいの。とにかく徹底的に年代やら王様の名前やら法律やらを暗記。でも、私の経験からするとだんだんそれが頭の中で体系立ったら、面白くなってくるわよ～」
という言葉に〝ちゃんと先生らしいこと言うんだな〟と思うことさえ出来た。戸荻さんがちらっと隣の席からこちらを見やって複雑そうな顔をしせてみせたが、僕はあえて知らんぷりをした。
大川先生も僕もなにも言っていないのに、どこからか噂が流れているらしかった……。
放課後。僕はとっとと帰り支度を済ませ、教室を出る。後ろから戸荻さんが、
「春道く～ん、明日の午後二時。美方通りの銀ベル前で待ち合わせだからね！」
と、呼びかけてきたので振り返って、

「うぃっす！」

と、親指を立てた。そう言えば明日はまた祝日だった。僕は足早に昇降口まで降り、靴を履き替え、校舎を出てグラウンドを横切り、正門を出た。雪がまた微かにちらついていた。灰色の空と薄暗いどんよりとした風景。

身を切られるような、というより身体にじんわりと染みいってくるような寒さ。傘を差す程の降雪ではないので僕は傘は手に持ったまま歩きだす。

と、そこで。

僕は聞き慣れた小さな声に呼び止められる。

「春道さん……」

僕はぎょっとして振り返った。それはあり得るはずのない声だったから。でも、間違いなかった。彼女はそこにひっそりと立っていた。

ガードレールの脇。マフラーを巻いた姿。

少し恥ずかしそうな顔で。

凄く不安そうな表情で。

僕は仰天した。

「！」

慌てて銀花のそばに走り寄り、小声で、



「ど、どうしたの？」
そう尋ねた。すると銀花は顔を歪めて、
「その、ごめんなさい……迎えに来ちゃいました」
僕はびっくりしていた。
確かに学校から僕の家まで十五分程度。歩けない距離じゃ全然ない。
全然ないけど！
「だ、だけどどうやってこの場所を？」
「地図で」
と、銀花は伏し目がちに言った。
「この街に来る前、地図を見て、だいたいの場所は覚えていたので」
僕は絶句した。地図を見て覚えていた？
いや、彼女の知能が飛び抜けて高いのは知っていたが。
まさか。
本当にここまで来るとは……。
「ご迷惑、でした？」
銀花が不安そうにそう尋ねてくる。僕はちらっと周囲を見回しながら、考えた。迷惑では全くない。というよりその銀花の気持ち自体は嬉しい。

だけど。
「ううん。ぜんぜん迷惑とかじゃないよ……」
危なくないのだろうか？
でも、車にさえ注意すれば彼女は決して一人で出歩けない訳ではないのだし……彼女を家に閉じこめておく理由は特にないのかもしれない。
「ありがとう。うん、迎えに来てくれてありがとう！　嬉しいよ」
そう言うと凄く不安そうな顔だった彼女の顔がぱっと晴れた。

その後、二人で並んで歩いた。僕は積極的に話しかける。学校であったことを色々語って聞かせた。なぜだろう？
心なし彼女の反応が鈍い。なんとなく俯き気味で、返事も途切れ途切れだった。まだ勝手に迎えに来たことを気にしているのだろうか？
「そういえばさ、君は」
と、僕は話を変えたくて尋ねた。
「この街になにしに来たんだっけ？」
銀花は目を見開いた。
歩くのを止め、立ち止まった。こちらも立ち止まり、

「ん？」
と、振り返る。
なんか僕、変なこと言ってるか？
「え？　ど、どうしたの？」
ちょっと慌てて、
「あのさ、志村さんから聞いたけど、お母さんがこの街の出身なんでしょ？　だから、観光にでも来たのかな～と思ってたんだけど」
銀花は、
単純にそう思っていたのだが。
「……」
と、固まっている。僕は困惑して、
「ん？　も、もしかしてお母さん方の親戚の人にでも会いに来たとか？」
銀花は小さく俯いた。そしてぼそっとした喋り方で、
「いいえ、親戚はおりません。母は」
目を逸らす。
「天涯孤独な人だったみたいですから」
僕がさらになにか訊こうとする前に銀花は自分からゆっくりと喋りだした。

「わたしの我が儘です……この街に来たのは」

「我が儘？」

僕は眉をひそめる。銀花はなにかを迷っているようだった。

僕に語って良いのかと迷っている。

「……」

でも、程なく、

「亡くなった母のビデオで」

「……ビデオ？」

と、オウム返しに僕。銀花は僕から視線を逸らしたまま、

「はい。亡くなった母は元々身体が弱かったから、わたしを産む時、ある程度覚悟していたみたいです。ビデオレターを一本わたしに残してくれました。そして、その中に自分の生まれ故郷の桜の名所のことを語っている箇所があって、それがすごく綺麗で、羨ましくて、だから、一回、わたしもそこに行ってみたいな、って思って連れてきて貰ったんです」

「桜の名所？」

僕はすぐに思い至って、

「それって、もしかして城跡公園のこと？」

「はい、そこです」

銀花は微かに頷く。相変わらず目を逸らしたまま、
「その城跡公園のことを母はすごく懐かしそうに語っていました。丘一杯に満開の桜が咲いた時の綺麗さを」
「なんだ」
と、僕は呆れる。
「じゃあ、言ってくれれば昨日、そこに連れていったのに！　いや、というか……もしかして、志村さんたちともう行ったの？」
銀花は黙って首を横に振る。
「う～ん。よかったら今日これから連れてってあげられるけど？　そんなに遠いところでもない訳だし」
だけど銀花は。
ただ寂しそうに笑った。また目を伏せる。
「……」
僕は言葉に詰まった。一体、どうしたんだろう、今日の銀花は？
また出会った頃のような。
なんだかガラス張りの閉じた空間にいるみたいに僕を寄せつけない雰囲気を身にまとっている。僕はそれが辛くて、

「ねえ、銀花」
と、半ば無意識に手を伸ばして声を掛けた。銀花がすっと身を引く。その自分の仕草に驚いたように顔を上げ、
「！」
その時、僕の携帯が鳴りだした。僕は一瞬無視しようと思ったが、銀花がじっとこちらを恐れるような、哀しむような表情で見ていることに気がついて、溜息をついて電話に出る。相手は志村さんだった。
「あ、安住くん。ちょっと今、いいかな？」
僕は「あ、すいません。ちょっと後でまたかけ直して良いですか？」と言おうとしたが、銀花が気を利かせるようにさりげなく僕のそばから離れたので仕方なく応対した。
「……はい。大丈夫ですよ」
すると志村さんが、
「あら？　なんか声に元気ない？」
「そんなことは……志村さんは逆にお元気になったみたいですね？」
「うん、もうだいたいね。ありがと。そのことで電話したんだけど明日辺り、あの子連れていったんホテルの方来てくれる？　色々と話したいこともあるし」
「はあ」

僕はなんとなく腹立たしいモノを感じて、
「なんか随分と悠長ですね？　いいんですか、そんな。あの子はあなたの担当している希少な〝黄昏の子供たち〟の一人なんでしょ？」
志村さんに感情をぶつける。
「僕があの子を虐待したりするとか思わないんですか？　そもそも」
と、疑問に思う。
「僕がどんな素性のヤツかとか危なく思わないんですか？」
すると志村さんは、
「……」
しばらく黙ってから、
「うん。だいたい知ってる。あなたがどんな素性の人なのか、知ってる」
「え？」
「ごめんね。そこら辺のことはあなたとコンタクトを取る前にだいたい調べたの。ほら、あとえ〜と……」
彼女は溜息をつく。
「イエスタデーが望むことは出来るだけしてやりたいから」
「……どういう、意味ですか？」

僕は怪訝に思う。

「……」

志村さんはまたしばらく黙っていた。それから、

「まあ、電話じゃなんだからそこら辺のことは明日、話すわ。それより今日はあなた、学校だったのかな？ あの子の様子はどう？」

なんだか話をはぐらかされている気もするが……。

確かに電話越しで話していても細かいニュアンスは伝わらないかもしれない。ならば明日、思う存分に訊こう。

僕は多少、憮然としながらも、

「学校でしたよ。えっと銀花はまあ、朝は上機嫌だったんですが」

今日起こったことを手短に話した。志村さんは微かに笑って、

「ああ、あの子、あなたに言ったんだ……そうね。確かにその、えっと、城跡公園に行きたがってたみたいね」

「でも、そのことを話したらなんだか急に暗くなったんですけど」

僕はちらっと銀花の方を見る。彼女はぼんやりと車道を走る車を眺めていた。道を歩く人たちは相変わらず器用に銀花を避けて歩いている。

「あのね」

と、志村さんは溜息。
「最初に出会った時のこと覚えている？」
「え？」
「あなたと道ですれ違った時のこと」
「あ、はあ」
「あの時もね、イエスタデーはわたしと一緒に城跡公園に行こうとしていたの」
それは初耳だ。
「そ、そうだったんですか？」
「そう。でもね、正確にはその帰り道だった。結局ね、行こうとして途中で行くのを止めて、引き返してきたところであなたに出会ったの」
「引き返して？」
意味が分からない。
「なぜ、です？」
「考えてみて」
と、志村さんは淡々と語った。
「あの子のお母さんが語ったのは桜のこと。桜は生きている木。そして」
と、一拍間をため、

「あの子は生きているモノが見えない」
「あ」
と、僕は思わず声を上げていた。そうだ。
一体、なんで気がつかなかったのだろう……。
「残酷だと思わない？　お母さんの思い出の地に来たのに、あの子はその桜に触れることすら出来ない。見ることが出来ない。あの子に見えるのはきっとだだっ広い、無機質なただの丘。その時」
と、志村さんは言葉を続ける。
「きっとあの子の中の思い出は崩れる。お母さんと共有していた唯一の絆は崩れる」
「……」
僕は言葉を失っている。永遠に広がる虚無の世界。
生きているモノがいない。
それが。
こんなにも。
志村さんは言った。
「あの子の父親は早くに自分に〝見えない〟あの子を捨てたからね。母親の死と共に。だから、あの子にとってお母さんのビデオが唯一の……本当に唯一の」

心が。
痛い。
僕は必死で、
「だったら」
と、考える。
「せめてビデオでとって。いいや！　アレですよ！　なんのための視覚補正器具ですか！〝眼鏡〟は……なんて、代わりをすぐに持ってこないんですか？　触れないなら匂いがかげないならせめてそれくらい、見るくらい」
「……」
志村さんはその時、ほとんど無意識だったと思う。
彼女はぽろりと一言呟いた。
「仮に持ってきてもあの子」
僕は。
「またきっとすぐにそれを壊しちゃうんじゃないかな……」
その台詞にぞくっとした。
「！」
志村さんが急に慌てた。

「ご、ごめん。なんか変なこと言ったわね。と、とにかく明日適当な時刻で良いから、来て頂戴ね？　また詳しいことはそこで色々話すわ」

そして僕が、

「あ」

と、引き留める前に電話は唐突に切れてしまった。僕は呆然と携帯電話を見下ろしていた。

そこへ銀花が躊躇いがちに声を掛けてくる。

「お話……終わりましたか？」

首をすくめるようにして一歩、こちらに近づいてきた。僕は、

「あ、うん」

と、生返事。銀花をちらっと見やりながら、

「なんかね、だいぶ具合が良くなったから明日君を連れて来てくれって」

すると。

銀花は、

「……明日、ですか」

目を逸らしながらそう言った。決して嬉しそうではなく、むしろなにかを諦めるようなそんな苦渋の微笑み。そこで僕は一つの確信を得た。ずっと違和感を覚えていた。薄々、そうではないかと考えていた。

だが、もう間違いない。
理由は分からないけど。
銀花は志村さんを確実にずっと避けている。

僕らはそれから言葉少なく歩きだした。家に向かって真っ直ぐに。緩やかに小さな雪片が舞う薄闇の中を。
銀花が少し先を歩いている。
僕の耳元で先程の志村さんの言葉が蘇る。
〝またきっとそれを壊しちゃうんじゃないかな……〟
僕はなんとなく肌に粟立つモノを感じた。あの言い方は。
違う。
うっかりとか、間違ってとかそういうニュアンスじゃない。
故意だ。
明らかに故意に〝眼鏡〟を〝壊す〟ことを意味している。僕は銀花に向かって思わず声を上げそうになった。
〝わざとやったの？〟

一体、それを訊いてどうするのか？
〝わざと壊したの？　なんで？〟
他の人たちとコミュニケーション取るための大事な道具なのに。
「〝眼鏡〟……志村さん、まだ届くの時間かかるかもって」
僕は俯き、半ば無意識にそう口に出していた。
自分でもなんでそんなことを言ったのか分からない。
銀花は困ったような小さな声で、
「そうですか」
僕は上目遣いで銀花の背中を見た。
「でも、届いても君はまた壊しちゃうかもってさ。ひどいよね？」
銀花は振り返らなかった。
「そうですね」
と、彼女は微かに笑う。
「でも、わたし、そそっかしいですから。またもしかしたら間違ってうっかり壊してしまうかもしれませんね……」
その時。
銀花が振り返った。

僕の心臓がどくんと音を立てて跳ねた。
銀花は出会った時と同じような表情を浮かべていた。
僕と暮らすようになって忘れていた、儚く、脆く、淡く、透明で、今にも消え入りそうな、寂しげで。
哀しそうな。
そんな微笑み。
透んだ街灯の光に照らされ、周囲の景色から浮かび上がって見える銀花の姿。僕の心を強烈な不安が刺し貫いた。
まるでこのまま銀花がどこかに消え入ってしまいそうな気がした。
良く分からない。
でも、直感的にそう思った。まるで父が母の茶碗を壁に投げつけた時のような圧倒的な別離の予感。なにもかも壊れる。
壊れてしまう。
僕はなにか言いかけ、
「……」
言葉にならず、目を見開いている。立ち尽くしている。銀花もただずっと微笑んでいるだけだった……。

僕はそこで初めて一つの不自然さに気がついた。

もし桜の花を見に来たのなら。

なんでこんなに雪が舞うような冬にここを訪れたのだろう？

第五章　絆

家に戻って、ご飯を食べて、夜寝る時も僕らはもうほとんど互いに喋らなかった。銀花の周りにはいつの間にか見えない壁のようなモノが張り巡らされていて、微笑んでいるのに、決して僕を拒絶している訳ではないのに、僕はただその前で力なく彼女を見ていることしか出来なかった。

昨日あれだけ心を通わせて笑いあったことがまるで嘘のようだった。

布団に入る前。

お休み、の代わりに、

「大丈夫？」

と、声を掛ける。

「はい、もちろんです。彼女は微笑んだ。

でも。

なんだかそれは痛々しくて。見ているのが辛いくらい〝嘘つき〟の顔だった。僕は口を開きかけ、そして諦める。

銀花は何事も無かったかのように布団に潜り込んでいる。

「おやすみなさい」

夜中、僕はずっと考え続けていた。ただ彼女のことを。

そして夜が明ける。僕らは言葉少なく挨拶をかわし、義務感のように朝食を摂り、互いの様子を窺うように微笑みあいながら、でも、どこかよそよそしく身支度を調え、家を出た。真っ直ぐにホテルへ向かう。

銀花はホテルに近づくにつれ、明らかに様子がおかしくなってきた。身じろぎをし、泣き笑いのような奇妙な表情を浮かべる。

こんな挙動のおかしな銀花は初めて見る。だけど、

「どうしたの？」

と、僕が尋ねても、彼女は黙って首を振るだけだった。僕は結局、それ以上、銀花の心に踏み込むことが出来ず、ホテルに着いてしまった。

志村さんの待つ部屋に赴く僕と当然のように自分の部屋に向かう銀花。

「じゃ」

と、軽く手を上げた僕に対して、銀花はぺこりとお辞儀をして自分の部屋に入っていった。

僕は溜息をつく。

もうどうしていいか分からない。

暗澹とした気分でノックをしてから、目の前の扉を開けた。

電話で予め伝えておいたので志村さんがいるのは当然として、驚いたことに茗荷さんがベッドの中央に座ってこちらを見ていた。
「あ、あれ?」
と、僕。
「もうお加減はいいんですか?」
茗荷さんはむっつりと頷いた。
「ああ」
と、ひどく不愉快そうに僕を見て、
「うちの大事なお姫様が訳の分からない男のところに預けられてると聞いたんでな。いてもたってもいられなくなって退院してきた」
心なし顔色が悪い。まだ本調子では決してないのだろう。
それと。
僕は隣でしれっとなにかレポートのようなモノを読んでいる志村さんを見た。どうやら銀花を僕のところに預けたのはこの人が独断でやったことみたいだ。
今は漠然とだが分かってきていた。
きっとそれにはなにか理由があるのだ。志村さんはちらっと僕を見上げて、
「ま、安住君、座って座って」

と、椅子を勧めてくる。僕は、
「失礼します……」
と、腰を落とした。志村さんはじっと僕を見ていた。僕もじっと志村さんを見返した。僕は力なく笑って、
「なんだか志村さん、お元気そうですね？ 茗荷さんも退院されたし、もう銀花はお返ししした方が良いですか？」
そのとたん志村さんが気まずそうに目を逸らした。
やはり。
茗荷さんが、
「俺、ちょっとまだ体調良くないから、悪いが寝ながら話、聞かせて貰うぞ？」
そう言ってベッドに横たわって壁の方を向いた。こちらに背を向ける形だ。僕はちらっとモニターの中の銀花を見た。
彼女は窓ぎわに立ってじっと外を眺めていた。
まるで人形のように身じろぎ一つしていなかった。
「……」
志村さんが僕の視線を辿って、
「そういえば、あの子が見ている先、城跡公園があるみたいね？」

何気なくそう言った。

「あ」

と、僕は声を上げている。そう言えば方角的には確かにそちらだった。もちろん距離も相当あるし、間に建物が幾つも挟んであるので直接、見えたりはしないが、隣とここの部屋の窓が城跡公園の方角に面しているのは確かだ。

銀花はこの街の地図を完璧に覚えているから。

きっと本当にその方向だと分かってじっと見つめているんだ。

僕はなんとなく切なくなってきて、

「あの子、それだけお母さんの思い出を大切にしてるんですね……」

そう言った。

「桜、に憧れを持ってるみたいね。特に」

と、志村さん。僕は、

「ビデオとかでは見たことあるんですよね、あの子？」

「それはね。というか、あの子のお気に入りよ。桜がテーマの曲のＰＶがお気に入りで本当に何度も何度も観てるわ。でもね、あの子は見ることは出来てもそれに触れないし、匂いがかげないから」

「匂いも、そうでしたね。匂いもでしたね……」

生物の匂いもかげないのだ。

「そう。余談だけどね、私たち人間の人格形成において〝匂い〟って実はもの凄く重要な要素なのよ？　先天的に嗅覚異常があった場合、精神的な発達に問題が出るケースが多いの。なんでだか分かる？」

「……お母さんの匂いをかげないから、ですか？」

そう言えばこの人は発達心理学が専門だったな、と思いだしながら僕は答えた。志村さんは笑って頷く。

「鋭いわね。正解」

ちょっと目を細め、

「要するにお母さんの〝安心〟が感じられないのね。抱っこされたり、庇護されるって感覚がどうしても育ちにくいから。だから、〝黄昏の子供たち〟の中には」

首を振る。

「ごめんなさい。ちょっと話が逸れたわね。さて、何から話しましょうか？」

僕は溜息。

「色々あります……けど、まず一つは」

これは本当に分からなかった。

「なぜ、銀花は〝眼鏡〟をわざと壊したんですか？」

「……」
志村さんがつうっとまた目を逸らした。彼女は持っていたボールペンでこりこりと頭を掻きながら、
「ん～。やっぱ安住君そう受け取っちゃったか……ごめん。いや、百パーセントの確証って言われればそれは私も自信がないんだけど」
「僕は」
と、僕は言い切った。
「百パーセントです。自信があります」
すると志村さんが真剣な目をこちらに向けた。彼女はかなり驚いているようだった。
「なん、で？」
身を乗りだして、
「あの子、自分でそれを認めた⁉」
僕は首を横に振った。
「それは見ていれば……あの子、見ていれば、それくらい分かります」
我ながら説得力の無い言い方だった。
「ん」
志村さんはがっくりと肩を落とす。苦笑して、

「なんだ、そういうことか……うん。私も正直なところそうだなとは思っている。あの子は多分、自分で眼鏡を壊している」
「なんでです？」
と、繰り返す僕。だんだんと不安になってきた。志村さんは困ったように、
「まずそこら辺から話すとね……う～ん」
僕の様子を窺うように、
「これから話すことはあなたにもしかしたらショックを与えちゃうかもしれないけど大丈夫？」
僕は頷いた。
「大丈夫。割と打たれ強い方です」
「そうだったわね」
と、志村さんが少し微笑んだ。それから彼女は言う。
一言、さらりと。
「あの子、多分、モノが見えにくくなってきてるのよ」
僕は固まった。
「は？」
志村さんはやや辛そうに、

「つまりね、〝眼鏡〟や機械を通しても生き物が見えにくくなってきているの。あ、いや、そうなんじゃないかなって私たちは推測しているの」

僕はまだ理解が出来ない。

「え？」

でも、すうっと嫌な感じで背中に汗が流れた。

「どういう、ことですか？」

「うん。そのままの意味なんだけど……だからね、それを私たちに知られたくないから、あの子は自分で〝眼鏡〟を壊したって申告してるんだと思うの」

「あの、子が？　でも、え？　なんで？」

頭が混乱してくる。

そもそも〝機械を通しても生き物が見えなくなっている〟、というのからして意味が良く分からないが、それを隠す理由もまるで分からない。

「つい、一月ほど前よ」

と、志村さんは溜息混じりに話し始めた。

「イエスタデーの反応が少し変になったのよね。わたしたちを見ている時にすごく見づらそうにしたり、不安そうに周囲を見回したりし始めて」

「〝眼鏡〟をかけている状態で、ですか？」

「そう。〝眼鏡〟をかけている状態で、ね。それで一度、あの子、わたしたちが話しかけているのに全く見当違いの方向に返事を返したの。その晩よ、あの子がうっかりと眼鏡を壊したって言ってきたのは。で、すぐにスペアを渡したんだけど、それもまたうっかり壊しちゃったって自己申告してきて。その時ね。〝ああ、もしかしたらこの子、私たちが見えにくくなってるんじゃないかな〟って私も茗荷も考え出したの」

「……」

「でも、確証は持てなかった。私たちの姿を別のカメラで写せば、あの子はすぐにそれに反応することが出来たから。ただ」

志村さんは眉をひそめた。

「ね？　茗荷」

と、茗荷さんに声を掛ける。茗荷さんはこちらに背を向けたまま、

「恐らく一定期間だけな」

と、ぼそっと答えた。志村さんは頷く。淡々と、

「一定時間を過ぎて茗荷の言葉を借りれば〝刺激が固定化して受容順応が起こると閾値を越える、と推定できる〟んだって」

「？」

「平たく言えばその機械に慣れちゃうとまた見えにくくなるみたい。だから逆にずっとつけて

いると〝眼鏡〟が効力を失うってことだと思う」
僕は声を失う。
「ってね。これもやっぱり推論でしかない。間接的な検査ではどうしても限界がある。なにしろイエスタデー本人の認識を外から調べなければならないんだから」
「分からない!」
と、僕はそこで思わず叫んでいた。そして声を落とし、
「……なんでです? なんであの子に直接訊かないんですか?」
志村さんは苦笑した。
肩をすくめ、
「訊いたわよ、もちろん。何度も何度も」
でも、答えは。
と、志村さんは言った。
「〝そんなことないですよ〟の一点張り。眼鏡はうっかりと壊した。自分の認識に全く問題はない。でも、あの子は確実に色々な検査を忌避するようになったわ。さらに言えば私たちのことも。そしてある日、あの子は突然、この街に来たいと言い出した」
そこで志村さんは僕を見た。
「あの子がね、私たちに自分から何かを積極的に頼んだのって半年の間にその時が一回。あ

とはあなたにもう一度会いたいと言った時だけ。その二回」
「……」
　そうだったのか……。
　それは銀花の方から言っていたんだ。
「気がついてはいたんでしょう？　イエスタデーが私たちを微妙に避けてるって」
「はい」
　と、僕は頷いた。
「薄々は」
「そっか」
　志村さんはなんだか子供のような顔で笑う。
「ま、見れば分かるわよね。丸分かりよね。私たちがあなたに……あの子を預けるしかなかったってのも、理由があってね」
「理由？」
「ええ。説明しにくいんだけど、私たちにも色々あって。あの子にはあまり無理強い出来ないの。言い方は悪いんだけど腫れ物に触るような……だから、あの子があなたのところに行った時も、あの子の意思を尊重するっていうより、このタイミングで何か変化が起こるならあの子が何か反応を示すかも知れないとそう思って」

志村さんは遠い目をする。辛そうな、
「一度、それで失敗しているから。だから、強硬には訊けない。それにイエスタデーとは担当になってまだ半年。そこまでの信頼関係は築けていない」
「もしかしてなんですけど」
と、僕は疑問に思って尋ねた。声が自然と硬くなったのは仕方がないと思う。
「僕を、その……いいえ。あの子を監視したりしてたんですか？」
志村さんは言葉に詰まった。目を泳がせ、
「監視って程じゃないけど……ほら？」
と、僕の様子をうかがうように、
「前に言ったでしょ？　もう一人スタッフがいるって。その人がずっとあなたの家の前で張り込んでいたのは確か。車に、少しの機材を持って、ね」
「……」
「あ、でも別にそれが本職ではないんだし、あなたを疑ってたりとかそんなのじゃ全然無いの。言ってしまえばその」
「いいですよ」
と、僕は首を振った。
「それが自然だと思います。あの子をなんの保険もなく無造作に僕に預ける方が変ですから」

「……」
志村さんは微妙な表情になった。僕は少し皮肉っぽく、
「でも、随分と迂遠な方法ですね？ まるで銀花相手にお芝居でもしてるみたいだ。風邪を引いたから、泊まってきて、とか。そんな……そこまで銀花は不可侵なお姫様なんですか？ そうでもしなければあの子の状態を知ることも出来ないんですか？」
「うん」
志村さんは苦笑する。そして彼女は力なく、
「以前ね。同じようなケースがあって、それで」
と、横を向く。
「自殺しちゃった子がいるの」
僕は唖然とする。
本当に一瞬、思考が停止した。
自殺？
それに同じケース。まさか……。
志村さんは深く深く溜息をついて、
「イギリスでね、それがあって。私は反対したんだけどかなり強硬に徹底的に管理してその子は調べられた。だから」

言葉少なく、
「その子は、だって、ほら？　その子はね、イエスタデー以上に周りの人間に不信感を抱いていて、馴れない猫みたいな子で、ほとんどコミュニケーションが取れていない状態なのにそんなことをしたもんだから」
僕は猛烈な不安感を覚えていた。
「え？　えっと、それは」
「だから、イエスタデーは日本に管轄が委譲されたの。責任者が失脚したから」
僕が聞きたいこととは微妙に違う。
僕はその。
同じケース、というのが聞きたかった。あの子は？
あの子だけじゃないのか、それは？
生き物が機械を通しても見えにくくなっている、というのは。
突然、茗荷さんがこちらに寝返りを打ちながら言った。
「つうより、お前が半分、無理矢理こっちに連れ帰ってきたんだろう？　イエスタデーは」
志村さんはちらっと茗荷さんを見て、
「言ってしまえば、ね」
次に僕を見た。

「だって、イエスタデーは当時の担当官二人よりも参与として日本から出向しているわたしの方にまだ心を開いてたのよ？ これじゃ、ダメだと普通、思うでしょ？ だから、私は色々働きかけて、イエスタデーを日本に連れ戻した。前に〝財団〟の都合って言ったけど、実はそういうことなの」

「それが、半年前ですか？」

「そう」

志村さんは頷く。

「だから、今、私たちはとても困っている。あの子は自分が見えにくくなっていることを絶対に認めない。本当なら機材の揃ったところで徹底的にあの子を調べるべき状態なんだけど、あの子が拒む以上、そこは無理を押し通しても仕方ない。イギリスの二の舞は絶対に演じてはならない」

志村さんは溜息。

「あの子がこの街に来たいと言った時、私が一番恐れたのはね。なんだと思う？ 情けないことにね、逃げられるんじゃないかって思ったの。思い出の地に行ったら、そこで私たちから逃げようとしてるんじゃないかって」

「もしかして」

と、僕はこの部屋に設置されたモニターに恐れるような目を向けた。志村さんは察しよく頷

く。

「そ。このカメラ半分はあの子とコミュニケーションを取るためで、あと半分は、万一の保険。そのもう一人のスタッフってのも本来そのために同行してたの。あの子から絶対に目を離さないよう、あの子が持っているモノや着ているモノに少し細工して、ＧＰＳで。最初ホテルに来て貰った時、あの子いなくなったって慌ててたでしょ？　そういうことなのよ」

僕は混乱していた。

「意味がない！」

「はい？」

「なんだってあの子は」

口元を押さえた。本当に良く分からない。

「なぜそこまでして自分の具合が悪いのを隠すんですか？」

志村さんは黙り込んだ。

かなり長いこと黙って僕の顔を見続けてから、

「もし」

と、一言呟いた。

「それが治らないモノだとしたら？」

「！」

恐れていた答えは至極、呆気なく、簡単に告げられた。
「それをあの子が知っていたのだとしたら？」
僕は頭を抱えた。
震えがこみ上げてきた。僕はその震えを懸命に押し殺した。
「じゃあ……その自殺したって子も？」
「そうね」
そして志村さんは何度か深呼吸をすると、
「それだけではないの。〝黄昏の子供たち〟はいったんそれが始まるとね」
迷い、僕の目を見守りながら、
「最後には誰にも見えなくなって消えちゃうの。この世から」
僕は頭が真っ白になった。

意味が分からない。
「なんです、それ？」
半ば怒ったように僕はそう言った。まるでタチの悪い冗談を聞かされているみたいだった。
だが、冗談ではないことは、
「……」

　志村さんの見たことも無いくらい哀しそうな目を見ればすぐに分かった。彼女は指を四本立てた。
「私たちと〝黄昏の子供たち(Dusk Children)〟には大まかに四つの線が結ばれてると思ってね。まず一本目は『向こうからこちらを見る線』、二本目が『向こうからこちらを聞く線』、三本目が『こちらから向こうを見る線』、最後が『こちらから向こうを聞く線』……分かって貰える？」
「だいたい」
　志村さんは指の四本のうち、一本の指を折った。
「現状、イエスタデーはそのうちの一本目、『向こうからこちらを見る線』が切れかかってる……あるいは」
　と、一拍間をおいて、
「もう切れている状態」
「……」
「だから、私たちから呼びかける声は機械を通してならまだなんとか答えることが出来る。でもね」
　と、疲れたような調子で、
「それがいったん始まるともう止まらないの。二本目、三本目、四本目ってどんどん線は切れていく。そして最後には」

「!」

僕は座っている椅子を必死で掴んだ。

「全ての人間の認識の外に置かれる」

僕は自分の身体がぐらつくのが分かった。気持ちが悪い。頭が痛い。酸素が薄い。志村さんは暗鬱とした調子で、

「あの子の世代十四人の中で残っているのはもうあの子を含めてたった三人。何が原因でそうなるのか皆目、見当もつかないわ。何かの病気なのか、あるいは〝黄昏の子供たち〟に内在する特殊な遺伝子の発露なのか。でも、他の子は皆、例外なくそういう状態になった」

低く押し殺した声。目の前が暗くなり、吐き気がこみ上げてきた。頭の中をぐるぐると同じ言葉が巡っていた。

そうだ。

早過ぎたんだ。

きっと生き物としてまだ早過ぎたんだ。だから、彼らはまた黄昏の彼方に消えようとして。

「最長で一年。最短で三ヶ月。それ以降はなぜか原始的な文字による情報伝達すら不可能になって」

手を開く。

「最後は消えてしまう」

「どこへ!?」
僕の声は悲鳴に近かった。志村さんは首を横に振った。
「分からない。どこかへ」
唇を噛み、
「分かるわけないでしょ？　向こうからも見えない。こちらからも見えない。確認する方法が全くないんだもの！　きっと」
志村さんは言葉を飲み込んだ。視線を逸らす。
「そうね……きっと」
僕は呆然としていた。
「死？」
いや、それよりもっとたちが悪い。
きっと全くなにも無い世界に放りだされるのだ。たった一人で。
たとえ自殺しても、飢え死にしても。
誰にも見られない。
仮に生きていたとしても、叫んでも。
誰からも存在を認識されない。最悪だ。
なんという孤独……。

呆然としている僕に向かって志村さんが溜息と共に言った。
「ほんの一週間前ね。〝黄昏の子供たち〟の最初の一人、エターナルが事実上、一切のコンタクトを失って財団の観測上から〝消失〟したわ」
「！」
それは衝撃的な言葉だった。
何度も名前だけは耳にした〝黄昏の子供たち〟の最初の一人。
「姿が全く見えなくなってから最後の三ヶ月はＬＡＮ回線を使ったパソコンでのやり取り、ホワイトボード、紙による筆談、スクラブルのブロックを作った立体的な文字のコミュニケーションでなんとか意思のやり取りをしていたけど、ここ数週間、ほとんどそれもとぎれがちになって、最後は壁に〝ありがとう。でも、これで終わりみたいだ〟って大きくマジックの文字で。それで。それで終わりだって。そう聞いたの」
「……」
「正直分からない。でも、きっと。耐えきれない孤独。彼は死を選んだか、それとも私たちには理解不能の不測事態が見えない世界で起こっているのか。それすらも分からない。だから」
と、もう一度、志村さんは強い目で僕を見た。
「手を貸してお願い」
僕の心の中で激しくなにかが湧き起こってくる。僕は頷いている。

「……」

言葉にはならないけど。

恐怖と共に思っている。そんな恐ろしい状態。あってたまるものか！

「良かった」

志村さんがほっとしたように言う。気がつけば茗荷さんも起き上がって黙ってじっとこちらを見ていた。志村さんは僕に向かって、

「まずいい？　今日、これからあの子をどこか適当なところで説得して。で、あの子に今、〝他の存在が見えにくくなっている〟のだということをはっきりと認めさせて。とにかく話はそこからだと思う」

僕は頷いた。それには完全に同意だ。

「分かりました！　と、とにかくじゃあ、いったんここを出ます。あの子も志村さんたちがいる前だと言いにくいと思いますから」

「そうね」

と、志村さんは素早く頷いた。彼女はそこでマイクを取り上げ、

「イエスタデー？」

と、隣の部屋の銀花に向かって呼びかける。モニターの中の銀花はちょこんとベッドの端に座って、じっと目を閉じていた。

反応は無い。
志村さんは繰り返す。
「イエスタデー、聞こえてる?」
やっぱり返事は無い。
心が。
すうっと冷え込んだ。もしかして。
銀花は。
機械を通して見えなくなっているだけでなく、聞こえることすら出来なくなり始めているのか……既に二本目の糸が。
「まさか! 幾ら何でも早すぎる!」
志村さんの声が鋭さを帯びた。
「イエスタデー!」
茗荷さんが立ち上がり、前のめりになって机の上に手を置く。ぎゅっと青白くなるまでその手を握り込んだ。彼は食い入るようにモニターを見つめていた。その瞳が見たことのない真剣さを帯びていた。
志村さんの声が動揺を隠し切れず、悲鳴のように、
「イエスタデー! 聞こえてるなら、返事をしなさい!」

僕はたまらなくなった。その時。
「え？」
銀花ははっきりと明快な反応を示した。
「あ、呼びましたか？」
びっくりしたように顔を上げ、慌てて立ち上がる。
「す、すいません！　ちょ、ちょっと考え事をしてました！　はい、なんでしょう？」
僕は思わず大きく肩を落としていた。志村さん、茗荷さん共にどっと安堵の溜息をついている。茗荷さんはまたベッドに腰を落とした。志村さんは歯切れ悪く言う。
「うん。今日はもうね、私、安住くんとのお話終わったから……」
「……」
「悪いんだけど、私はまだ体調が完全じゃないから」
志村さんは一拍間を開けた。それから声の調子を落として、
「また安住君の家に行ってくれる？」
「はい……」
銀花は小さな声でそう答える。即答だった。僕はぐっと唇を噛んだ。志村さんは続けて、
「あとであの子にお昼ご飯でも連れてって貰いなさい」
「はい」

なんだか色々なことがずっと悔しかった。
銀花の部屋に迎えに行く前になぜか突然、茗荷さんに呼び止められた。
「なあ」
と、彼はそう呼びかけておいて、僕が立ち止まり振り返ったのを見て、どこか気まずそうに視線を逸らした。
鼻の下をちょっと指で弄くり、少し言いにくそうに、
「あのな、俺、一番最初もお前に言ったかも知れないけどさ。本当はお前を機材のあるところに連れていってばりばり調べるつもりだったんだけど」
「……なんですか？」
「昔、頭関係で何か病気をしたことがないか？　あるいは頭部に重度の怪我をしたとか？」
僕は怪訝に思って、
「いいえ」
「そっか」
茗荷さんはちらっと志村さんを見た。伺いを立てるように、
「あのな、フィリス・タックワートのこと……こいつに話して良いか？」
志村さんは無表情でしばらく黙っていた。それから頷く。

「そうね。ここに来て話さないでいる理由もないし……あんたが話す？」
茗荷さんはちょっと考えて、
「そうするよ」
僕にまた向き直った。
「あのな、正確には、お前は世界で二人目なんだ」
「二人目？」
「〝黄昏の子供たち〟を肉眼で目視することが出来たのは」
僕は本当に驚いた。
「え？　あ、あれ？　だって、僕は世界で唯一って」
「現状な？　志村は現状って言い方していたと思うぜ？」
「……」
現状？
なら、その人は一体、今……。
どうしているんだろう？
僕は不安に思う。茗荷さんは咳払いをした。
「まあ、フィリスに関して詳しいことは時間もないし、また今度話してやるよ。ただ、な。そいつ、アレなんだ。先天的にな、脳に障害がある子だったんだ」

「！」
僕は唖然とした。茗荷さんは早口に、
「あのな、早とちりするなよ？　正直、因果関係がまるで分かってないんだ。フィリスの障害と〝黄昏の子供たち〟を視認出来たことの因果関係が。ただ、脳に重篤なダメージを負って、脳の機能が一部、変容を起こすってことは実際よくあることなんだ。だから、なんでもいい。なんかなかったか？　もしかしたらお前の場合、そこら辺に何か鍵があるのかも知れない」
「いえ」
と、僕は首を振り、思いだす。
「あ、ありました。僕、一度だけですけど後頭部を打って気を失ったことがあります……」
「そうか」
「それと、もしかしてなんですけど」
僕は気になって、
「精神的なことって関係ありますか？　もの凄いショックを受けてそれで脳にダメージ受けることってあります？」
「ああ」
と、茗荷さんは顎に手を当てて考える。
「ないことじゃない……な」

皮肉なことに。
気を失ったのも、精神的に強烈なショックを受けたのも同じ時だ。父が自殺した時。僕はそのショックで大きくバランスを失って仰け反り、後頭部を強打した。その時。記憶がぶつりと一度、とぎれている。
気がついたら僕は血の海の中に倒れ込んでいた。
絶叫を上げた記憶がある。でも。
僕のアノ悪夢ってもしかしたらそれが原因なのかもしれない。精神的ショックだとばかり思ってたけど外傷も関係して……いや、あるいはアノ悪夢の連続自体が僕の脳をなにかしら変容させる効果があったのかもしれない。擦り切れるみたいに恐怖を覚え続け、小学生の頃の記憶が摩耗するくらいずっと特定のイメージを見続けたのだ。だから。
「ま、とりあえずそこら辺の話、また今度にしましょう」
志村さんがそっと割り込んできた。
「ほら、イエスタデーが待ってる」
モニターの中で銀花がじっとこちらを見ていた。僕は慌てた。
「あ」
茗荷さんが申し訳なさそうに、
「引き留めて悪かったな。志村の言うとおり、また今度にしよう。行ってくれ」

僕は頷いて、部屋を出て行った。二人の視線がずっと背中の辺りに残っていた。

銀花を街に連れだして駅ビルの中を歩いた。銀花は時折、

「……」

黙って僕の顔を見上げ、また俯いている。僕はなんとなく悟った。彼女は僕の顔を見た瞬間から僕がこれから言おうとしていることをはっきりと予想しているのだ。だから、僕は時間をかけるのを止め、近くの洋食レストランに銀花を誘った。

「……こんなところ、わたし入ったことないです」

と、ぽつりと呟いた銀花の言葉がなぜか胸にずきんと突き刺さった。向かいあわせの席に座り、メニューを広げ、銀花はスパゲティとオレンジジュースのセットを、僕はビーフシチューとコーヒーのセットを頼む。

もちろん、僕が全部、声に出して注文する。

若いウエイトレスは僕一人しかいないのに食べ物を二セット頼むので不審そうな顔をしていた。

「えっと、スパゲティとビーフシチューの……ランチセットですか？」

と、再度、確認された。

僕は頷いた。

「はい、お願いします」
恥ずかしいんじゃない。もう恥ずかしくはない。
ただ悲しくなった。
彼女はここにいるのに。
なぜ。
という気持ち。
やがて運ばれてきた食べ物を漫然と食べながら、なんとなく沈黙を続ける。銀花はフォークでパスタを器用に巻いて口元に運んでいた。
「ねえ」
と、僕はお皿が半分以上空になった頃合いを見計らって、単刀直入に尋ねた。
「正直に答えてね？」
銀花はフォークをお皿に置くと、身を固くし、手を膝元にぎゅっと押しつけ俯いた。その姿を見て、僕はさらに確信を持った。ああ、やっぱり彼女はこれから僕がなにを尋ねようとしているか気がついている。
そしてそれはきっと事実なのだと。
「君は」
「……」

「君はもしかして僕以外の人が見えにくくなってるの？　機械を通しても」
銀花は黙っていた。
「志村さんはそう考えている。僕も君がそうなんじゃないかなと思っている。どうなのかな？」
銀花はやがて、
「いいえ」
と、首を振った。
「違いますよ」
それは明確な拒絶の言葉だった。彼女は俯いたまま。
「違います」
繰り返す。
「わたしは普通です。わたしの認識に全く問題はありませんよ」
声が硬く、ぎこちなかった。聡明な彼女の言葉とも思えない。あまりに明白な嘘。僕は深く
深く溜息をついた。
「じゃあ、君は〝眼鏡〟をわざと壊した訳ではないんだね？」
銀花は顔を上げた。
半分、泣き顔で、
「なぜ？」

と、彼女は首を傾げて責めるように言う。
「わたしがわざと〝眼鏡〟を壊さないといけないのですか？」
僕は混乱していた。自分ならきっと心を開いてくれるかもしれない。そう思っていたのに……でも、実際は。
「あのさ」
と、僕自身なんだか泣きそうになりながら、
「なんで？」
銀花はふるふると首を振る。
「ねえ、銀花」
銀花はぴくんと肩を揺らした。
「これはきちんと早めに対処した方がいいんじゃないの？　僕ももちろん協力するしさ、志村さんたちも」
だが、銀花は俯いてテーブルの一点に視線を固定したまま、顔も上げなくなった。もう料理にも手をつけない。
「そっか」
と、僕は椅子の背もたれに背中を預けた。
「君がそう言うなら」

割合、抑えた静かな口調で話せたと思う。これ以上、この少女を深追いしても仕方が無い。理性と直感が揃ってそう告げていた。

「そうなんだろうね？」

かなり長いこと銀花は押し黙ったままだった。やがて顔を上げ、

「春道さん」

と、彼女は言った。

「わたし」

淡々と、

「わたし、大丈夫ですから」

彼女は静かに微笑んでそう言った。僕にはもう費やす言葉が無かった。

「なら……いいんだ」

その時。

絶望的なまでの距離感をお互いの間に感じた。後で志村さんに〝上手くいきませんでした〟と報告の電話を入れなきゃ、と思った。

それがとても気が重かった。

その後、お互いほとんど食も進まず、レストランを出た。家まで帰る間、銀花と僕は互いに

ずっと無言だった。僕は彼女になんと喋りかけて良いか分からず、銀花も特に僕と話すことは無いみたいだった。アパートの前まで辿り着いた時、僕の携帯が突然、鳴りだした。僕は階段の一段目に足を掛けた状態でポケットから携帯を取りだし、

「はい、もしもし？」

と、電話に出た。先に立って階段を上っていた銀花が立ち止まり、振り返ってこちらを見下ろしている。

相手は戸荻さんだった。

〝っと！　安住さん！〟

半分冗談めかした声で、

〝あんた、私を捨てる気？〟

「は、はい？」

〝ライブ！　約束！　待ち合わせ！　もう二時だよ！〟

僕はあっと声を上げていた。

そういえばすっかり忘れていた。今日が戸荻さんと約束した日だった。本当に色々あり過ぎたからそのことがすっかり頭から抜け落ちていた。

〝まだ間に合うからさ、早く銀ベルのところ来てくれるかな？　なに本当に忘れてたの？〟

僕は迷って銀花を見上げた。

銀花は聡（さと）かった。
「そういえば」
と、彼女は自然な声で言った。
「今日は戸荻さんとライブにいらっしゃるんでしたよね？」
彼女は微笑（ほほえ）む。
「大丈夫です。わたし、ちゃんと留守番（るすばん）してますよ」
気負いなく。
自然に。
「……」
僕は黙（だま）って銀花を見上げた。言いたいことが山のようにあった。訊（き）きたいことが本当にたくさんあった。
でも。
一番、分からないのは。
本当に理解出来ないのは。
なぜ、君は平静で笑っていられるの？
怖くないの？
僕以外の人が見えなくなるんだよ？

いや。
僕だって何時まで銀花と共にいられるか分からない。元々、不自然な状態。いつ銀花のことが見えなくなっても不思議は無いのだ。
それが本当に恐ろしかった。
そうしたら本当に誰もいなくなるんだよ！
分かってるんでしょ、君なら？
僕は一言でそれを尋ねた。
「いいの？」
銀花は落ち着いた澄んだ目で僕を見返した。
「はい」
妖精めいて綺麗な少女はそう答えた。
僕は溜息をついた。
もうそれ以外にどうしようもなかった。
「分かった」
と、僕は言った。
「じゃあ、夕飯までには帰るよ」

戸荻さんのところにはギリギリで間に合った。待ちあわせ場所で戸荻さんは、
「も〜、安住くんのアホ！」
と、腰元に手を当て笑いかけてきた。僕は頭を掻いて、
「いや、本当にごめんごめん」
と、恐縮した様子を見せた。
「ほら、行くよ！」
と、戸荻さんが僕の手をごく自然な形で掴んで歩きだしたが、不思議と気恥ずかしさは全く生まれてこなかった。
地下のライブハウス。
五十人くらい入れば一杯のスペース。ステージに出てきたバンドは確かな技量で、僕は身体全体を揺さぶられるような音の洪水に圧倒された。曲の節目節目でノリよく手を上げたり、足踏みをしたりしている戸荻さんに感心して見とれていたら「ほら、安住くんも！　恥ずかしがってちゃダメダメ！」と肩を揺さぶられた。見れば周りのお客さんたちもわっと盛り上がって身体を動かしている。僕もぎこちなくだが一生懸命戸荻さんのフリを真似た。最初は照れくさかったが、そのうちだんだん気にならなくなってきた。
一時間半の演奏時間は結構あっという間に過ぎた。終わった頃には僕も戸荻さんも軽く汗ばみ、頬が上気していた。ライブハウスの中は熱気がこもっていたが、外に出るとやはりかなり

寒かった。
戸荻さんが僕を振り返った。
「安住く〜ん、この後、ちょっとお茶してかない？」
僕は迷った。銀花のところに早く戻りたい気持ちはあったが、実際問題として今、彼女と顔を合わせてもなにか有益な話が出来るとは思えなかった。腕時計を見ると、まだ四時を少し回ったくらい。小一時間程なら戸荻さんと喋ってもまだ夕食を作る時間には戻れるだろう。
「うん、分かったよ。じゃあ、一時間くらいなら」
そう言うと戸荻さんは、
「そうこなきゃ！」
ぐっと親指を立てて笑った。
白いコートを着た彼女はとても元気そうだった。

駅近くまで移動してファミレスに入った。戸荻さんが先頭に立って、
「二名。禁煙でお願いします！」
と、近寄ってきた店員に告げている。それを見て改めて僕は不思議な気分に陥った。最近、銀花と共に行動をしていたから、こうやって他の人間と普通にコミュニケーションを取る女の子を見るとかえって変な気がした。

そうか。
と、当たり前のことを思った。
戸荻さんは他の人から見られるんだな……。
僕がそんなことを考えていると戸荻さんがちらっとこちらを振り返って、
「どしたのさ、安住くん？ ぼ〜として」
と、ぽんと手を伸ばして肩を叩かれた。
「あ、ごめん。ライブの熱気に当てられたみたいで」
「あはは！ ごめんね。無理に連れ出しちゃって」
「ううん」
僕は心の底から言った。
「ありがとう。すっごく楽しかったよ！ 誘ってくれてありがとう！」
「そ？」
と、戸荻さんが笑った。にっと猫みたいな顔で笑って、
「なら、良かった」
その後、窓ぎわの席に案内され、二人で色々な話をした。学校のこと、先生のこと、進路のこと、部活のこと。僕は頭の中の半分以上で銀花のことをずっと考えていたが、戸荻さんとの

会話は思った以上に弾んだ。
「でね、大川先生がその時」
と、彼女が言った時、僕は少しだけどきっとした。
だけど、笑って、
「ふんふん、で？」
と、上手く促すことが出来た。戸荻さんは一瞬だけ「しまった」という顔をしたが、そのまぎこちなく話を続けた。
僕はあえてしらん振りをした。
しばらく話をして、なんとはなしに互いに沈黙が生まれて、戸荻さんは残り少なくなったコーラをストローで掻き回しながら、
「安住くん、あのさ」
と、切りだしてきた。僕は紅茶をちびっと飲みながら、
「ん？」
と、首を捻った。戸荻さんが目を上げた。
「少し訊いていい？　いいかな？」
僕はカップをソーサーに置いて、
「どうぞ？」

身構えた。
「あのさ」
戸荻さんは迷いながら、
「これは訊かれてやなことなのかもしれない。私も興味本位で訊くわけじゃないの。でも、もし違うならそんな噂止めさせたいし」
「……」
「なにより安住くんが私にとって友達だから……だから、答えたくなかったら黙っていてね。それと安住くんが言ったことは当たり前だけど絶対に誰にも言わない」
「いいよ」
と、僕は少し目線を落とし、頷く。
「なんでも訊いて良いよ」
戸荻さんはそんな僕を複雑な表情で見つめる。
それから一言。
「大川先生って安住くんのお母さんなの？」
僕は。
自分で思ったよりも長く黙っていたのかもしれない。戸荻さんが不安そうな表情をする程。
でも、実際、口に出せばそれは本当になんでもないことだった。

「うん」
と、僕は頷いた。
「大川先生は……血が繋がった僕を産んだ女の人、という意味でならそう」
溜息と共に、
「母親だよ」
微かに笑ってさえいた。

高校に入った時、愕然とした。昔、家から出て行った母親がそこで教鞭を執っていたのだから。最初は他人のそら似かと思った。だが、そのうちそれが間違いでないことに気がついた。
大川先生はかつて僕の母親だった人だった。
再婚を果たし、名字は異なり、昔よりもぐっと年は取ったが。
そもそも見間違える訳はないのだ。
曲がりなりにも自分の母親だった人なのだから。
向こうも僕に気がついてはいるのだと思う。最初に僕を間近で見た時、啞然としたように目を見開いていたから。
僕は溜息をつき、戸荻さんに自分の半生を話した。そうしないと中途半端でなにもかも分か

らなくなると思ったのだ。
僕と大川先生の関係。
父親と母親のいきさつ。父親の自殺。遠い親戚に育てられたこと。そしてかつての母親との再会。出来るだけ客観的に。
一つ一つ順を追って。
「まあ、僕も別にあの人を追いかけてあの高校に入った訳じゃないからね。そこら辺のことは出来ればあの人にちゃんと分かって欲しかったんだけど」
「……そっか」
「現状、無視されちゃってるしね。話し合える状況じゃとてもない」
僕は苦笑気味にそう付け加えた。戸荻さんが俯けていた顔を上げた。なんと言って良いか分からないような表情で、
「あのね」
と、言う。
「私ね、ずっと安住くんのその淡々とした、なんていうのかな？ 変に落ち着き過ぎちゃってるところがずっと気になってたの。なんかね、なんだろうね？ なんか自分をいつも人生の勘定の外に置いてる気がするの」
「……人生の勘定？」

「そう。なんでも受け入れちゃいそうで、怖い。まあ、いいやって死にそうな気が」
「死にはしないよ」
「うん、死にはしないと思う。でも、ある日、運命の神様かなんかが〝お前はこれから消されちゃう予定だけどどうする？〟て言ったら〝あ、そうですか〟ってなんかあっさりとそのまま受け入れちゃいそうな気がする」
　それは。
　否定出来ない。戸荻さんは口元に強ばった笑みを浮かべ、
「だから、わたし、それが気になって。そのところが、気になって」
　ぽろりと彼女の目から突然、涙がこぼれ落ちた。
「わたし。それが理由だったんだね……そんなに辛いことがあったんだね？」
　僕は驚いた。
　慌てて、
「あ、ご、ごめん！　不愉快な話したね！　ごめん！」
　戸荻さんは乱暴なくらい首を横に振った。
「そうじゃない！　そうじゃないんだって、安住くん！」
　溢れ出る涙を手の甲で拭いながら戸荻さんは挑むように、
「なんで謝るの!?　勝手に泣いてるだけだよ、わたしは！　安住くん、泣いてないのに。わた

し勝手に泣いてる……わたしが、泣いてる」
僕はどうして良いか分からない。戸萩さんは僕を恐れるような目つきで見やった。
「あのね、わたし、まるで分からないんだけど安住くん悲しくないの？」
「悲しいって？」
「お父さんのこととか、お母さんのこととか！」
僕は衝撃を受け、黙り込んだ。
実を言えば父のことはあまり哀しくない。薄々、理解はしている。僕はきっと深層意識のどこかで父の死をまだ受け入れていないのだ。
それはあまりにもひどい光景だったから。
だから、僕は父がまだ死んでいると心のどこかで認めていない。代わりに延々、延々、ただ悪夢を見続ける。
「えっと」
でも。
母のことはきっとそれなりには悲しい。
「あれ？」
分からない。
「僕、悲しそうに見えない？」

「うん！」

と、はっきりと戸荻さんは首を縦に振った。僕はずきんと頭がうずくのを感じた。

あれ？

「なんだか全くいつも通りに……なんかね、学校のことを喋ってるのと同じテンションで喋ってる」

戸荻さんは身を乗り出してきて、

「辛くなかったの？　一人だったんでしょ、ずっと。親戚の人に預けられたって言ったけど、安住くん、全然、その人たちのこと他人みたいに話してる。今だって一人暮らしだし……辛くなかったの、そういうの？」

辛いよ。

戸荻さん……。

僕はぼんやりと考えた。辛かった。延々、延々、悪夢を見続けた小学生時代。僕はただただ〝消えたい〟とだけ願い続けてきた。

夜。

歯を食いしばって。涙を流して。

一人の。

幾夜の一人の夜を。

耐えてきた。
「でも」
僕には誰も救ってくれる人などいなかったから。
この震える身を抱き締めてくれる人などいなかったから。いや、そもそも僕は叫び方など一切知らなかったから。
どうやったら心のこの死ぬ程の恐怖を伝えていいかそれすら分からなくて。
だから。
僕は一人で。
ずっと。
歯を食いしばって生きてきた。
「……」
僕は呆然としていた。なにかが頭の中で形になってくる。目を見開いている僕を見て戸荻さんは心配そうに、
「安住くん、大丈夫?」
僕は反射的に、
「え? ああ、だいじょ」
と、言いかけ、愕然とする。

「僕、今」
そうだ。
これは全く同じ。アノ悪夢を見た明け方、銀花に尋ねられて僕は〝だいじょうぶ〟と。だって、僕は他の人に負担を掛けるなんて絶対、出来なくて。
そんなこと絶対、出来なくて。
だから。
「大丈夫じゃないと思う。それなのに大丈夫って言ってる……」
と、呟く僕に戸荻さんは深い、深い溜息と共に告げた。
「あのね、安住くん」
彼女は僕を見上げ、諭すように、
「きっと安住くんはね」

人に甘える、という行為自体を知らないんだよ。
だって、ずっと一人だったんだもん、
僕の頭の中で稲妻のようになにかが閃いていた。
銀花！

僕は気がつけば立ち上がっていた。戸荻さんに向かって早口で言っている。
「ご、ごめん！　今日はちょっと帰るね！」
びっくりしている戸荻さんに、
「ほんとごめん」
飲み物代に充当する小銭を取りだし、テーブルの上に置き、心の底から謝る。
「今、ちょっと説明できないんだけど、どうしてもしなければいけないこと、分かったんだ！」
息せき切って、
「ほんとごめん！　違う！　別に戸荻さんの言葉に気を悪くしたとかそういうのじゃほんと全然ないんだ！」
戸荻さんの表情の変化を読み取って先回りして喋る。
「あのね、なんて言ったらいいんだろう？　戸荻さんの言葉でもの凄く大事なことが分かったの。で、今からそれを直しにいかないといけない！　間違えたことだから！」
「待って、安住くん。それって」
と、彼女は額に指を当てる。
「お母さんのこと？」
「違う。でも、それに近いこと。今、行かないといけない。僕、間違えてた。ほんと間違えて

た……だから、取り返しがつかなくなる前にすぐ行かなきゃ」
戸荻さんはしばし黙り込んだ。それからにへっと笑った。
「なんだか分からないけど」
指をぴっと敬礼する形に動かす。
「行きたまえ、安住くん。私が許す！」
「ありがとう」
僕は息を漏らして、
「本当にありがとう、戸荻さん。僕は信じられないほどの恩を君から受けた」
涙が出そうなくらい戸荻さんが綺麗に見えた。
「君は本当に僕の先生だ！」

夜の街を駆けた。心はずっと後悔で一杯だった。
そうだ。
大丈夫な訳なんか無い。
消えてしまうんだ。
見えなくなってしまうんだ。
それが恐怖でない訳ない。

だけど。
彼女は。
それをどう表現して良いのかすら分からないから。
だから。

僕は息を切らして自分の住むアパートに辿り着いた。戸荻さんと思ったより話し込んでしまったので辺りはもうすっかりと暗くなってしまっている。僕は外階段を駆け上がり、自分の部屋に飛び込んだ。
「銀花？」
靴をもどかしげに脱ぎ、台所を荒々しく通って部屋へ。部屋は真っ暗で外の月の光がくっきりと差し込んできている。床の上に窓枠の形に切り取られた白い光の四角形が。
部屋が凍えるように寒い。
そして。
いた。
銀花が。
部屋の隅で膝を抱えて小さくなっていた。懐には僕が貸してあげたただのシャツ。それを大事そうに大事そうに抱えて、彼女はそこに顔を埋めて。

「……」
僕の気配に気がついて、慌てたように顔を上げ、
「あ、は、春道さん！」
取り繕うように笑顔を浮かべ、懸命に頬の辺りを手のひらで拭っている。
泣いていた、のか？
「す、すいません、ちょっとうとうとしていました」
母親に抱かれた〝安心〟を感じたことが無くて。
「は、早かったですね！　もうちょっとゆっくりしてらしても良かったんですよ？」
人の温もりを知らなくて。
「ライブはどうでしたか？　戸荻さんとはお話ししましたか？」
だから。
銀花は。
「わたしは全然、大丈夫でしたのに」
そうやって嘘をつく。僕は唇を噛んだ。涙がこぼれた。勝手にこぼれて仕方なかった。膝が
自然と床の上に落ちた。
「はるみち、さん？」
気がついていないのだろうか、この少女は？

自分が震えていることに。
今にも泣きだしそうな顔をして震えていることに。
僕の〝匂い〟がついたシャツを大事にしていたのも、学校に僕を迎えに来たのも、きっと一人では不安で不安で仕方がないから。
なのに。
「……はるみ、ち、さん？」
僕は言っていた。
「なんで？」
「え？」
と、不安そうに銀花。手を胸元に縮めている。僕は繰り返した。泣きながら、
「なんで？」
ああ、ようやく彼女の全てが分かった。
「なんで、この街に来たの？」
「え？」
「、、、この季節に」
この雪が降る季節に。
「桜の名所を見に来たのなら、お母さんの思い出を知りに来たのなら、そして自分の認識がお

かしくなっていないのなら」
なぜ？
「この季節に来たの？」
「！」
銀花が目を見開く。僕は、
「時間がないからだよね？　もう君には春まで待つ時間がないかもしれない……それが分かっていたから、君は」
銀花は怯えたように首を振る。口元に手を当て、首を振り続ける。僕は突きつける。あえて銀花に全てを突きつける。
「きっと君は全てを見終わって、お母さんの思い出を知って、それからきっと」
銀花はいやいやをする。今にも悲鳴を上げそうに。
でも、僕は言う。
「一人でいなくなるつもりだったんだね？　志村さんたちに迷惑をかけないよう。そっと一人で。この街のどこかで消えるつもりで」
「ちが」
口を開きかけた銀花に僕は覆い被せて言った。
「違わないよ」

だって、僕もそうだもん。
笑いながら。
泣きながらそう言った僕の言葉に銀花は声を失った。
「周りの人間に迷惑をかけられない。かけていいなんて方法、知らない。だって、苦しいことや哀しいことや悲鳴は全部」
自分の胸を指さす。
「ここに溜め込んできたら」
銀花は雪像のように固まっている。僕は全てを語りだした。
「銀花。僕はね、目の前で父が自殺するのを見た。それ以来、夜は毎晩、必ず気が狂うような悪夢を見続けてきた。毎晩、毎晩。ずっと。ずっとね。でも」
泣き笑いながら、
「誰にも言えなかった。言う方法を知らなかった。言ってよいとさえ知らなかった。だから、たった一人で」
歯を食いしばって生きてきた。
「銀花。僕はね」
と、万感の思いを込めて告げる。
「君と同じさ。君と同じ」

銀花、と願う。
どうか。
お願いだから。
僕に救いを求めて……。
「君と同じ一人ぼっちの人間なんだよ」
助けを呼んで。
「わ、わたしは」
僕を必要として。
「ち、ちが」
「銀花」
苦しかったろうね？
「分かるんだ。今なら分かる。誰にも見られない哀しみを」
辛かったろうね？
「明日、消えてしまうかも知れない恐怖を」
哀しかったろうね？
「一人で生きなきゃいけない辛さを。何もかもが失われていく過程の絶望を。そうやって見えなくなっていく大事な何かをもうこれ以上、決して手放さないで、銀花」

僕は涙を拭って強く願った。
どうか。
「僕はたった一人、君をこの世で見ることが出来る人間。だから」
どうか君と共にいる力を。
僕の一人ぼっちがこの子の一人ぼっちと合わさって、僕らが二人、互いに一人ぼっちじゃなくなりますよう。
「たとえ世界が全て見えなくなっても僕は君と居続ける」

銀花が。
揺らめいた。よろめいた。表情が崩れた。耳が割れる程の泣き声が聞こえた。悲鳴のような、悲痛な叫び声が耳を打った。
もたれかかってきた。
抱き止めた。
抱き締めた。抱き締め返された。強く強く。
叫んだ。
窓の外から月光。その四角い枠の中で。
銀花の叫びをただ受け止めて。永劫一人だと思い続けた、癒されなかった、行き場の無かっ



たそれぞれの魂は。

そこでその時、初めて少し救われた。

たった一人。

互いに互いがいることで。

ただそれだけで。

もし、僕が特殊な脳の構造になってこの子を見ることが出来るようになったのだとしたら、それはきっと。

きっと僕はこの子の想いを受け止めるために。

ただそのために。

あの長い長い夜を僕は耐え続けてきたのだ。

〝消えたい〟と思っていた気持ちは決して無駄では無かった。

銀花はその夜、全てを解放した。

翌朝、僕は柔らかい感触で目を覚ます。気がつけば腕の中に小さな銀花がすっぽりと入り込んでいた。

彼女は僕にしがみつくようにして寝ており、きゅっと僕の背中に手を回していた。片時も離れまいとするかのようにずっと腕に力が入っている。可哀相に。僕の心の中に痛みに近い感情が走る。

こうでもしなきゃ、どうしようもない恐怖なのだろう。

消えてしまう、寂しさと悲しさ。

叫びだしたいくらいの一人ぼっち。僕はずっと彼女の満たされなかった甘える、という行為に自分の全てを使っても応えてあげようと改めて決意していた。

僕は銀花の髪をゆっくりと撫でてやった。そうやってしばらく手を動かしていると銀花の目がうっすらと開いた。

彼女は小さく身を小刻みに震わせ、

「は」

と、吐息をもらした。それから、

「はあ」

長く息を吐きだし、僕をさらにぎゅっと抱き締めた。

「良かった」

僕の胸に顔を埋め、

「良かった……夢じゃない」

「ん？」
と、僕。銀花は言う。掠れた声で、
「いなくなってしまう、夢じゃない夢を見ました」
「はい？」
「春道さんがわたしを見えなくなって、わたしがどんなに叫んでも春道さんはわたしを見てくれなくなって、わたしはここにいるのに、って泣き叫んでも春道さんは笑って違うところにいってしまう。そんな夢を……あれは？　夢？」
「夢だよ」
僕はきっぱり言った。
「夢さ」
「……」
銀花はもっと強く僕を抱き締めた。
「どこにも」
泣いているのかもしれない。
「どこにもいかないでください。銀花のところにずっといてください」
「うん」
「銀花を見ててください」

「うん」
「銀花を……どうか銀花を離さないで」
「う、うん」
少し痛い。少女の力は破格なのだと今更ながらに思いだした。僕は少女の身体を軽く抱き返し、言った。
「どこにもいかない。ずっと君のとこにいる」
「良かった……」
銀花は顔を上げ、ようやく身体の力を抜いた。頬を朱に染め、泣き濡れている。驚いたことに少し鼻水が出ていた。
僕はそれを見ていることすら切なくなり、
「ほら」
と、手を伸ばしてティッシュで少女の鼻を拭ってやった。まさか綺麗な銀花がこんな風に乱れる日が来るとは思わなかった。
銀花は頬を赤らめはしたが、僕にされるがままだった。
「はい、チンして」
という言葉に素直に従う。ティッシュを屑籠に放り、銀花の髪を撫でて整えてやった。銀花は目を閉じ、ずっと大人しかった。人形めいた容姿だが、そうしていると本当に人形ぽく見え

た。触った時の温かな体温だけが少女が生きていることを示していた。

だが、僕が、

「じゃ、ちょっとだけ待っててね」

と、立ち上がりかけた時だけは銀花は感情を露わにした。

「！」

慌てたように僕の服の袖を掴んですがるように僕を見上げた。僕は困って、

「あのね、ごめん。ちょっと生理現象」

銀花はかあっと赤面した。でも、彼女は言う。

「あ、あの」

上目遣いで、

「出来るだけ早く帰ってきてくださいね？」

「うん、出来るだけ頑張るよ」

僕は半分以上本気でそう答えた。

トイレから戻ってくると銀花は僕に転がるように飛びついてきた。気がつけば彼女はまた小刻みに震えていた。

僕は彼女を抱き止め、

「ただいま」
「……」
「え？　なに？」
「一緒に」
「はい？」
「一緒にトイレでもいい。お風呂も一緒でいい」
「……」
「だから、離れないで」
「うん」
「わたしから、どこにもいかないで」
銀花は僕の胸に顔を埋め、くぐもった声でそう言った。
僕は痛ましい思いで一杯だった。
彼女の気持ちが全て理解出来たから。
母が出て行き、父が死んで、悪夢を見続けた頃、僕が欲していたことがたった一つ。それだけだったから。
誰かにずっといて欲しかったから。
誰かに抱き締めて欲しかったから。

その気持ちが分かる。だから、僕はただ銀花をずっと抱き締めた。きっと過去の自分がずっとずっとして欲しかったことなのだ、これは。

強く。

「だいじょうぶ」

と、一言そう言ってくれる誰かを僕はずっと待ち望んでいたのだから。

銀花の震えがほんの少しだけ和らいだ。

その後、ようやく銀花が落ち着きを見せたので二人で朝食を摂った。銀花はハムサンドをほおばりながらずっと僕を見ていた。

まるでほんの少しでも目を離せばそれで僕がいなくなってしまうかのように。

ちらっと時計を見たらもう午前十時半。学校はとっくに始まっている。だが、今日は到底、銀花を一人には出来ない。僕は休むことに決めた。

「銀花。今日、なにかしたいことあるかい?」

と、尋ねたら銀花は即答した。

「春道さんと一緒にいたいです」

「うん」

と、僕は痛ましい想いで、

「そうだね……いよう」
心の底から言った。
「ずっと一緒にいよう」

ご飯が終わると銀花はまた僕に近づいてきた。僕らは凍える動物が互いに身を寄せあうようにそっと身を寄せあった。
銀花はまだほんの少しだが震えていた。
僕らは色々な話をした。
その時、
「わたしは春道さんに出会えて良かった」
と、銀花が言った。彼女は僕の体温を感じながら、
「きっとわたしは春道さんを見つけた時に、初めてわたしを見てくれた人に……わたしはここにいますよって、言いたかったのかも。ずっと」
「そっか」
と、僕は銀花の髪を撫でながら思いだした。
彼女は誰からも見えない。それはまるで宇宙の星々が互いに発する電波のように。でも、それを見る代わりに聞くことが出来る人間もいる。

耳を凝らし、誰も聞くことの叶わない宇宙の奏でる音楽を、天文台にたった一人で耳を澄まして聴いている人間もいる。
僕がそういう人間になれたらいいなとふと強くそう思った。
そういう柔らかで強い力を持った人間に。
頃合いを見計らって僕は銀花に言った。
「志村さんたちのところに行こう」
驚いたような顔の彼女に、
「僕らは互いに伝えなきゃいけない。そしてあの人たちにも助けて貰う。そうしないと」
僕は彼女の目を見つめた。
「僕たちの次の未来が見えない」
銀花はじっと考え込んでいた。それから透明な笑顔を浮かべ、一言はにかむように。
「一つだけ条件が」
僕はその条件を了解し、雪が降りだした街の中をホテルに向かって歩きだした。二人ならもう決して寒くはなかった。
ホテルまで来た時、不思議な感慨が生まれた。ここへ最初に連れてこられた時のことが遠い

昔のようだった。
あの時、僕は外から一人でやってきて銀花と再会した。今、僕はその銀花を誘い、再びここに戻ってきている。
ぎゅっと彼女の手を握って。
しっかりと握って。
迎えに出た志村さん、茗荷さんがひどく驚いたような、困惑したような、あるいは哀しそうな顔で僕らを見つめていた。
つまり、銀花が初めて人と触れあっているところに驚いたのであり、その銀花がまるで人が変わったように僕に寄り添い、震え、怯えていることに困惑し、なによりそのことが彼女がもう既に〝一本目〟の糸を切って、消滅へのカウントダウンを始めていることの証拠だったから哀しそうな顔をしたのだろう。
僕らは機材の置いてある部屋で話しあった。
正確には僕が志村さんと茗荷さんに銀花が自分の状態を認めたこと。そして志村さんと茗荷さんに原因究明のため、どんな協力もすることを述べた。その間、銀花はじっと眼をつむって僕の手を握っていた。
たった一つだけある条件。
それは。

〝僕と共にずっといること〟

それさえ守られれば。

銀花は〝大丈夫〟と微かに笑って言った。僕はその約束は守るつもりだと補足した。志村さんと茗荷さんはすぐに頷いた。

彼らは僕に大仰なくらいの感謝の言葉を述べてくれた。

志村さんに至ってはうっすらと涙を浮かべていた。二人に握手をされ、今後のことを話そうと言われ、頷いて。

ふと。

志村さんと茗荷さんが目配せを交わしあった。

「そうだな」

と、茗荷さんが言って、志村さんが銀花に向かってマイクで、

「あのね、イエスタデー。これからも安住君の家に泊まるにしても、着替えとかもう少し必要でしょ？　ちょっと隣の部屋に行って選んできなさい。私も付き合うから」

銀花はその声を聞き取って僕の方を不安そうに見た。片時も僕から離れたくはないみたいだったが、僕が、

「ずっとこの部屋にいるよ。君から離れるわけがない」

と、笑いかけたのと、

「あんたね。服や下着を詰め込むのにも安住君同伴させる気?」

と、ちょっと志村さんが冗談交じりに言ったのを聞いて赤面して、

「……はい」

と、頷き、隣の自分の部屋に向かった。志村さんが彼女の後からついていく。銀花はそれでも戸口のところでまた頼りなげに僕を振り返った。

僕は笑って頷く。力強く。

「だいじょうぶ」

その一言で銀花は迷いを振り切り、部屋から出て行った。志村さんがちらっと茗荷さんと僕を見ていく。茗荷さんがどことなく憂鬱そうに頷き、ドアが閉まる音をちゃんと聞き取ってから僕に向かい直った。

「お前にちょっと見て貰いたい映像があるんだ」

僕は身構えた。なんとなく予感はしていた。

「まだ少し気が早いのかも知れないけど」

茗荷さんはパソコンに保存されている動画を呼びだしながら僕に向かって言った。

「いつかは必ず向かい合わなきゃいけないことだ。多分、お前とイエスタデーが最後まで一緒にいる気なら。頑張る気があるのなら。辛いかも知れないけど、直視して欲しい映像がある。

俺は奇跡に賭けたい」
茗荷さんは僕を振り返った。
「お前も薄々感じていると思う。イエスタデーが完全なる消失から救われるか否かは全てお前にかかっている。つまり、〝四本の糸〟……人を見えなくなり、聞こえなくなり、人から見られなくなり、人から聞かれなくなり、そうやって何もかも認識の外にいった時点でなお、お前がイエスタデーを見続けることができるのかを」
「！」
僕が考えていることと同じだった。
僕は今日、それを確かめに来ていた。茗荷さんは僕の顔を見て笑った。
「全くお前は聡いヤツだよ。賢いな。だから、聞いてくれ」
動画をクリック。
「フィリスのことだ」
パソコンの画面に映像が浮かび始めた。白い部屋。なにもないがらんとした部屋。そこに二人の子供がいた。
一人は車いすに座った黒人の少年。
もう一人は。
「これはそのお前以外にかつて唯一〝黄昏の子供たち〟を認識することが出来たフィリス・タ

ツクワートとヤツと一番親しかった〝黄昏の子供たち〟の五番目ホーリーの記録ビデオだ」
銀花と同じように妖精めいた赤い髪の少女。茗荷さんはごくりと唾を飲み込む。
「一つ訊かせてくれ。お前には……その、見えているのか？」
僕は頷いた。
「フィリスだけでなく……ホーリーも？」
僕は再度頷く。
「綺麗な……優しそうな子ですね」
目を細めた。画面の中でそのホーリーという少女は少し前屈みになって黒人の少年に向かってなにか言っていた。音声が拾い切れていないが、多分。
〝ありがとう〟
とか、そう言っている。
〝ずっといてくれてありがとう〟と。
対してフィリスという少年は良く分からないような言葉を口にしていた。手足が不自然に反らし気味で、目が中空を見ている。でも、嬉しそうだった。
フィリスはホーリーといられて楽しいみたいだった。
彼女が言っていることに正確な反応は返していないけど、それでもしっかりと彼女に対して話しかけ、笑いかけている。

僕は告げた。
「僕にはフィリスもそれからホーリーという子も見えています」
茗荷さんが息を呑んだ。
「そっか。それはやっぱりすごい。お前は本物だ。つまりどういうことかというと」
音声をもう少し上げながら、
「これはな、ホーリーが四本の糸を全て切った後、完全に〝財団〟の認識の外にいった後の映像なんだ。だから普通の人間である俺には」
畏怖するように言った。
「俺には見えない。俺にはこの時点のホーリーという子は見えていないんだ」
僕は唇を嚙んだ。
こんなに見えているのに。こんなにはっきりと聞こえているのに。
「不思議なもんだな。ホーリーの記録ビデオは前にもあって、他のはちゃんと俺にも見えている。聞こえている。でも、この映像に関しては全くの空白だ。俺にはこのフィリスって子が全く何もないところで喋っているようにしか見えない」
僕は楽しそうにしているフィリスとそんな彼を慈しむような目で見ているホーリーに自分と銀花を重ねた。
ふと茗荷さんが真剣な口調で言った。

「これからちょっと気をつけて見ていてくれ。もしかしたら俺たちにとって救いがない映像になるかも知れないけど。お前ならもしかしたら」

僕はちらっと茗荷さんを見上げた。茗荷さんは半笑いで、

「この後」

と、告げた。

「この後、ホーリーはそのフィリスからも全く見えなくなる。フィリスという〝黄昏の子供たち〟を先天的に見る人間からも消えてしまう完全なる〝消失〟が起こるんだ」

僕はびくっと身を強ばらせた。やっぱりフィリスは最後、そうなったのか。

だけど。

逃げる訳にはいかない。

目を逸らす訳にはいかない。これは銀花と僕の未来でもあるのだ。映像の中で。

それは。

僕が目をこらす中で。

静かに起こり始めた。

〝ありがとう〟

まずホーリーがそう言った。そしてきょとんとしているフィリスの額にそっとキスをする。

笑っていた。

そして泣いていた。
静かに涙を流してホーリーは泣いていた。フィリスは分かっていない。でも、僕は食い入るように見続けた。
自分だけは目を離すまいとした。ホーリーの姿と銀花の姿が重なった。
だけど。
〝～〟
フィリスがなにか言った。彼も驚いたように目を見開いている。僕も見えていた。ホーリーの身体が。
透き通るように。
僕らの目には透き通るように輝いて。
どんどん薄く透明になっていって。
そして。
〝GOODBYE〟
最後にその一言で。
ホーリーは全く見えなくなった。僕は膝を突いた。それは。
映像の中でフィリスが突然、声を上げて泣き始めた。長い長い慟哭。
彼も理解したのだ。

もう二度とホーリーは自分の許に帰ってくることは無いのだと。
友達を失った者の深い深い悲しみ。
悲痛な。
僕は膝を突き、震えた。それは。
僕にもいつか否応なく銀花が見えなくなる日が来ることを意味していた。いつか。
どうしようもない別れの日が必ずやって来るのだ。
茗荷さんが溜息をついた。
「やっぱりそうか」
運命は決定づけられていたのだ。
僕と銀花はその後、もう少しホテルに滞在して、僕たちの部屋に帰った。僕らがいるべき場所へ。二人でいられる場所へ。
銀花は心なし上機嫌でさえあった。僕と並んで歩きながら、雪が降る街の中を軽やかにぽ〜んぽ〜んと跳ねるようにして歩いている。
そのたび彼女の銀色の髪がふわりふわりと浮かび上がって。

目を奪われる程それは綺麗だった。

銀色が。
ふわりと。

僕はじっと堪えていた。哀しみの感情を。
こみ上げてくる思いを。
そして。

目の前を歩いてくる一人の女性に気がつく。

「！」

その女性は学校の先生で。
大川という名前の先生だ。僕は彼女とすれ違った。二人とも目を逸らし気味に。
全く会話を交わすこと無く。
僕らは互いによそよそしく道を交差する。
僕は今日、学校をさぼった生徒で、大川先生はそれを恐らく知っているはずなのに。彼女は決してなにも見ない。

僕の全(すべ)てを見ることは無い。
ふと。
声が漏(も)れていた。
僕は気がつけば言っていた。
「先生」
大川先生が歩を緩(ゆる)め、立ち止まった。僕らは互いに振り返り、向かいあう。僕はすうっと息を吸い込み、
「お気づきですか？」
そう告げた。
これは僕の宣戦布告だった。この救いの無い理不尽な世界への。
「ここに」
銀花(ぎんか)がいる方角を指さし、微笑(ほほえ)む。
「ここに女の子がいるんですよ、一人(ひとり)」
僕を見ないのは仕方が無い。でも。
銀花を。
どうかお願(ねが)いだから銀花だけは。
「……」

大川先生は冷ややかに目を細めた。黙って僕を見つめている。

僕は言う。

彼女が世界から〝見えないモノ〟として扱われるのなら。

せめて代わりに僕が。

この僕だけは高らかに叫んでやろうと。

〝彼女はここにいますよ！〟

と、高らかに。

たとえなにを失っても。

「……学校の外で」

と、大川先生は低い声で一言言った。

「話しかけてこないで」

それだけ言って彼女は背を向け、またゆっくりと前に向かって歩きだす。二度と振り返ることなく。

僕にそれ以上の言葉を掛けることは決してなく。

たとえなにを失っても。

気がつけば銀花がぎゅっと僕の手を握っていた。雪が降りしきる中、彼女はずっと僕の手を

握り締め、俯いて一言。
「春道さん。銀花は」
泣き笑いの表情で、
「銀花はずっと春道さんの隣に。たとえ世界が全て見えなくなってもきっとわたしは」
僕を見上げた。
「あなたのそばに」

僕は深く息をついた。
僕のモットーは〝流れに逆らわない〟
それは僕が培って育んできた僕なりの価値観。
僕なりの生きる術。
でも。
僕は今、初めて。
生まれて初めて、
運命に抗ってみようと思った。

あとがき

今でもはっきりと覚えているのですが、この作品の構想を思いついたのはサイン会で台湾に行っている時、台湾タワーに登っている最中でした。なのでそのアイデアにのめり込んで周りの景色がほとんど見えなくなっていました。

書きたいな、と強く思っていました。

長い、本当に長い、助走期間を経てようやく形になりました。

イラストは本当に〝あの〟笛さんだし。

ところでこの本を読み終わって、あとがきまで目を通してくださっている方は一体どういう方なのでしょう?

デビュー作、『インフィニティ・ゼロ』からの読者さんでしょうか?

それとも『いぬかみっ!』、『ラッキーチャンス!』などのコメディ色の強いシリーズから来てくださったのでしょうか?

あるいは僕の本を全く読んだことのない、なんとなく手にとられた方なのでしょうか?

願わくば、少しでも楽しんで……ああ、この本を読んで良かったな、と思って貰えたらこれに過ぎる喜びはありません。
もっともっと面白いモノが書きたいです。
もうしばらく銀花と春道にお付き合いいただければ幸いです。

読んでくださった全ての方に御礼を。それと忙しいスケジュールの中、本当に溜息の出るような綺麗な絵を描いてくださった笛さんと相変わらずご迷惑をおかけしています担当さんにも御礼を。
『銀色ふわり』はどなたが欠けても決して成立しませんでした。心よりの感謝を。

有沢まみず

◉有沢まみず著作リスト

「インフィニティ・ゼロ 冬〜white snow」（電撃文庫）
「インフィニティ・ゼロ② 春〜white blossom」（同）
「インフィニティ・ゼロ③ 夏〜white moon」（同）
「インフィニティ・ゼロ④ 秋〜darkness pure」（同）

「いぬかみっ！」（同）
「いぬかみっ！2」（同）
「いぬかみっ！3」（同）
「いぬかみっ！4」（同）
「いぬかみっ！5」（同）
「いぬかみっ！6」（同）
「いぬかみっ！7」（同）
「いぬかみっ！8 川平家のいちばん長い一日」（同）
「いぬかみっ！9 ハッピー・ホップ・ステップ・ジャンプ！」（同）
「いぬかみっ！10」（同）
「いぬかみっ！11」（同）
「いぬかみっ！12」（同）
「いぬかみっ！13 完結編〈上〉～hop step dash～」（同）
「いぬかみっ！14 完結編〈下〉～fly high high～」（同）
「いぬかみっ！EXわん！」（同）
「ラッキーチャンス！」（同）
「ラッキーチャンス！2」（同）
「ラッキーチャンス！3」（同）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先

〒101-8305 東京都千代田区神田駿河台1-8 東京YWCA会館
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「有沢まみず先生」係
「笛先生」係

■

電撃文庫

銀色（ぎんいろ）ふわり

有沢（ありさわ）まみず

発行　二〇〇八年七月十日　初版発行

発行者　髙野 潔

発行所　株式会社アスキー・メディアワークス
〒一〇一-八三〇五　東京都千代田区神田駿河台一-八
東京ＹＷＣＡ会館
電話〇三-五二八一-五二〇七（編集）

発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒一〇二-八一七七　東京都千代田区富士見二-十三-三
電話〇三-三二三八-八六〇五（営業）

装丁者　荻窪裕司（META＋MANIERA）

印刷・製本　加藤製版印刷株式会社

ISBN978-4-04-867130-9 C0193

電撃文庫創刊に際して

　文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。
　その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。
　文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。
「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。
　その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。
　しかし、〈Changing Time, Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

電撃文庫

銀色ふわり

有沢まみず
イラスト／笛

ISBN978－4－04－867130－9

雪が降りそうな冬のある日。僕が出会ったのは、誰からも知覚されず、誰のことも知覚できない〝黄昏の子供たち〟と呼ばれるひとりの少女だった……。

あ-13-23　1617

ラッキーチャンス！

有沢まみず
イラスト／QP:flapper

ISBN978－4－8402－4123－6

疫病神から転職したばっかりのかわいい福の神・キチと、日本一不運な〝ごえん〟使いの高校生・外神雅人が贈る、問題いっぱいの学園ハッピーラブコメディ！

あ-13-20　1528

ラッキーチャンス！2

有沢まみず
イラスト／QP:flapper

ISBN978－4－8402－4170－0

雅人の想いをかなえるために、福の神のキチはかわいい二之宮さんとの仲を取り持とうと一生懸命がんばるが……。でもね、キチ？　それでいいの？

あ-13-21　1550

ラッキーチャンス！3

有沢まみず
イラスト／QP:flapper

ISBN978－4－04－867057－9

雅人と一緒にいるだけで幸せ♪　でもキチには、どうしても叶えてみたい望みが一つあって……。福の神キチとごえん使い雅人のハッピー学園ラブコメ、第3弾！

あ-13-22　1596

いぬかみっ！

有沢まみず
イラスト／若月神無

ISBN4－8402－2264－9

かわいいけど破壊好きで嫉妬深い犬神の少女ようこと、欲望と煩悩の高校生、犬神使いの啓太が繰り広げるスラップスティック・コメディ登場！

あ-13-4　0748

電撃文庫

いぬかみっ！7
有沢まみず
イラスト／若月神無
ISBN4－8402－3129－X
ヘンタイ魔道師・赤道斎の野望を阻止するため、啓太とようこは大奮闘!? しかも封印されていた大妖狐も復活しかけ……。ご存じハイテンション・ラブコメ第7弾！
あ-13-11 1134

いぬかみっ！8 川平家のいちばん長い一日
有沢まみず
イラスト／若月神無
ISBN4－8402－3236－9
ついに封印を破り、ようこの父・大妖狐が復活を遂げた！ ヘンタイ魔道師・赤道斉と、ようこ、啓太、薫の犬神たちの三つ巴の壮絶な（?）戦いが始まる！
あ-13-12 1185

いぬかみっ！9 ハッピー・ホップ・ステップ・ジャンプ！
有沢まみず
イラスト／若月神無
ISBN4－8402－3396－9
何でも願いが叶う秘薬を巡り、薫の犬神たちとようこが大バトル。果たして勝者となったのは？ ますますハイテンション。全5編十コミック1編収録！
あ-13-13 1254

いぬかみっ！10
有沢まみず
イラスト／若月神無
ISBN4－8402－3517－1
カオルと始めた新生活。でも恥ずかしがり屋の彼女はなかなか心を開いてくれない。そんな川平家に、バラバラになった犬神たちが帰ってくる！
あ-13-14 1302

いぬかみっ！11
有沢まみず
イラスト／若月神無
ISBN4－8402－3603－8
「ずっと前からあなたのことが好きでした」──啓太のもとに届いた一通のラブレター。いったい誰が啓太に!? この手紙を巡り、熱き女の戦いが始まる！
あ-13-15 1341

DENGEKI BUNKO

銀色ふわり

有沢まみず

電撃文庫

1617



有沢(ありさわ)まみず

昭和五十一年生まれ。牡牛座のB型。『インフィニティ・ゼロ』で第八回電撃ゲーム小説大賞<銀賞>を頂く。最近、自分がデビュー七年目であることに気がついて少し驚く。気持ち的にはまだまだ新人です。

【電撃文庫作品】

インフィニティ・ゼロ①～④
いぬかみっ！1～14
いぬかみっ！EX わん！
ラッキーチャンス！
ラッキーチャンス！2
ラッキーチャンス！3
銀色ふわり

イラスト：笛(ふえ)

ども笛です。目下「Rococoworks」の一員として、原画本職に勤しむ日々です。興味がありましたらそちらの絵も見てください～。

http://www.rococoworks.com

あ、大人向けコンテンツゆえご注意を…、、、

カバー／加藤製版印刷

あ-13-23

銀色ふわり

有沢まみず

電撃文庫 ¥ 570

9784048671309

1920193005707

ISBN978-4-04-867130-9
C0193 ¥570E

ASCII MEDIA WORKS

発行● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 570 円

※消費税が別に加算されます

